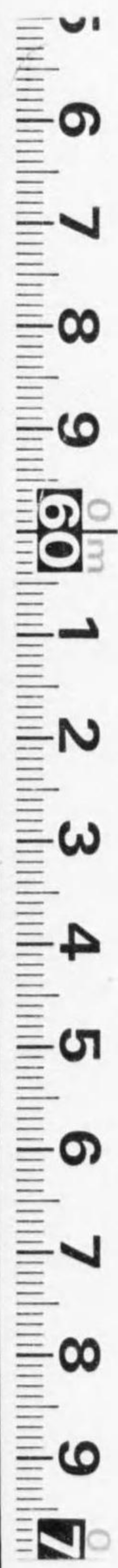


554

2



始



日野郡史  
上卷



日野郡史

上卷

大正  
15. 3. 9  
内交

思能  
知後明  
年會  
且代好

白上鳥取縣知事

長郡野日代歴



正光山小



治祐野天



知義田都



治廉上井



澄江入



郎吉元田吉



良政村稻

長郡野日代歴



員纂編史郡及員役會協治白



室纂編史郡野日



道知島中



一頁島北



介之勇谷萩



一精田松



吉幸橋古



郎太米久松小



向て右より伯耆志寫本 伯州黒坂城物語 郷土史料第二卷 縣誌材料



一 釣節卷懐 (西古家藏)  
 二 宮田長助日記 (松尾家)  
 三 御用日記 (松尾家藏)



下黒坂生田家文書



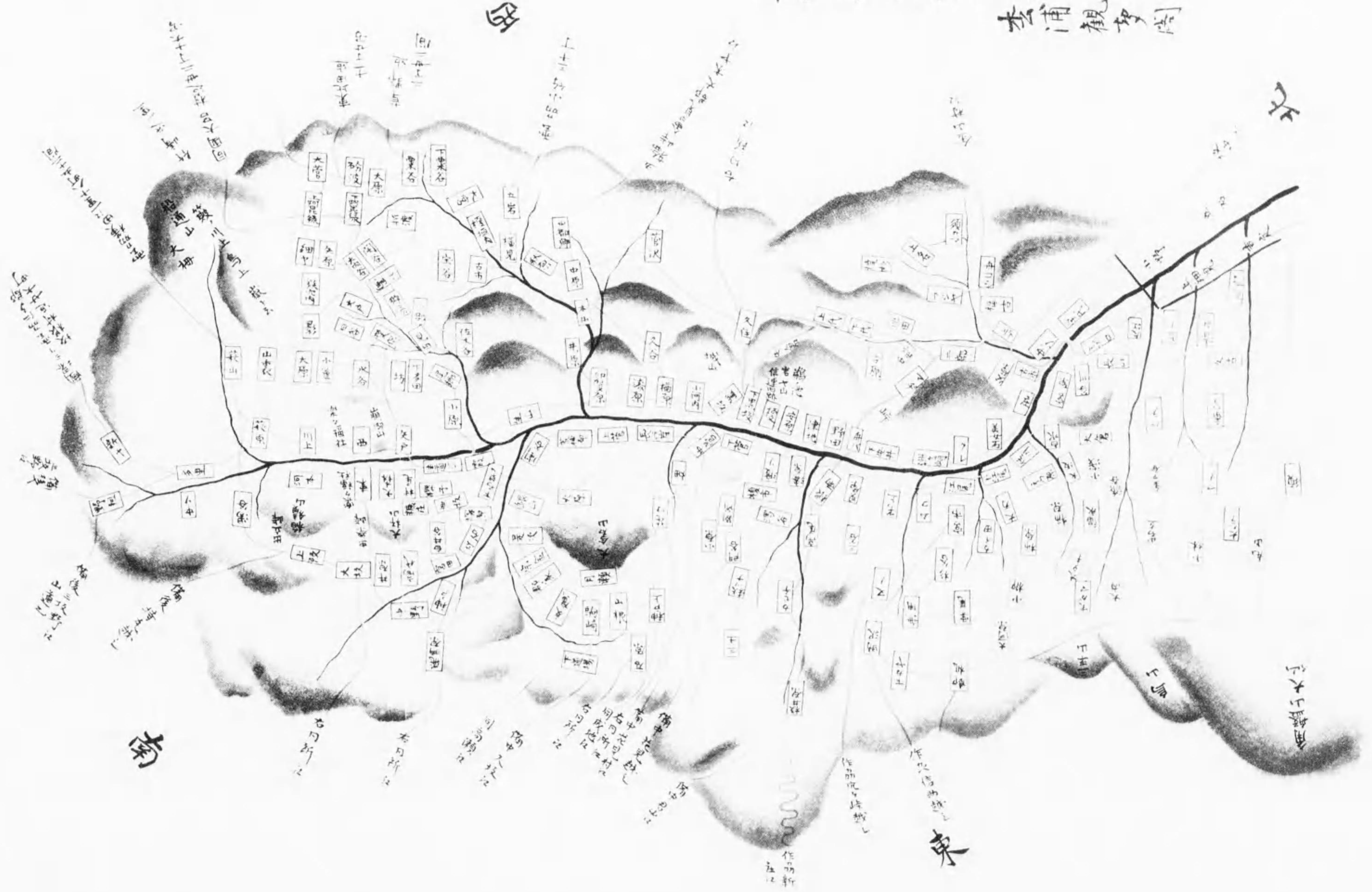




# 露光量違いの為重複撮影

安政四年己未九月迄

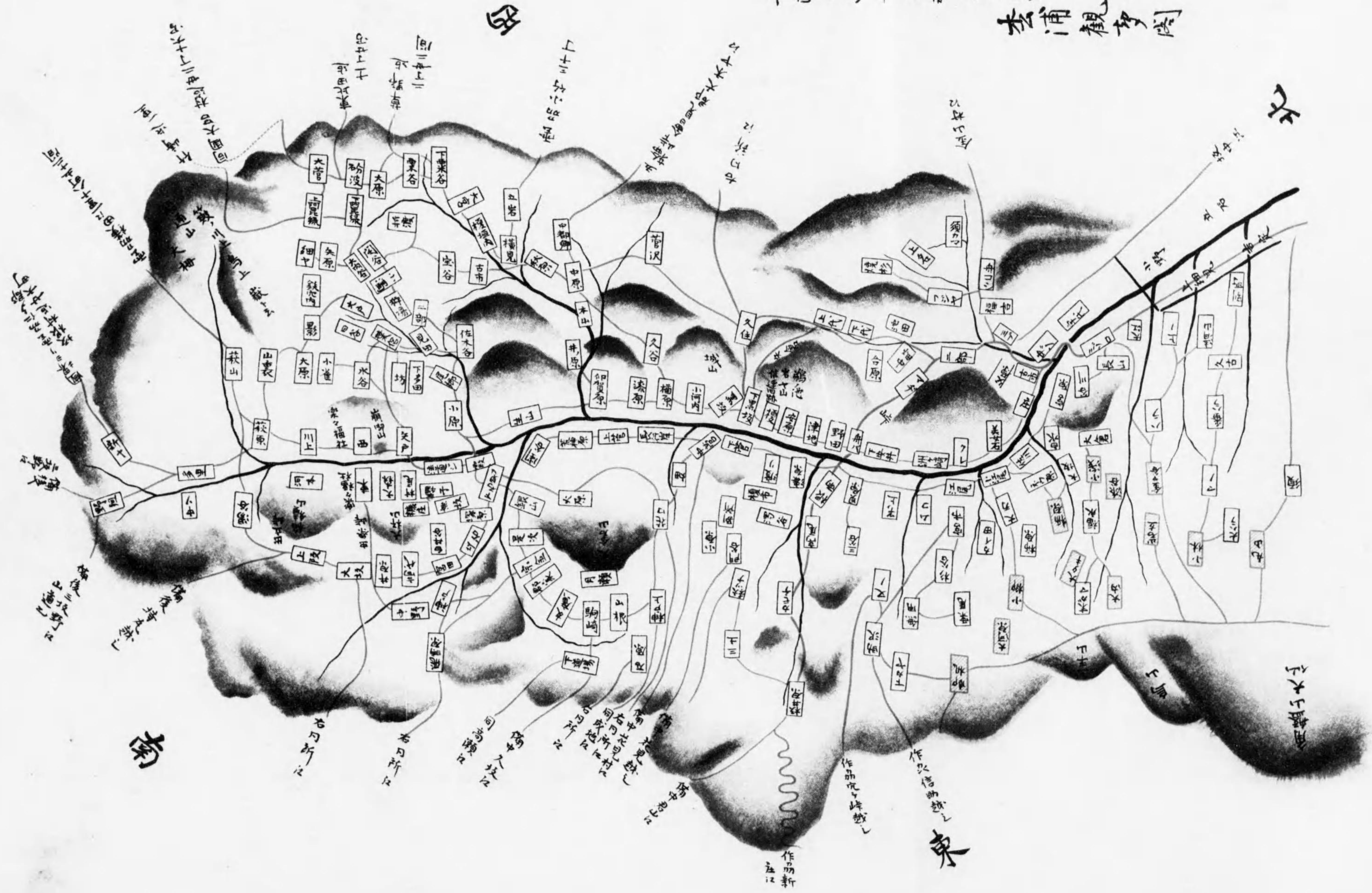
李浦觀夢閣



# 露光量違いの為重複撮影

安政元丁巳歲九月寫

## 李浦觀夢閣



## 序

日野郡正史として文献の見るべきものなきを嘆じ、明治四十四年、郡教育會、時の郡長井上廉治氏に建議せしに端を發し、郡長は日野郡野史の著者坪倉鹿太郎氏を調査員に任命し、次で専任兼任の委員を擧げ、調査を繼續したること數年、大正八年八月、時の郡視學山本徳藏、内藤岩雄、池田茂一郎、宇田清隆、山田和一の諸氏に委員を依囑し。各委員は熱心調査編纂に着手せしが、漸く其緒に着かんとするの時、山本郡視學の轉任に亞で、山田委員の夭折を見、而かも得たる資料は斷片的にして系統なく、加ふるに經費貧弱、前進閉塞の状態に陥り、一時史筆を擲ちて沈頓茫然たるものありき。然れども現委員等は、自己の使命は、此史實に富める我郡に直面して、進行を躊躇するに忍びすこなし、燃ゆるが如き強烈なる責任觀念の下に、育英教化の傍ら、萬難を排し、百折不撓、千挫不屈、銳進止まざるの慨を抱き、事業を繼續すること數年、惜い哉大正十二年の度、郡制廢止の厄に遭ひ、其進行を中止する

の止むなきに至れり。大正十三年八月、郡自治協會は、現委員等の考古研鑽に興味を有し、造詣深遠、加ふるに其の熱心忠實の態度に動かされ、此儘中止未定稿を筐底に葬むるは、我郡の將來に於ける一大恨事となし、更らに同月内藤、池田、宇田の三委員に再囑して、調査編纂を進行するところ、なしたり。該委員等は、有限の經費と匆忙の公職を以てして、克く無限の大事業に努力を拂ひ、爲に修史の難事業も、漸く系統立つるを見るに至れり。即ち日野郡野史、舊名家秘藏の古文書類、鳥取縣誌材料、伯耆誌類、其他關係深き各研究物の涉獵に努め、又一面實地山野を跋涉して、史跡名勝の探查を行ひ、妄りに斬新奇拔を銜はず、不確の臆説を避け、考證の明確を期し、以て我郡變遷の顛末を闡明にせり。今や脱稿す、宛も大旱望霓の感なくんばあらず。實に創始以來十有五年の久しきに亘る、各委員献身的の奉仕に對しては、郡民と共に、深き感謝と敬意を表するものなり。

本書は前、中、後の三編に區分し上下二卷に納めたり。而かも編纂に一種の新機軸を出し、其順序配列の如き、趣味多くして記憶に利便する所甚だ大なるを知る。眞に本書によりて、我郷土の敬愛心を喚起すること共に、其の偉大なる歴史の所有者なることを自覺し、之に依りて大に悟り大に發明するを得ば、郡利民福の上に齎らす貢献は勿論、郡民性の扶植に向つて、偉大の効果あること深く信じて疑はざる所なり。聊か本史編纂の經過概要と、所懐の一端とを述べ、以て卷頭の辭に代ふることに爾り。

大正十四年十月

日野郡自治協會長 古橋幸吉

## 序

修史のことは難事中の難事なり。従つて多くの経費と長き年月と、該博なる學識とを要す。加之、文献の徴すべきもの豊富にして、専心之れが整理に没頭するの餘裕なかるべからず。もしこれらの要素を缺がんか。徒らに魯魚の誤を後世に傳へ、先人をけがし、後人を累するに終らんのみ。不肖等乏しきを日野郡史編纂に受けて、爾來七年日夜育英教化の激職に従事するの傍ら、これが完成を急げりといへども、参考書乏しく、僅に、無系統に集め來れる斷片的の材料を以て、編纂序次を立てざるべからざるが如き有様にて、幾度か筆を擲ちて長大息したりき。かゝる状態を以てして、業漸く緒に着かんとするや、委員山田和一氏の逝けるあり。更に委員山本郡視學の轉任するあり。事情纏綿、維新前の全部は、内藤岩雄、宇田清隆兩人の肩にかゝり、維新後は池田委員の專擔となる、重荷に加ふるに重荷を以てし、任厚くして道遠きの感ありき。かゝる内にも暗中摸索の憂目を見つゝ、更に勇を鼓して進む内、荆棘自ら開けて多少の光明を認むるに至りぬ。嬉しやと思ひしも一時、忽ちにして、從來集められたる材料は、全系統のたゞ一部分に過ぎず。到底整然たる歴史として織出さるべくもあらず。更に進むに従つて、枝には枝を生じ、分派また分派。新に調査せざるべからざるもの頗る多く、郡内學校及官衙を煩すといへども、調査意の如く進まず。自ら直接に調べんには、時と金とのなきを奈何にせん。先以て學校、諸官衙の調査せるもの、先人が研究せるもの、吾等が年來趣味として集録し、筐中に藏せる材料等を、出來得る限りに於て、系統的に編述しつゝ、最後迄調査の手を緩めず、なほ不完全の部分はそのままに存して、後の研究にまつこととし、努めて忠實に、何等臆測推斷を加へず、

ありのまゝに書き終りたるが本書也。

こゝに本書を公表するに臨み、以下本郡史の成れる由來を記し、一は本書に材料を提供せられたる先人の苦心に酬い、一は修史事業の容易ならざりしを忍ばんとす。本郡に郡史の必要を呼ばれたるは、蓋し頗る遠しといふべし。聞く、明治十四年、山根幸史氏、島根縣囑托（當時本郡は島根縣管轄）により、凡そ三十日間、郡内を巡回調査し、凡六十日にして成れる縣誌材料なるもの一卷を作れり。考證見るべきものありて、頗る要を得たり。蓋し幕末、伯耆誌の著者景山肅（雍郷）氏が調査私選し、ついで、飯田、小谷、門脇三大人が、藩命により伯耆史（日野郡未完）を官選せし以來、始めての試みなりしなるべし。ついで明治二十五年奥村弘道氏、伯耆各郡を巡回して、主として、陣屋に關すること、お高、物成等の調査をなしたることあり。もとより本郡史編纂の目的を有したるにはあらざれども、こゝれまた郡史に關係なくばならず。明治三十年の頃内藤岩雄、全郡踏査に志し、古墳、塔類の研究をなすあり。ついで宇田清隆、黒坂村を中心とせる郷土資料の研究につとむるあり。各學校は故田員定太郎氏等を先覺者として、郷土史、學校沿革史に手をつくるあり。この間、前後相通じて、獨力、可成的郡史材料の探究につとめたるものを我坪倉鹿太郎氏とす。日野山櫻は此間に於ける材料の一部を發表せるものに係る。偶明治四十四年

日野郡教育會に郡史編纂の議おこり、郡長に向つて建議するところあり。時の郡長井上廉治氏、また嘉んでこれを採用し、郡會にはかりしに、郡會はこれがために、先づ明治四十五年度に於て、編纂費二百圓を計上し、大正二年一月に至り、郡史調査委員として、坪倉鹿太郎氏を擧ぐることにし、爾來

氏は一ケ年餘、從來の研究を經とし、豊富なる經驗を緯として郡中を巡回し、一意これが探索につとめたり。然るに郡長入江澄氏は、その事業の進捗遅々たるを遺憾となし、坪倉委員の囑を解き、ついで杉原猪作氏を入れて、後繼事業の整理にあたらしめたり。その間凡二ケ年なりき。この間坪倉鹿太郎氏は故山に蟄居すること三年、往年、個人として集輯せる材料に、更に踏査研究せるものを加へて、日野郡野史なる編年體の史料三十五卷（附録一卷）を編纂し、素志貫徹するや、これを郡に献納せり。時の郡長松田精一氏これを納れ、郡會また二百圓を支出贈呈して其の勞に酬いたり。

本書が該野史に負ふところ頗る甚大なるは言ふをまたず。本書中、神社、寺院、城址、古墳、鐵山等に關する部分は野史を採録せるところ尤も多く、その他野史記載の旨附記せる材料（中には繁をさけて原文のみをとれるものもあり）は、悉く野史にとれるものにして、到底一朝一夕の限定的事業として成し得べきものにあらず。

大正六年、根雨町塔利八郎氏の陰陽八郡々勢一班なる著書を公表するあり。かくて一面、郡史編纂事業は杉原氏の手を離れて、大正五年、郡長北畠良一氏の時代、山本長次郎、三橋豐藏、福士憲二三氏等委員となりしが、調査意の如くならず、進展遅々として抄らざるもの數年。其後北畠氏を繼げる松田郡長は、郡會に謀るところあり。大正八年八月現委員三名の外、山本德藏、山田和一二氏の献身的奉仕に信賴すること、せり、吾等元來、淺學不才、到底其の器に非らざるを知るも、從來の經過に憤慨し且つ發奮し、大膽にもこれを引受け、直ちに編纂の方針をたて、夫々部門によりて配當し、着々材料の整理、本文の編述に従事せり。

然るに冒頭に縷述せるが如く、歩をすゝむるに従ひ、材料の缺乏は甚しく、参考とすべき書物乏しきが爲、事業意の如くはかざらず、經費僅少なるが上に、その支出にも支障多く、社會は本事業最初よりの責任を我等に歸せん計りの口吻をもらし、加之前述の如く委員の減少するありて、四面楚歌の内にも、我等の趣味は一縷の望をつなぎ、責任感絶えず我等に鞭撻を加へて、ともかくもこゝまで漕ぎつけたるものゝ、その出来頗る貧弱にして、世の期待にそむくもの多きを恐る。稿殆ど成りて、郡制廢止せられ、自治協會の手に移るに至りては、反て經費の潤澤と、自由の空氣に充たされ、事業者々として進行せり。今や稿了らんとするに當り、本書の恩人坪倉米山、同人山田和一二氏既に逝き編纂を我等に托したる松田郡長また既に亡し。轉た感慨無量の感なくんばあらず。

本書最初よりの編纂經費は

郡制時代に於て 約一千八百圓

自治協會時代に於て 約二千八百圓

を要し、其間當局の苦心容易ならざりき。

こゝに本書の由來と本書編纂の經過とを記して、本書閱讀者殊に郡民諸氏の諒解を乞ひ、併せて後人の批正と追加とを待つ。

本書が幸に、本郡先人の遺跡をあらはすと共に、本郡民諸君の自覺を促がし、本郡發展上に多少の刺撃を與ふるを得ば、當に編者の喜びのみにあらざる也。若し夫れ地方史としての参考となるを得ば望外也。

本書を編纂するに當り、本郡役所員各町村役場員學校教職員及本郡史の爲めに、歌謠、史實、史料、談話等有益なる材料の提供に努められたる郡民諸氏が、本書編纂のため極力誠意を以て貢獻せられたること、郡制廢止後、日野郡自治協會役員諸氏が、編纂事業に十分の諒解を以て、甚大の援助を與へられたること、及び日野郡農會監事岩田熊三郎氏が本書脱稿前公職の傍ら、寢食を忘れて有益なる助言を與へ、尙又自ら筆を取り、増補に努められたること、此の外杉本畜産技手等の厚き同情と援助とを感謝す。

本書原稿の清記については、厩利郡治、田川章成、川上祐二、柴田清の四人、奮勵頗る力め、寫眞については、山浦照馬、田村秀隆、畑田金太郎、高木國定の四人、東奔西走撮影の事にあたり。本書の印刷製本は、京都市株式會社似玉堂之れに當り、之れが校正に就ては、池田宇田兩委員京都に出張延日數約四十日晝夜其の勞に服せり。

大正十四年九月十日

日野郡史編纂委員

内 藤 岩 雄

池 田 茂 一 郎

宇 田 清 隆



## 凡 例

一本郡史はごままでも史料本位にして、些の修飾を用ひず。所謂述べず作らざる態度を以て、修史のことにあたり、先人の研究、實話、感想談、根本史料は及ぶ限り輯録保存することにつとめたり。これ本郡史の特色ともいふべく、該編纂の根本方針にして、或は時に蠟を嚙むの感なきにあらざるべきも、系統を追ふて蕪味、熟讀せば、其間趣味の湧出するを覺ゆべし。

一材料の取捨選擇については、最善の努力を盡したる筈なれども、全系統上より見て材料不足せるところは、日本歴史上にとりて補綴するの止むなきものあり。これ一面地方史を全國史系統中に織込む手段として無用なりといふべからず。併、可成全國的材料の竄入を避くる態度をとれり。又時には些細なる材料をもとり入れて、せめてその當時に於ける俚を忍ぶ料とせしものもあり。

一本郡史選述の立場について一言せんに、まづごままでも、郡に立脚して、郡として重要な事件は、細大漏さじと努めたり。故に中央より見れば、價值少き材料もあるべく、はた低位のものもあらん。又時に或は荒誕無稽なるもの、或は繁鎖重複の嫌ひあるものもあれども、史料出所の異なるものは、該史料の裏書として、將、後日研究の料に資せんがため、細字を以て採録せり。要するに最初の郡史として、その完璧を期せんよりは、あらゆる材料に系統附くることを眼目とせり。

一全部にわたりて遍く材料をとり、厚薄なからしめんと努めたれども、文献多き所は自然に他の代表として採用することとなり、調査材料の乏しき所は自ら疎漏となれる點なきにあらず。他意あるにあらず。こゝに我等は日記其他の方法によりて、文献を後世にのこされたる人々に感謝の意を表せざ

るべからず。

一全郡の史料悉く盡せりといひ難かるべく、或はまた我等の見おとしたるものもあるべく、人物に於て事績に於て、これ以上のものにして脱漏せるものもあるべく、或はまた權衡上削除すべきものなしとはいひ難し。編者は唯文献を主とし、口碑を補として、選定したるに過ぎざるを以て、各方、各個別につき、一々細密の打合をなす時は、異議百出せんも知るべからず。著者は、讀者が、尤も公平忠實に校正の勞をこられんことを望む。

一社寺については、主として、郡役所保存の官定臺帳によりしを以て、現状と齟齬するものもあらん。一参考書及古文書中の重なるものを擧ぐれば

黒坂	松尾家文書	同	三輪家文書
同	黒坂校郷土史料	同	泉龍寺文書
上菅	小谷家文書	同	宇田家文書
黒坂	梅林家文書	同	西古家文書
同	矢田貝家文書	同	長谷部家文書
同	出店緒形文書	久住	山縣家文書
下黒坂	生田家文書	石見	相見家文書
同	多田家文書	花口	田邊家文書及年々書留覺帳
霞	久世年來記	宮内	入澤家文書

矢戸	曆利文書	同	入澤代宮屋文書
同	神宮寺文書	生山	上段塚家文書
山上	坪倉普屋家文書	同	坪倉富田屋文書
同	森脇青戸家文書	同	山上村史料
同	坪倉米山著日野郡野史	茶屋	内藤家文書及日野郡研究
茶屋五反田	青戸文書	印賀	青砥家文書
寶谷	井上先祖日誌	日野	舟越家文書
下榎	長谷部家文書	二部	足羽家文書
野田	飛田家文書	根雨	近藤家文書
同	松尾家文書	同	同
板井原	吉岡家文書 <small>(歳々萬覺一、元文元年以降 日記三冊二、安永六年以降 三、文化七年以降)</small>	大河原	吉川家文書
金澤	益田家文書	下蚊屋	小椋家文書
日光	内藤家文書	同	松原家文書
其他各村舊家斷翰零墨一々不舉		同	神社明細帳
神社財産臺帳		同	寺院明細帳
郡役所保存書類		同	鳥取縣史料書類抜抄
鳥取縣誌材料 <small>(日野郡役所々々藏、引用書豊富、殊に本郡人多田信濃著伯耆談(現今紛失)を引用せるは珍とすべし)</small>			

陰陽八郡郡勢  
各 學 校 史

編者曰右文書中吉岡文書即歳々覺帳生田文書は尤も尊重すべく、久代年來記、田邊家年々書留覺帳、亦先人の誠意に對し深く敬意を拂ふべき也。庄山段塚家文書、黒坂本家緒形家文書と二部本家足羽家文書は、本郡文化史上尤も重要な地位を占むべきものなるに、今多く湮滅せるは頗る惜むべし。

一殊に舊家名家に至りては、その選頗る困難にして、崇祖の風は、遂に系圖僞作の弊風ある我國に於ては、本郡の如き純朴の民にも僞造系圖をほこらしむるに至り、得てその真相を知るべからず。思ふに本郡内にて舊家と稱せらるゝものも、所謂尼子時代より以後は眞を置くに足るべきも、その以前は多くは到底信じ難きものなるが如し。よりて各村々長に信頼し、萬人がみとめて舊家なりとする家にして、十代以上のもの、及舊家にあらざるも名家といはるゝものは、併せて選定を乞ひ、舊家名家として採用せり。然れども現今已に衰微して或は子孫愚昧のため、その世代の明かならざるものもあり。現在は已に亡びたるも、舊家として、本郡開拓の恩人として、是非共記載せざるべからざるものなごあらんも、各村調査者の態度及研究程度等によりて異なるべく、及ぶ限り慎重なる態度をとりといふに止めん。とにかく系統に屬することは、感情的に走り易き事柄ゆゑに、讀者亦虚心坦懷批正に當られんことを。

一年代も亦往々定め難きものあり。たごへば關一政が庄山より黒坂に轉居したるは、慶長三年説と慶長十五年説とあるが如き、參考書乏きを以て、確證を擧げ難きも、藩翰譜、樵濯集、黒坂開元記等を考へ合せて、慶長十五年説を採れり。(生田家文書のみ三年説)又大阪鐵座の設けられたることにつきても、安永九年九月より丸七年間とあるよりすれば、天明七年迄とすべきに、ある材料は、天保とあつて、その間五六十年に及ぶが如き、寶曆十一年の巡見文書には六月とあるに、吉岡文書には三月とある等、或は開書の誤もあるべく、或は誤字、或は誤寫、或は編者校合の誤謬もあるべく、更に一段の校正を要するもの多々あるべきを信ず。後日を期して、本家大阪につきて、鐵座の根本研究をなす等各方面の批正の機あらんことを待つ。これ亦讀者多數の細密なる注意によりて正誤せられんことを祈ること切也。

一古墳殊に五輪塔類の分布につきては、調査洩れのもの必ず少なからざるべく、或は又湮滅したるものもあるべく、これによりて大體の分布を知り得れば足れりとせん。

一太古、上古に對する本郡史の研究は編者が僅かに、研究の緒をひらきたるに過ぎざるを以て、或は大膽に失するなきやを恐るれども、現今の學説上、著しき不都合はなきものと信ず。考古學と歴史傳説との交渉についても相當の考慮を拂へり。中古史中、日野郡六郷の如き、その位置について、吉田博士の大日本地名辭書中の所論に背むくが如きことあるも、吉田博士は、阿太、葉侶、神戸、等につきて、足親しくふまれたることもなく、また地名(小字名)すら承知せられざるものもあるやうなれば、郷土研究上、我等土着人の權威として敢て憚らず所見を述べたり。地方史研究上の興味も、貢獻も、かゝる點にあるにあらずやと思ふなり。

一郡史挿入の人物、遺蹟、遺物、名勝等の寫眞は、可成全部全村にゆきわたるやうに、而も郡史全體より見て、重要なものをもらさじとつとめたる筈なれども、種々なる都合上割愛せるものも亦尠からず。

一本書全編に亘り、多少文章の色彩に相違あるは、分擔法によれるによる。大體に於て平易なる文章語を以てすること、し、脱稿の上同一人によりて、目を通し、多少の統一をはかりたるつもりなり。文章も時代の趨勢に鑑み、口語文にせんかごもおもひしが、一般の例にならひて、平明なる文語文を以て綴ること、せり。

一全部を三篇に分ち、前篇、中篇、後篇とせり。然れどもその間材料によりては、便宜上大正十四年に亘り、又互に前後篇相出入せる所あり。

日野路案内

神代の昔素盞鳴の  
劍獲してふ西さす  
杣の一葉にさも似たり  
本を東に仰向けよ  
支葉脈こそ支川なれ  
山々つゞき全郡は  
北の方のみ山開らけ  
郡の東西十三里

神の命が叢雲の  
日野の郡を喻ふれば  
此葉かしら西となし  
眞葉脈は日野川ぞ  
西も東も南も  
分水嶺に圍まれて  
河川集り流れ出づ  
南北五里餘面積は

八十二方里之をしも  
百十九にぞ分ちたる  
溪谷深く霧とさす  
右に左に屏風なす  
春は櫻の花の雲  
秋は紅葉のあやにしき  
四季折々の眺望は  
巡りて實地を見るもよし

坪倉米山作  
二十二ヶ村大字  
連山高く雲に入り  
中を流るゝ日野川の  
山々つゞきつらなりて  
夏は青葉の深き山  
冬は野山の雪けしき  
いづこの里にも澤なれば  
知られん人は思ひ出の

便りの繩にひけよかし  
神の火により開けしと  
農は御國の本なりと  
澤を開きて稻を植ゑ  
粟黍稗を蒔き付けつ  
拙かりける民草も  
座土神の廣前に  
鏡の餅の美しき  
粳米も亦似かよひて  
大むかしより此土地の  
金屋子神の教へにて  
鐵と鋼を吹き出し  
萬の鐵器につくりなし  
古來當郡の鐵類は  
次に起りし牛飼ひ  
神の教へに鼻木指し  
次第になれて田作の  
高めしいさを幾許ぞ  
野山は草の生ひ茂り  
馬も肥りて瓢箪の

抑日野は加具土の  
鷹の神話に傳へ開く  
神の教へに隨ひて  
蒗棘を刈りて焼き拂ひ  
草地耕し豆蒔きつ  
しけりに繁りいや進み  
ささぐる心うつるなる  
粘氣強く味もよし  
飯のあぢはひいとらまし  
眞木と鏡とに富めるより  
踏鞴を構へ技練りて  
寶劍名刀始めとし  
靈妙銳利の偉功あり  
日本一とぞ稱せらる  
野牛捕らへて保食の  
めで慈しみかひしかば  
業を助けて生計を  
さて又神の恵にて  
盡きぬ秣におのづから  
口より馳も出むとぞ

天照神のみちびきに  
糸とる業もいやすゝみ  
春蠶夏蠶にまた秋蠶  
取込金のいやますは  
近頃はまた奥山の  
移出の高も夥し  
栗の實櫃の實山の芋  
口日野はまた里ごとに  
人身無害ととなへつゝ  
是に并ひて唐人の  
作りて賣出す人多し  
巡りても見むいざ來ませ  
久古植松の兩神社  
里坊屋敷の城のあと  
佛の誓ひたのまなむ  
里に廣きは千町田よ  
おのづと素直に生ひたちて  
伐りて刻みて矢倉積み  
眞野に名高き磨き砂  
今も變らぬ丸山の

蠶飼の業も開けゆき  
文明開化にひかれつつ  
年々多く飼ひ上げて  
國を富ますの一助なり  
白炭黒炭世に出でて  
奥日野にては香茸や  
踏鞴の業をほこりとす  
煙草作りの盛にて  
脂ぬき千しの名も高し  
病を癒やす人參を  
是より村をつぎゝに  
大神の山の麓なる  
丸山神山に詣でつゝ  
今に變らぬ善福寺  
御牧の跡の大原の  
此わたりなる赤松は  
千歳も盡きぬ松ばやし  
移出の薪に名を得たり  
昔は國守の御用品  
芹川岸と小林の

辛し大根の味はひは  
西にすゝめば岩立の  
壺里下りて溝口は  
警察分署置かれたり  
日野川鮎に福豆腐  
汲むとも盡きじ月の影  
續く高ねの雲霧に  
山の麓の宮原に  
谷川にては道寧寺  
添ひたる道を江尾宿や  
此道すじを昔より  
また日野川の鬼守橋  
それより西へ溯る  
廣島街道と稱へたり  
宮原牛蒡白水<sup>シラミツクヒ</sup>鹹  
川瀬賑ふ大坂は  
添谷神社ををろがみて  
元弘帝の遺跡あり  
名和氏の昔ぞ偲はるゝ  
味ふものは漬物と

人の忘れぬ名物よ  
岩立神社に長昌寺  
日野入口の小都會  
味ふべきは名の高き  
野坂の酒の玉の井は  
仰げば高き鬼住山  
峯包まるゝ笹つとめ  
樂々福神の社あり  
そも此地より日野川に  
根雨の町經て板井原  
出雲街道といひなせり  
渡りて二部宿黒坂へ  
日野川沿ひの縣道を  
名物問へば谷川柿  
何れも味佳良なり  
五倍子<sup>ゴハヒ</sup>に名高し長泉寺  
大内に入れば長くも  
船上山の夕あらし  
音に聞けし大瀧に  
清き流れのうだ芹よ

是よ東に進み行き  
爰に澄める王清水  
ならひぞ古き柳かけ  
元弘帝に供御上げし  
今に守れる正月の  
風味のよきは此處の獨活<sup>ウド</sup>  
元弘指導の碑の表  
爰にて製るうつはもの  
心をつくす花と鳥  
少し下りて助澤の  
貝田の柄杓山めんこ  
下に降だれば宮市の  
飽かぬ眺めに立とまり  
宮市神社伏拜み  
山葵椎茸殊によし  
參りて出づる道のへの  
武庫と云へるは和名抄  
武庫神社また萬福寺  
下安井より洲ヶ崎へ  
昔を問へば江尾宿は

吉原神社に參拜し  
大山詣のみそぎする  
忝くも御机は  
因縁深き村の名よ  
團子の例ぞ美しき  
下り蚊屋なる明神の  
文字の欠けしぞ恨みなる  
沈金彫りの小刀に  
又珍らしき獨活の味  
正平塔もをがむべし  
是も此地の工座品  
如來の原の四本松  
心すまして向ひなる  
俣野の奥のさ蕨や  
熊野の神源泉寺  
俣野の川の落合の  
日野六村の中なりき  
詣でゝ祈る身のさちを  
久連の美女右名も高し  
江美の城下の小都會

江尾の神社に東祥寺  
寺の前なる老松に  
こゝの名物菅の笠  
佐川に出づれば先づ拜む  
光るは彌陀の尊像と  
下に降りて舟よびて  
庄の社に光音院  
野上の川の落合の  
寺ならなくに眺むれば  
三部地方は昔より  
日野六村の内なるぞ  
外構城下の福吉に  
福居の山の藤屋なる  
世に紫の名ぞ高き  
守りも厚き上代神  
近藤鐵部の事業なり  
二部の神社に傳燈寺  
税務署農會さてはまた  
爰より間地の峠越にて  
日野眞住兩川の

古色蒼然殊にまた  
此地のながめいやまさ  
葉煙草收納所あるところ  
佐川神社に東光寺  
庄の頭の發電所  
日野川渡庄の里  
庭の櫻も見て行かむ  
名も古市の海藏寺  
感慨無量稀勝の地  
野上と云ひて彼の古き  
爰に野上山長龍寺  
福吉神社鎮座あり  
花の邑濃き水品は  
誰も祈らん福岡の  
福岡山の煉鐵は  
下ればここは二部宿よ  
郡治を統ぶる郡役所  
組合事務所二部金庫  
舟場渡れば根雨の町  
落合ふところに巒蒼と

青木が峰の根雨神社  
賑はふ町の名物は  
日野川鮎に鹹の魚  
唐の八仙家舌つづみ  
近織氏の醋酸場  
根雨銀行の設あり  
遊樂の地も數多あり  
月は更なり春の花  
寶佛の山多武の峯  
金持に入れば忠勇の  
金持景藤義を唱へ  
名和氏の勢に加はりて  
功は史に明らけし  
大要害小要害  
板井原には後鳥羽院  
この地の社に參拜し  
登る大路は黒坂經て  
是ぞ玉島街道なる  
掘神社ををろかみて  
加茂の神社に光明寺

聞くもゆかしき延曆寺  
祇園饅頭に菅の笠  
勝田の酒の蓬萊に  
中國風指の製鐵家  
郡是製絲の工場また  
商業盛の都會にて  
涼みに名を得し祇園橋  
秋の紅葉も居ながらに  
眺めはいつもあかぬなり  
長谷部信連謫居の地  
同志三百諸ともに  
船上山に名をあげし  
尙も進みて此道を  
右と左に見てのぼる  
元弘帝の遺跡あり  
根雨に歸りて日野川を  
石見の月瀬谷田峠<sup>たんだたは</sup>  
渡りの奥の奥別所  
榎市下り本郷の  
をろがみかへる道のへの

岩間に湧出る真清水の  
 降りて舟場に打渡り  
 川瀬の音の正音寺  
 下榎なる山奥に  
 また此里の山本に  
 壽水の昔勤王の  
 こゝに移りて七百餘年  
 遠祖の邸に彰徳碑  
 是より西へさかのぼる  
 矢倉峠の右に在り  
 眞鯉緋鯉も詳れあそび  
 中畑とへばそのかみの  
 玉島街道に沿はりたる  
 瀧山神社龍王瀧  
 遠き里にもひびくらん  
 郡中一の都會にて  
 福田丹波支配の地  
 城下のむかしきながらに  
 聖の社藤森や  
 中に名高き泉龍寺

音に響きし清水茶屋  
 黄壁越幾斯は名物ぞ  
 野田津地さて又安原や  
 閑雅極まる長樂寺  
 嚴島神の社あり  
 長谷部信連金持より  
 由來詳しく書記し  
 建てしは家の譽れなり  
 下黒坂の鶴の池は  
 水面四萬と九千坪  
 山水の興いと深し  
 不動が嶽の古戰場  
 瀧山公園其中に  
 玉散る音のいや高く  
 坂を下れば黒坂よ  
 藩政中は鳥取藩  
 世は遷れども鏡山  
 警察署をば置かれたり  
 姫宮神社寺四ヶ寺  
 因幡二十士幽居の地

爰に眞鐵を吹きそめし  
 金屋子神を祀りたり  
 阿毘縁に入れば尊しや  
 由緒も深き神佛  
 當地は郡中第一の  
 夏はおのづと風清く  
 年久しくも此里に  
 公事にあつき村長の  
 織り出す業の手になれて  
 うね道こそば茶屋の里  
 大内谷には常桂寺  
 福万來狩場の王代城  
 傍に祀る尼子の臣  
 南に行けば葉侶あり  
 夫より笠木日谷の社  
 大原父子の鍛冶の跡  
 巡りて見つゝくさゝくの  
 物産間へば花崗岩  
 とげの小楊枝笠木午夢  
 谷中下りて日野河上

踏鞠の跡に今もなほ  
 山里道を折り渡り  
 熊野神社に解脱教寺  
 詣でて祈る人多し  
 清潔閑雅の里なれば  
 人の命も長からん  
 物産なきを患へしが  
 心つくしに覺表  
 次第に世間に廣まりぬ  
 矢原と細屋の兩社あり  
 松ヶ峠の忠魂碑  
 大手の方の長樂寺  
 森脇市正が墓しるし  
 日野六村の古き名ぞ  
 光りつきせぬ磐田に  
 山の上富士の麓をも  
 古き昔と又今の  
 牛の鼻ぐり惣松砥  
 古都酒の日山よ  
 菅の原なる多喜川は

美談遺物も數多し  
 今は變りて養蠶の  
 伴ひ進む繁昌は  
 當地の名産蠶種  
 是より登る久住山  
 鳥取侯に納めむと  
 寒氣の強き土地なれば  
 次は小河内薬師の松  
 水に輝やく鏡岩  
 乗り越ゆ橋を打渡り  
 高山神社伏をがみ  
 印賀の川も落合の  
 いよよ榮む菅澤の  
 矢吹の酒の金水露  
 印賀に入れば世にひかる  
 樂々福神社普音寺  
 岩根の床に屏風岩  
 青砥の酒の大泉  
 中に峙つ塔の山  
 里の奥なる阿太上は

音にひびきし酒なれば  
 西と東の兩縣社  
 西には名高き崩御山  
 東に廣き大裏ヶ原  
 古墳の多き塚原や  
 巡りをろがみ此里の  
 腰につくれば身によしと  
 さて又此處の麻の苧は  
 萬に用ひて便利よし  
 是より三榮丸山や  
 山上川の落合を  
 關一政が磯井城  
 構へ緊めし城の跡  
 生山神社に徳雲寺  
 都の花の名残りあり  
 之を巡れる石見路を  
 神戸上なる名に貢へる  
 訪ひつゝ行けば備中の  
 銀杏の巨木に名も高き  
 名家何ぞと尋ねれば

中石見には郡家跡  
 下石見なる靈驗地  
 詣づる人ぞいと多き  
 向に見ゆる永福寺  
 小早川氏の縁起あり  
 詣で、誓をかけはしの  
 中野神社に妙見山  
 豊榮のぼる日野の奥  
 出立峠を打越にて  
 心あらはむ岩の間を  
 深山を出で、此里に  
 壁に用ひて殊によし

郡家神社に参拜し  
 大藏河合の兩神社  
 三吉の塚原龍福寺  
 福塚村の白畑寺は  
 又石泉寺の靈場に  
 橋を渡れば神福の  
 古城の跡も巡り見つ  
 石灰香茸蕎麥の粉  
 湯河の奥の清瀧に  
 走る玉水音清し  
 絶えず製する石灰は  
 こゝの高山稻積は

編者曰この歌は日野郡野史子坪倉鹿太郎が大正五年頃野史編纂中の作にして、村名、神社名、役所、名物等に異動を生じたるもの少からず。されどもこれは反て當時の歴史を語るものにして、極めて貴き史料ともいふべし。材料中、本郡發達の徑路は野史子の史眼を見るべく、名物等によりて、著書の趣味を知るべく、他人の企及すべからざる色彩のあるは、日野郡史の功勞者米山翁を傳ふる一端ともなるべく、殊に野史子が歌人としての半面をも傳ふることを得んとて、本郡史の縮圖たる「日野路案内」歌を採録したりるなり。

### 目次

#### 前序 文 篇

第一章 總 說	一
第二章 地理概説	五
第一節 地 理	五
第二節 地 質	七
第三章 沿 革	二二
第一節 日野郡の先史時代概説	二二
第二節 原始民族	二三
第三節 先史時代の遺物	二八
第四節 太古傳説地	三六
第五節 原史時代概括	三九
第六節 古 墳	四三
第七節 神社分布	七一
第八節 神代記に關聯せる日野郡	七二

第九節 上古時代 . . . . . 七二

第十節 樂々福神社及崩御山 . . . . . 七三

第十一節 吉備津彦命に關係ある諸神を祀れる神社 . . . . . 七七

第十二節 中古時代の日野郡 . . . . . 七八

第十三節 近古時代の日野郡 . . . . . 八四

第十四節 近世に於ける日野郡 . . . . . 一二四

關氏の治世—福田氏の治世—鳥取藩主歴代—福田地頭歴代—福田氏と二十士—噉訴(百姓一揆)及爭論—一清隊及農兵—幕末事情—鎮撫使及藩知事巡視—三大歌人の入郡—天變地異—

第四章 神 社

第一節 總 說 . . . . . 二八七

第二節 縣社二社 . . . . . 三四四

西、樂々福神社—東、樂々福神社—

第三節 郷社五社 . . . . . 三六七

野上莊神社—聖神社—根雨神社—樂々福神社—日谷神社—

第四節 村 社 . . . . . 三八四

二部神社—藤森神社—下菅神社—瀧山神社—菅福神社—樂々福神社—菅澤神社—上阿毘緣神社—熊野神社—下阿毘緣神社—山口神社—矢原神社—細屋神社—多里神社—霞神社—生山神社—福榮神社—大石見神社—石見神社—福成神社—賀

茂神社—堀神社—嚴島神社—安井神社—嚴島神社—高尾神社—三谷神社—金持神社—板井原神社—高國神社—淵ヶ崎神社—神奈川神社—熊野神社—江美神社—佐川神社—宮市神社—山口神社—御机神社—美用神社—幽竈神社—貝田神社—大河原神社—吉原神社—西成神社—山口神社—大瀧神社—日吉神社—添谷神社—大内神社—久古神社—植松神社—丸山神社—山口神社—岩立神社

第五節 無 格 社 . . . . . 五二一

溝口神社—上野神社—嚴島神社—莊神社—大守神社—見出神社—末兼神社—福永神社—山田神社—大坂神社—森脇神社—大歳神社—福岡神社—三部神社—山口神社—姫宮神社—金屋子神社—稻荷神社—稻荷神社—日野郡社領高—神奈岐社—と佐奈目神—神饌幣帛料供進指定神社表—會計法指定神社表

第五章 寺 院

第一節 總 說 . . . . . 五三五

第二節 天台宗寺院 . . . . . 五三九

長昌寺

第三節 真言宗寺院 . . . . . 五四一

神宮寺

第四節 淨 土 宗 . . . . . 五四四

光西寺—淨香寺

第五節 眞宗寺院 . . . . . 五四七

光德寺—西方寺

第六節 曹洞宗寺院 . . . . . 五四九



傳燈寺—長龍寺—光音寺—善福寺—長泉寺—東光寺—萬福寺—源泉寺—延曆寺—龍福寺—光明寺—長樂寺—正音寺—泉龍寺—光明寺—珠福寺—福重寺—永福寺—龍福寺—自照寺—玉泉寺—德雲寺—常福寺—常桂寺—長樂寺—普音寺

第七節 黃蘗宗寺院 . . . . . 五八〇

道寧寺—東祥寺

第八節 日蓮宗寺院 . . . . . 五八三

正法寺—阿毘緣の解脱寺

第九節 伯耆國三十三番札所 . . . . . 五八九

第十節 日野札三十三箇所詠歌 . . . . . 五九一

第十一節 經塚 . . . . . 五九八

第十二節 卒塔婆 . . . . . 五九九

中篇

第一章 政治 . . . . . 六〇七

第一節 上古より織豊時代末期に至る . . . . . 六〇七

國郡の變遷—土地の種別—土地測定—租税制度及財政機關—軍事—

第二節 藩政始斯より廢藩置縣に至る . . . . . 六四三

行政區劃—地方職制—郡政之沿革附大庄屋構—郷庄名と村名—村役人—五人組—役人の待遇—役人最務規律—民衆—御觸書及百姓得—制札場—巡檢使—巡檢に關する文書類—司法警察—役員年表

第二章 經濟 . . . . . 九八三

第一節 石高及地積 . . . . . 九八三

藩領及御給所—大山寺領—石高及地積の諸記録

第二節 戶口 . . . . . 一〇三九

戶口表—現住人口

第三節 戶藉 . . . . . 一〇九六

前編

第一章

總

說

# 日野郡史

## 前編

### 第一章 總說

紺碧の濤うつ日本海を泉水と見て、住なれし所謂高天原なる故郷をあとにしつゝ、一片の獨木舟に一族の生命を托し、雄志勃勃、大陸より島國へ、安住の地を求めけん我等祖先が、先づ安着せし所はそもく何處ぞ。八雲立出雲の國即ち今の出雲伯耆を中心とせる裏日本(そのむかしの表日本)の津々浦々こそその處なれ。就中出雲平野の外廓として、將た神話國引の大綱卷きし樞軸、中國一の秀峯、大神山を以て關門とせる我日野郡は、所謂ヒノ川上地方の一部にして、杉檜の適地多く、檜栗の自然林に富み、殊に日本唯一の純良砂鐵は、無盡藏なるを以て、石器時代を離れんとして、鐵器使用の快味を覺わたる我等の先人が、先を競ふてヒノ川の流を遡り、雲伯の險坂を越え、陰陽分水嶺を通じて殺到し、他に求め難き鐵器も容易に求むるを得て、異民族と輸贏をこゝに争ひし所也。地勢開轄ならざれども、山容頗雄偉、若夫れ川上地方の高原によれば、大山、日本海、呼べば應へんとするものあり。米、亦山巔谿間到る處に能く實り、遠來の米食人を養ふに十分なり。蓋、先史時代より原始時代に亘る我日野郡の繁盛は、想像の外にあるもの、如し。かくて民族大異動の終を告げ、次第に土着期

に入るに及びては、交通の不便と、生活の安定とは、徒らに偷安の風を助長せるものならん。上古に於ては幸に吉備津彦一族の征西あり。日本武尊、出雲梟師の征討あり。王化此地方にも及びたること正史、傳説によりて窺ふに足るものなくんばあらず。其後次第に文化、流入の機會を失ひ、唯武陵桃源の仙境たるの觀を見し大山々麓、日野川沿岸、高原地方に點々群居しつゝ、古墳に名殘を留め、奈良朝に入りては、主として出雲風土記の東南道によりて、陰陽を絡ぎたるも、治績の見るべきものなきが如し。中央集權の實漸くあがれるに及びても、我日野郡の如き、國司も治外に放置したるにや、一社の式内の名神大社すらあるなく、僅に六郷の名にその名殘を止むるのみ。たゞ阿太、葉侶（今の山ノ上）等より出づる鐵鋼のみは重要物として、山夫野人の手によりて採掘製造せられたるもの、如く、野鑪の跡、到る處に残存し、且大原眞守傳説にもその面影を偲ばしむ。ついで平安朝末期に及びては、次第に中央との脈絡通じ始むるあり、無限の富源（殊に鐵）を有する寶庫は、再び開かるゝの機運に際會し、人煙次第に多く、現時文化の源泉、漸く世の認むる所となるに至れり。

我日野郡の名の文献に見わたるは奈良朝時代、天平五年勘造の、出雲風土記仁多郡條に（仁多郡郡家より各堺迄の里程）

通大原郡堺辛谷村。一十六里二百卅六步。（註今の二里十一町五十六間）通伯耆國日野郡堺阿志毘アシビレ山。卅五里一百五十步。常有剗。（註今四里三十三町三十間）。通備後國ユヅマ惠宗郡ユヅマ遊記山卅七里。常有剗。とあるを以て嚆矢とすべし。ついで和名類聚抄に比乃と訓まれ、延喜式五百九十郡（今の八郷は會見日下郷）にも加へられたり。古來區劃の異動少く、近く明治廿九年以後の廢合にも依然として區劃の變更

もなく、舊名を存續して今日に至れり。從て行政區劃上の變遷は、その一部が天領なりしものありしと、維新後たゞ一時、島根縣に所屬したる位に過ぎざるを以て、その沿革を調査するには、比較的便利なりとす。由來本郡は裏日本形勝の地を占むと雖も、土地僻遠にして、而も中國山脈及其分脈中に介在せる交通不便の地なるを以て、前述の如く太古期に於ける先人の活動を措いて、文化上著しき發展のみとむべきものなきが如しといへども、天與の鐵は太古以來永く郡の財源となり、地方文化の傳導體となり、全部の大山林壑に鬱蒼たる杉、檜及び薪炭材は、或は製鐵の原料となり、或は他地方と有無相通の資となり、生活安定の基礎堅固なりしを以て、人情從て一般に朴直、特殊の文化見るべきものありて、發展の素質充實せり。併大體に中央の文化と隔絶し、保元以降、南北朝戰國爭亂の世にも比較的平穩なる生活狀態を持続し、徳川時代に入つては、大多數の民衆は、消極的、壓制政策の犠牲者として蠢動するのみ。かくて明治の聖世となり、全國劃一の政治普及するや、交通の便は開かれ、廣大なる山林は、漸次整理せられ、教育程度亦次第に上進して、經濟上、文化上、他に遜色なき時代は近き、將來の發展、期して俟つべきものあらんとす。以下地理と沿革との兩面より、本郡の大勢を瞥見すべし。

第二章 地理概說

## 第二章 地理概説

歴史は土地を舞臺として行はる。従て沿革を明かにせんと欲すれば、先づ地理を知らざるべからず。

### 第一節 地理

地理的要件即ち地質、位置、地勢、氣候、風土が、人文に影響するは、人の豫想外に出づ。本郡の文化が遅々として進まざりしも、大なる包容力を有するも、係つてこゝにあり。今日野郡野史卷一より引用せん。

郡の地勢 本郡の地質は、水成岩、火成岩、變成岩との集合より成り、原始系統、花崗岩地多くして、火山岩之に亞ぐ。地形は朴の葉の頭を西に、本を東にして、仰向たる如く、東南西の三方は山脈打ち續き、分水嶺を以て、郡界を爲し、北の一方開け、其中を西より東に流る、流程拾九里餘の日野川は眞葉脈、數多の支川は支葉脈に似たり。而して河水西伯郡を経て日本海に注ぐ。東の方郡界に、海拔五千八百五十三尺の大山あり。郡中に又三千六百七十尺の大倉山屹立せり。郡の東西拾參里、南北五里餘、面積四十五方里。之を二十二箇村（編者曰現今併合によりて十八箇町村となる）に分ち、更に百十九（現今も同じ）の大字に小別したり。

郡の氣候 位置は東經百三十三度十分より、百三十三度三十七分に至り、北緯三十五度三分より三十五度廿三分に達す。此中央の寒暖二月最低三十度、八月最高九十度。是より東地は三十五度よ

り九十五度、積雪一尺。又西地は二十五度より八十五度、積雪三尺。故に東西、農業時季に大差あり。東地の田植は六月下旬、收穫十月下旬。西地の田植は五月下旬、收穫十月下旬。或は十一月上旬。寒地は早く植えて晩く採る。暖地は之に反す。草木の花期、東地の草花は三月下旬、西地は四月下旬、東地の櫻は四月上旬、西地は五月上旬、花盛りなれば、花期に従ひ全部を巡回する時は、殆ど一箇月間櫻花を見るを得。鳥類も亦此花期に従ふ。されば東西の人相寄りて語る時、互に奇異の感を生ず。(編者曰此氣候の差異は緯度によるよりも、高低の差の激しきによる點多し。即ち東部溝口の九十五米に對し西部なる石見多里山上、阿毘縁地方は平地に於て約四百米乃至六百米なるを見ても知るべし)。

郡の交通 出雲街道は郡の北の方、西伯郡界より、溝口、江尾、根雨を経て、南に進み、板井原迄越ね、凡九里にして、岡山縣美作國眞庭郡新庄村に達す。

廣島街道は、郡の北の方溝口宿より分れ、二部黒坂霞を経て、くの字形なりに、日野川に沿ひて西に進み、多里を越ね、凡十二里半にして、廣島縣備後國奴可郡(今比婆郡)八鉾村界に至る。玉島街道は、郡の北の方根雨町より分れ、黒坂上石見を経て、南に進み凡五里半にして、岡山縣備中國阿哲郡新郷村界に達す。備後街道は郡の南の方、菅福村(今は黒坂村に合併)の福長より分れ中原を経て、北に進み、凡三里半にして西伯郡上長田村界に至る。以上四街道は國道、其他は縣道、何れも人車通行し、尙隣國郡及各村落に通ずる里道は實に朴葉の支葉脈の至細脈の如く、幾百線にして、中には險坂の甚しきものありしが、近年大に改修し、大抵車通を得るも、尙未修のものあり。前に網

脈を以て形容せし如く、道別れ多ければ、行人は指導標を見る必要あり。(以下省略)

## 第二節 地 質

地質は直接鑛産農産に甚大の影響をなし、間接景色人情に及ぼすものなれば、これが研究をなすは、人間生活上重要なことに屬す。今日野郡野史「日野郡地形成因考」を抄録す。

我日野郡は、概ね火成岩中の深造岩、花崗岩、閃綠岩等より成り、西南隅、山上地方には火山彈の散亂せるあり。東北隅なる大山は輝石安山岩、火山灰より成り、たゞ多里(編者曰日野郡の最奥日野川の發源にして、平地海拔四百三十米なること後にあり)の一小盆地のみ水成岩にして、所々稀に石灰岩の露出せるを見る。(編者曰多里盆地も基底は火成岩にして、石灰岩は備中の脈續なり。隣村福榮にもあり。明治二十三年六月農商務省技師農學士早川元吉郎調査に成る土性圖あれども、通覽的踏査に成るものなれば、盡さざる所多し。其他専門家の研究に成れるもの無きを以て、其成因を明かにすること困難なれども、最近臨地研究せる渡邊教諭(編者曰氏は西伯郡の人、名は享治、熱心なる篤學者、本篇亦氏に負ふ所多し)。の講話等を参照して、その概要を記すこと、せり。

抑々我日野郡は、南方一帶中國山脈及び白山火山脈によりて劃せられ、即ち中國山脈及白山火山脈内の山郡といふも不可なし。從て該山脈の變動に依て、地質上の影響を受くること勿論なりとす。小藤博士の説によれば、新生代即ち第三期に於て、中國山脈は約四百五十米突隆起せる形跡ありと。現今四百三十米突の高地なる多里(日野川上流)は曾て海底たりしことあり。現に水成岩中の礫

岩砂岩頁岩露出し、貝の化石頗る多く、日本アルプス時代の水成岩なる赤鐵硅岩、アデノール板岩等にて成る地敷もあり。一小盆地を爲せる眞に奇觀なり。此附近亦石灰岩を産するは深海なりしことを證すべし。而して珪岩成立後噴出せる橄欖岩は、分解せる格魯莫鐵を包藏して、嶽を成せるを見る。多里に隣接せる宮内地方は(編者曰多里村の川下も山上村の南なり。)全部變成岩にして、ヘルムホルスト剝岩、結晶片岩、綠泥片岩、石墨片岩、石絨等より成り即太古代の粘板岩が山上地方の火崗岩によりて、焼かれたることを知るべし。當郡中片岩を産するは、山上村の一部と根雨町の一隅あるのみ。その他は殆ど全部火成岩なること冒頭に記したるが如し。殊に多里宮内に隣接せる山上地方は各種の火成岩に富めること稀に見る所にして、花崗岩の各種悉く備はり、閃綠岩玄武岩の各種(氣泡の逸出したる孔石もあり。)角閃安山岩、火山彈、雲母、石英、ペグマタイト等を有し、鐵砂を含むこと最も多く、その質の佳良なるはタングステンを含むものなるならんか。(編者曰山上、印賀、阿毘縁三村即ち山の上地方は燐分少き良質の鋼を産し、印賀鋼と稱して、古來刀劍工の愛用せることは世人周知のことなり。)

本郡地質に關しては、農商務省の調査せるものあるも、(地圖參照 頗る粗なるものなり。次に掲ぐる材料は、大正十二年度、數十日苦心の實地踏査になれるものにて、本郡地質の一斑を窺ふに唯一の材料なるを以て特に乞ふて採録せり。)

地質上 重要地 多里村の地質 東京帝大生北村詮次郎調査書抄

△本村内に露はれたる岩石の分類

A、一般岩石の大區分と本村岩石

- 1 火成岩
- 2 水成岩
- 3 變成岩

本村内には幸にこの三種共に露出してゐる。(編者曰平地海拔約四百五十米)火成岩は本村の大部に現はれ、基底を形成し、然も多種である。水成岩は村内の一部に介在し、種類も少く、厚さも驚く程でない。然も中生層は全然無い。變成岩は二種あつて、可成りの發達を見るが、その中の一種は宮内村に廣く露出し、本村では北東隅にその端部を見出される。

B、岩石の分類

- 火成岩
  - 一、深造岩……………花崗岩、閃長岩、閃綠岩、斑糲岩、橄欖岩
  - 二、岩脈岩……………石英斑岩
  - 三、流出岩……………石英粗面岩

- 水成岩
  - 一、古生層……………輝綠凝灰岩、粘板岩、硅岩、石灰岩
  - 二、近世層……………第三、紀 層……………礫岩層、頁岩層
  - ……………第四、紀 層……………砂礫

變成岩……………結晶變岩、蛇紋岩

以上列記したものゝ外、前に噴出若くは沈澱した岩石が、後からの噴出岩の熱其他の爲に、部分的な變質即ち接觸變質した處もあるが、多くは霧瀾によつて詳細な調書は難い。又或岩石から、他岩石に漸次變移せんとする移過の階級にあるものもある。

△岩石各論と其分布

- 一 火 成 岩(説明省略)
- 特徴 層狀でない。成分が多少結晶質、岩漿の凝固したものである。
- (一) 深造岩 中略。本村には酸性な花崗岩から、礫基性な橄欖岩迄揃つて産出する。
- イ、花 崗 岩



- 分布 三箇所
  - 一、萩山、滑<sup>ナガラ</sup>より船通山山上
  - 二、出立から南道後山福榮小奴可
  - 三、野宮原から西、東方窓山の東麓に第三紀層を破つて露出してゐる。

産出状態 古い岩株の様な形式

成分 石英、長石、白雲母、黒雲母……………

角閃石を總て含でゐる故に、角閃花崗岩といふべきだ。顕微鏡的には、磁鐵礦、榭石、磷灰石、ジルコン(風信子礦)綠簾石、チタン鐵礦其他を含む。

出立 微粒角閃石から變化したらしい綠簾石の多くを見出す。

萩山 白雲母と斜長石の量が多い。中粒。

野宮原 白雲母はあまり見ない。粗粒。煙色石英・五種に達するものがあり、正長石は肉色で、長さ一種以上に達するものあり。粗粒のものを除いて、一體に磁鐵礦の多くを見る。

ロ、閃 長 岩 (註花崗岩中の石英漸次減少)

分布 窓山の北部

成分 花崗岩の移過らしい。……………故に一見花崗岩に類似してゐる。

主成分 正長石、角閃石

ハ、閃 綠 岩

分布 窓山東腹から、下萩山、滑の南方萩原多里に亘る。

産出状態 中間色、顯晶質

成分 主……………斜長石、角閃石

副……………磁鐵礦輝鐵礦綠泥石、チタン鐵礦

産出状態の實際

本岩は岩漿分化作用によつて多少外見を異にする。西方は暗色、東方は淡色、西方は細粒、多里中位、萩原北姫札の裏側は頗る粗粒となり、一體に斜長石はよく發達し、多里宿下萩山間では、斑品の如く見ゆるものがあり、窓山の中腹では、俗に胡麻鹽石の美しい白斑點となつてゐる、此斜長石は中性長石に屬するもので、顕微鏡下に見ると美しい薄層双晶又は累帯構造を示してゐる。

ニ、斑 糲 岩 (飛白石)

分布 道後山頂附近

産出状態 轉石として頂上に横はる。古生層を破つて噴出してゐる。

成分 花崗岩的構造をなして頗る暗灰色

主成分 基性の斜長石、輝石

副成分 橄欖石、磁鐵礦、チタン鐵礦(後略)

ホ、橄 欖 岩

分布 稻積山、若松嶺山以南

産出状態 若松山の北方に續く古生層を破り、噴出してゐる。古生層中の粘板岩に變質を與へ、幾分結晶質をさせ、又其の周邊に粘板岩の小片をつかんでゐる所を見ても、明にこれを證明する。

成分 帶綠暗色の緻密な岩石で、花崗岩的に完晶質構造を有してゐる。深造岩中最基性的のものである。

硅酸分は花崗岩(70/100)、本岩は(50/100)に達せず。

主成分……………輝石、橄欖石

副成分……………クロム鐵礦、磁鐵礦、尖晶石、チタン鐵礦時に角閃石らしいものを稀に見ることを得る。若松山の向の岩

山に於ては、斜長石を含でゐて、それが霽爛して白色となり、恰も緻密な閃綠岩の様に見ゆる。然しこれは長石を副成

分として含める橄欖岩と見るがよい。橄欖岩は蛇紋岩に變じ易く、爲めに岩石全部が蛇紋石となつておる、若松附近の地表に近いものは、厚薄に論なく、蛇紋化してゐる。(中略)本村の橄欖岩中からこんな寶石(白金、金剛石)が出ないこともあるまい。

(二) 岩脈岩 (省略)

石英斑岩

一、花崗斑岩……花崗岩より移過した大形斑晶の多いもの。

二、石英斑岩……斑晶の少い正式のもの。

分布 花崗斑岩……窓山の大部出雲。三國山から東中國山脈備後。

石英斑岩……萩原の東方日野川流域。(岩脈状)

成分 花崗斑岩……石基少く結晶多し。(中略)

石英結晶……石基多く結晶少し。

(三) 流出岩 (火山岩)

本村には石英粗面岩の一種があつて、海中、空中に迸り出て固化したもの。

石英粗面岩

分布 新屋の南西方高地の小部分に産する。

産出状態 斑岩を覆ふてゐる。頁岩の一部は變質されて、粘板岩の如くなつてゐる。迸出期は第三紀の終り頃、三紀層の

沈積される頃らしい。

成分 強酸性、淡色緻密、少數の石英正長石の斑晶を有す。(中略)

此岩石の特徴……造岩礦物間は透明の非晶球璃質の膨着物で充され、長石微粒其全體の流狀構造を明に示してゐる。肉眼でも全體として、流動した様な感を早するものもある。

二、水成岩 (説明省略)

(一) 古生層 化石なし。盆地平面から二百八米も厚みがある。

分布 湯河南方から稻積山の北腹をかすめて東に走る。

産出状態 下部より順次輝綠凝灰岩、粘板岩、石灰岩の累層、變動を受けて部分的に非常に走向傾斜を異にしてゐる。

強ひて求むれば

北四十度乃至六十五度西 (走向)

三十度乃至六十度南西 (傾斜)

本層下部結晶片岩と走向略同じ。

イ、輝綠凝灰岩

分布 萩原の北東

産出状態 小部分露出。暗綠と暗紫色の二種がある非常亂れて走向は全然定められない。

成分 硅酸質で、輝石結晶を含んでゐるが皆小さいものである。

ロ、粘板岩

綠泥石質を混へ異色を呈し、豊富な炭素質を持つてゐる。硬度も可成で、所々粘板岩特有の節理を見るが、大體は塊狀、若松山の北其他接觸變質をうけた所では、結晶質に傾き、本岩元來の節理に直角をなした節理を見る。(接觸礦物は肉眼に見えぬ。)湯河南方若松鑛山に至る谷に於ては、粘板岩の一部は、アヂノール板岩様に變つて居る。淡白色を呈してゐるが、本板岩特有の絹絲光澤はあまり美しくない。露出部分は白色で可成の光澤を有し、一見石灰岩の様である。

ハ、硅岩

鐵分其他の爲に色づけられて暗赤色を呈す。單なる石英砂の密着で、放散虫の如き微生物の骨格を包含しない。而して屢々破片に於て肉眼的薄層の重でゐるを認める。其一部は腿色して、角岩狀をなしてゐるのを認める事がある。

ニ、石 灰 岩

分布 多里の東南、丘上に僅にある。

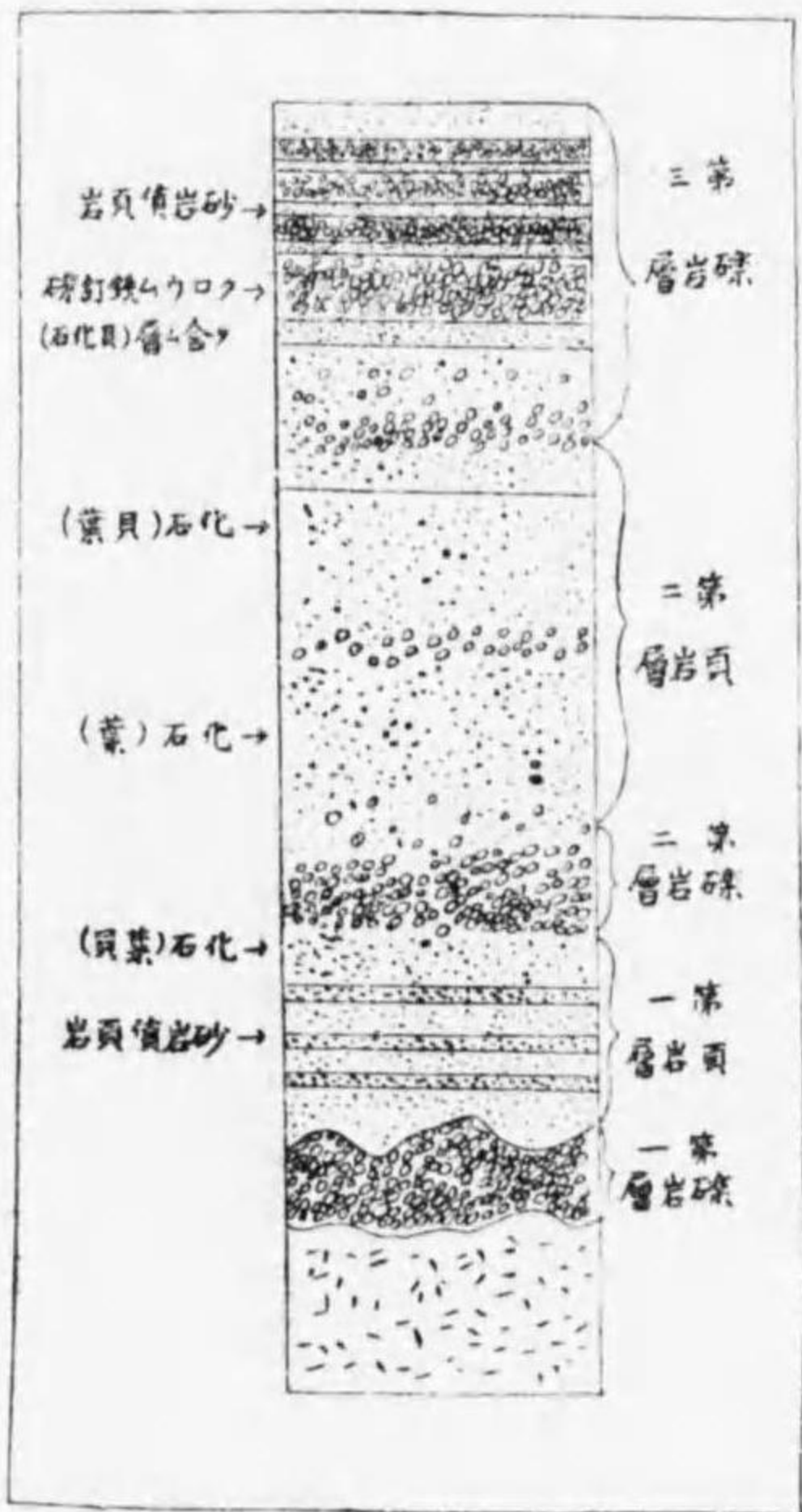
産出状態 七米乃至九米の厚さの層。化石なし。灰色を呈し、緻質大理石となれるもの無し。東方は谷によつて切れ、谷の東側には既に見られず。粘板岩となつてゐる。此谷は亦斷層の疑をもつてゐる。

(二)近世層 本村内には第三紀の末期及第四紀の内、現代の沖積層がある丈である。

イ、第三紀層

分布 多里南方平地から、三邊の山腹にかけて發達し、萩山湯河の斷層線以北には全然残されてゐない。蓋流出されたものなるべし。

産出状態 三紀層特有の丘陵性の地貌を有するから、一見して首肯される。硫酸溶液で膠結された礫岩と、淡青色の脆い減灰質頁岩との互層であつて、頁岩中に所々粘土質頁岩、砂、岩的頁岩を含み、又多里の西方では、粗脆な凝灰質物質を挿んでゐる。



本層の高層低層間の垂直差は、二百米近くに達するが、眞の厚さは百五十米位なものだらう。横断面を作つて見れば左圖の様になるだらう。  
第一礫岩層と第一頁岩との間には明に不整合を見るから、この二層の沈積する時代の間には、ある年代の間隔のあること即ちこの年代には沈積は行はれないで、専ら浸蝕作用のみ行はれたことを示してゐる。他は何れも整合をなし移過して居るから、間斷なく沈澱作用が行はれたものである。沈積される時の水の深さは、その沈積されてゐる物質の大

きによつて知る事が出来る。即ち礫層の時代は深く、頁岩の時代は深かつたのである。更に移過したものは、漸次緩慢な水準線の上下を示し、突然の變移は突然の水準線の變化を示してゐるのである。

礫 岩 層

第一礫岩層は灰谷の入口、多里南方の日野川河流に見得る。礫の大きさは指頭大より、人頭大に至る。

第二礫岩層は多里神社裏及野組附近に見られる。

第三礫岩層は本層の最上位にあつて、新屋鑪の南西方高地、野組鑛山附近に見られる。岩種は花崗岩を主とし、斑岩閃綠岩粘板岩等であつて、第三礫岩層の一部のみは、岩種と大きさを異にしてゐる。野組鑛山のもものは、基性岩礫その大部を占め、クローム鐵礫を含んでゐる。そして他所に見ない位な頗る大なる礫を含んでゐる。

頁 岩 層

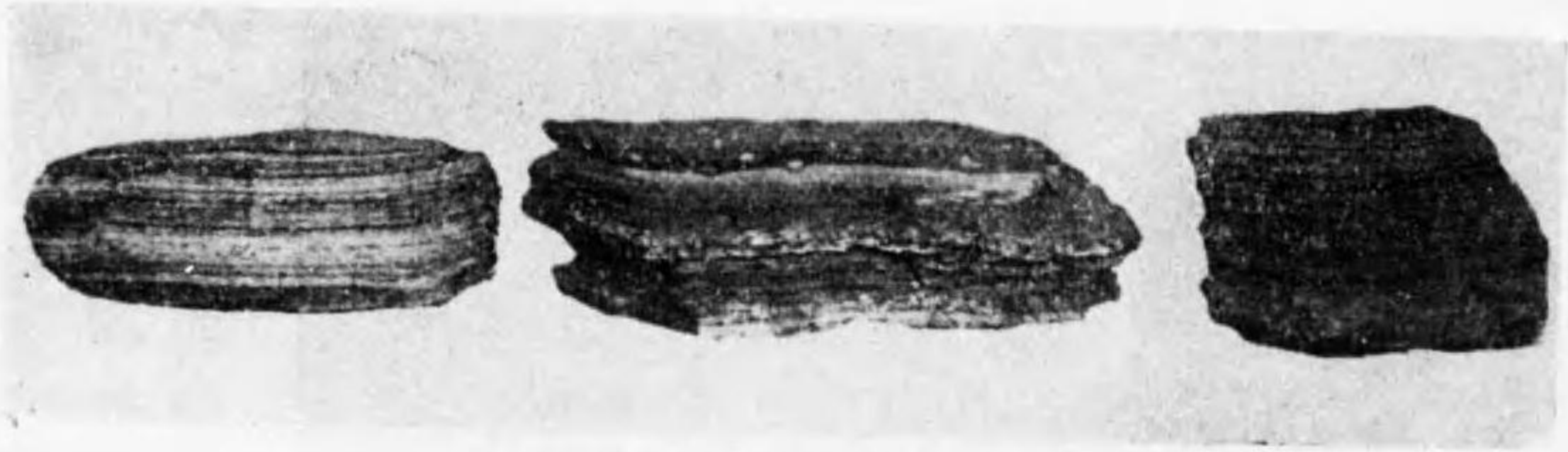
上下二層に大別される。主として火山灰より成る。第三紀後半に於て所々に起つた火山噴火の時の噴出ししい。一體に綠泥石質によつて淡青色を示してゐる。下部の第一頁岩層は、灰谷に廣く露出してゐて、厚さ約二米經約十五米のレンズ状をなしてゐる粗脆凝灰岩の一層が見える。更にその中にレンズ状で〇・三米許りの石炭層を見る事が出来るが、量も少く質も悪い。(頁質褐色)橋上の南部、日野郡東岸には、美しき頁岩層の露出を見る。こゝでは含有物質の差異によつて明かな種々の層が現出してゐる。二三ヶ處褐炭質の物



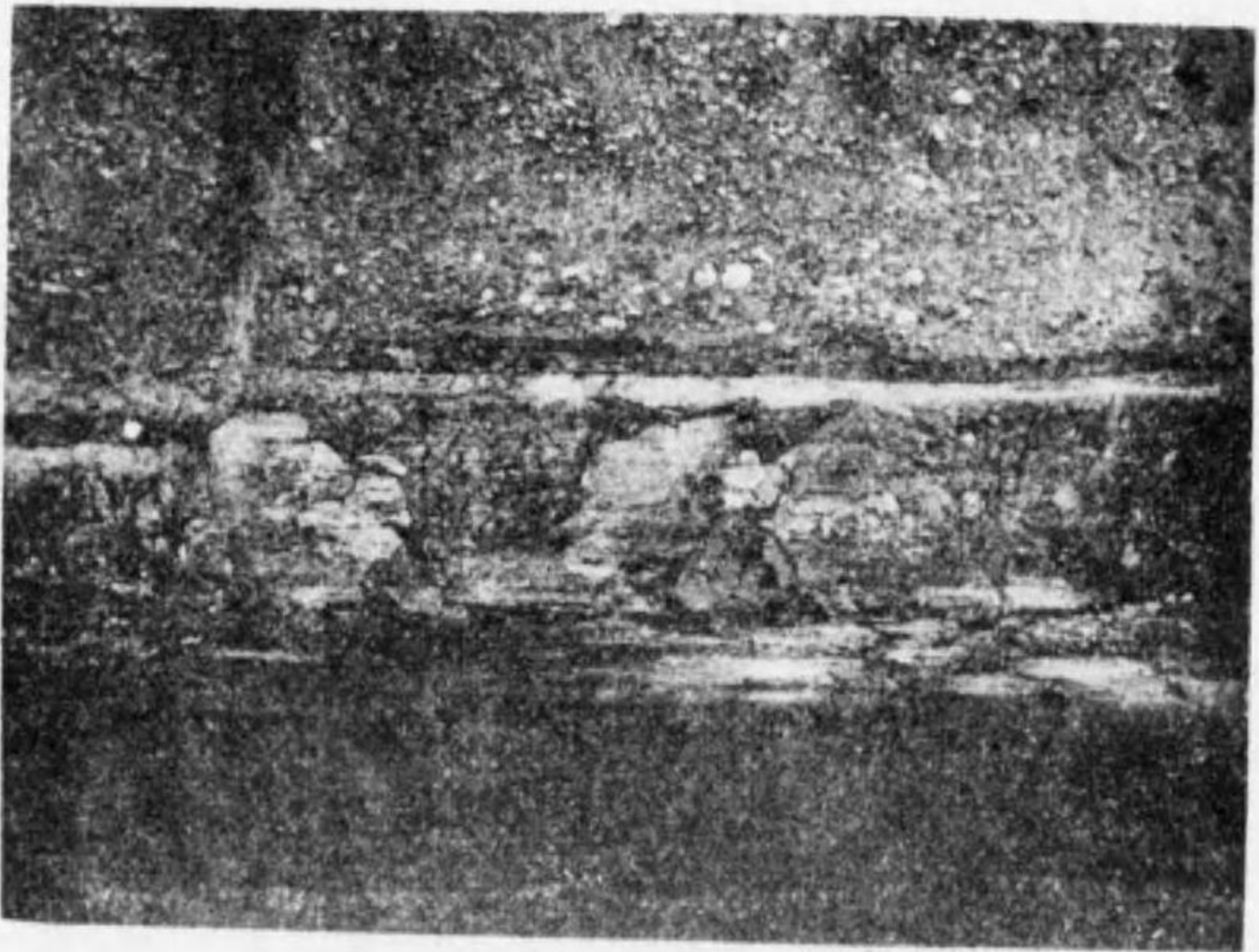
質の存在を見る。(小量)

第一頁岩層の上部には化石層がある。多里神社の北方に露出してゐるものは、多く潤葉樹の葉で、二枚貝巻貝を混へて

ある。下層は、新屋の日野川河底、總て潤葉樹の化石である。量が多いが頁岩の脆い爲採集に完全なものか得られない。保存も困難。上層は新屋の南西方の山麓及東方の山麓に現はれてゐる。こゝも潤葉樹及貝の種類である。



(石皮松) 岩 頁 産 里 多



層 石 化 村 里 多

本村の化石を通じて、標準化石を見出さない。礫岩頁岩の層が割然としてゐるのでなく、圖にある通り相互に薄層を雜へてゐる。變動を受ける事少く傾斜三十度以内で、緩やかな波状を呈してゐる。一體に化石に乏しく、不充分で、累層の年代を確める事はむづかしいけれども第三紀の新时期に屬する鮮新層に相當するものであらう。

ロ、第四紀層

日野川的作用によつて成れる砂礫層で、洪積層でなくて、沖積層である。洪積層は多分流出されたものか。沖積層の厚さも數米に過ぎず、河底には下部の岩石が露出してゐる。

三、變 成 岩

イ、結晶片岩……世界最古のもので到る處産出する。中略

分布 宮内を主産地とし、その端が本村の北東部に親いてゐる。

種類 絹雲母片岩、綠泥岩墨片岩

状態 雲母の多量を含み、それが平行に集合してゐて、劈開性が著しい。片岩中を縦横に大小の石英脈が走り、片理面へも

厚い石英層が挟まれてゐる。此岩石の上へ古生層の輝綠凝灰岩が乗つてゐる。

蛇紋石 橄欖岩から變化したものが多く、(若松)道後のは斑禰岩から變化したものらしい。何れも黄綠色の美しい鏡肌の如き

表面を有するが、本村にはそんな美しいものは發見しない。塊状をしたものは見當らない。緻密であるけれども脆い。霏爛して

てゐて裝飾用にならないものばかり。若松のは鐵分を多く含む爲めに褐綠暗褐色を呈する物を見る事がある。

C、多里盆地の成因と地殼變動

本村の中央に位する多里盆地の成因に關しては、湯河下萩山を通じた一斷層(多里斷層)に關係ある事と思はれる。即ち此の邊第三紀層を被る前に於て此の多里斷層突發して、斷層の東北側即ち現在の稻積山、萩原の側が、隆起した事によつて、こゝに小湖水を現出し、中國地方一體に低地が第三紀層を被る時に、此處は特に凹地をなしてゐた爲、他に比べて、特に厚層を被り、其の後日野川が、通ずる様になつて、この水は干されてしまつた譯である。而して此處に一種の構造盆地をこしらへたのである。萩原方面隆起でなくて、新屋方面陥没と考へてもよい。

日野川の存在は中生代の終り頃から存在し、この斷層の爲に水源の一部を失ひ、一時小さな流となつたが、現在の萩原の東が、決潰して、再びこの盆地の水を流す様になつて、一時にその水勢を恢復し、その多量の水を以て、萩原以下の狹谷を造つたと見るのが穩當である。

次に多里斷層の存在如何を例證して見よう。

上萩山に於て斷層的山腹らしいものを見受けること、湯河に於て、古生層が明に噴違ひを生じてゐる事である。即ち多里南東丘上に露はれてゐる石灰岩層は斷層線を越えて稻積山側には何等見る事を得ないで、返つて同山腹にはこの石灰岩より粘板岩一層を隔て、下部に位すべき硅岩が高々と聳いてゐる事である。

若し同じ石灰岩が兩側に出てゐたならば、この斷層によつて起つた喰ひ違ひの高さが殆んど正確に知る事が出来るが、此の場合には何等その高さを想像することは出来ない。

此の多里斷層に前後して又一つの小斷層が考へられる。即ち石灰岩はこの斷層線を界として東には出てゐない。石灰岩の稻積山側にもあつた證は、その西腹から屢々石灰岩の大小破片を發見する事である。其の他地表の形狀に何等變動を與へてゐない小斷層は所々にあるに違ひないが障害物の爲にあまり見當らない。只若松山の下岩山の麓で、道後山本谷の谷川の洗ふ岸に橄欖岩中に於て、北面から南北に殆ど直立に走る小斷層を明に見る。これには鏡肌も見えし、又斷層の結果としての斷層角礫岩と言ふ様な石層の兩壁間を埋めてゐるのも見える。

その下流粘板岩中にも三四の小斷層らしいものを指摘する事が出来る。又龍駒峠の附近の黄銅鐵の脈のある所も明に斷層といふ事が出来る。

## 四、結 論

元來陰陽兩道には、嘗て本郡隨一の大山脈が東西に亘つて蹲り、それが支那の崑崙山脈の一部と見做されるからこれを日本崑崙とよばれる。

これは古生代の終りには海面近くまで低められて、遂に準平原となつて、中國では重に花崗岩がその基底をなしてゐた。現今の多里村の盆地等は總べて其の時は海水下にあつた。此の時代に多里村附近に現在露出してゐる岩石の殆どは出現してゐたのである。即ち各岩石間の關係から考へると結晶片岩は古生代より更に以前の太古代の物で世界的最古の岩石である。古生代に於ける噴出岩は一寸見當らない。然しこの時代には湯河より東方の古生層が砂岩や頁岩の様な、状態で沈澱堆積されて居たのである。中生代に入りては續々として火成岩の噴出を見た。即ち南方の橄欖岩斑岩を初めとして、三國山北方の花崗岩船通山上萩山より窓山にかけて花崗岩、閃長岩、窓山北西の石英斑岩三國山からかけ峠に亘る石英斑岩等、亞いで出立南方の花崗岩萩原より窓山に至る閃綠岩が出て來た様である。其後萩原東方及び滑の<sup>ナガラ</sup>滑の東方の岩脈狀の石英斑岩が出たといふ順序になる。此の中生代には何等の水成岩の沈積したものを見る事

を得ない。或は當時沈積したものが、あつたかも知れないが、多分中生代の終りの準平原となる時代に浸蝕されて流出したものであらう。

第三紀にはいつてから、その最初に此の中國一體に四百五十米許りも隆起した。此の時やつと本村地方は海から逃れて陸上となり、約現在の標高に近い様になつて日野川もやつと大きくなつたのである。第三紀前半は何等記す程度のものなく、後半に至り大地變動期(小藤博士による)に遭遇するに當つて、初めて現在の中國山脈を生じ、同時に多里村附近も隆起により、現在の標高となり、現在の地形を早する様になつた。

第三紀後半の大地變動期に起つた火山の噴出其の他の事變に對しては、本村地方は餘り影響を受けて居ない。只その頁岩は多量の火山岩を含んで居る。續いて第四期に入り現在の状態に至つたのである。

第三章  
沿革  
革

### 第三章 沿革

沿革調査の困難は、時代を遡るに従つて、愈々甚しきを加ふ。而もこれが研究を遂げざれば、沿革の由て來るところを知る能はず。我日野郡の如き、比較的文献の徴すべきもの少き僻地に於ては、中古の狀況すら知るによしなきは、頗る遺憾なりとす。近代に至つては、古文書、古記録、又は散佚せる文書の殘編、或は日記類によりて、稍詳細を知るを得るを以て、從て中編に於て系統的に各方面に亘りて委曲記述すべければ、本章には主として、出土品によりてのみ考察すべき先史時代、原史時代及上古史に重きを置き、推究的記述を試み、中世以降は、一般の大勢を知るに足る材料を網羅し、專、世相を窺ふこととせり。從て時に冗漫に流れ、時に横走の感なきにあらざるも、強いて採録せるものさへあり。讀者、編者の意のある所を察せよ。況や本郡は中古史、近代史時代としての發達よりも、寧ろ太古時代に於ける出雲文化史の關係地として、光彩陸離たるものあるを覺ゆるをや。

日野郡全史の沿革大要として、或は偏したりとの譏あるべけれども、繁簡よろしきを得る上より見るも、この編纂法の適切なるを信ず。以下章を追ひ節を重ねて、精粗宜しきに従つて記述するところあらんとす。

讀者諸君が、本篇編纂上の苦心のあるところ察して、精讀の榮を賜らば、當に著者の幸甚しきのみならず、本邦開發の先驅をなし、先人の満足するところならん。

## 第一節 日野郡の先史時代概説

地方發達の真相を知らんと欲すんば、先史時代、原史時代に遡らざるべからず。日野郡野史著者は其卷の一に於て實地踏査と史的考證上、左の如く推定せり。先づ掲げて後、編者等の研究材料を附加し、更に考察を加へんとす。編者は常に考古學と歴史學との上に立ち、傳説をも參照としつゝ、而も相おかすことなき公平なる態度をとりて歩武をすゝめんとす。

抑々我考古學は、明治十一年の頃、外人によりて手を着けられ、同十九年の頃、坪井博士等一派の篤學者の手に移され、其努力研究により漸く緒につきたるに過ぎず、未だ確的な定説とならざる點頗多し(編者曰近時長足の進歩あり。)我山陰地方の如き、日本民族發展史上重要な位置を占むるにも拘はらず、其研究は頗る不十分にして、西伯郡淀江校の足立正氏、前記坪井民の啓發により、高麗山附近の研究踏査を遂げつゝありしが、大正九年夏、人種土俗學者學會幹事吉田文俊氏が、山陰道海岸部の實地探査を行ふに至つて、漸く全體的意見を發表せり。これ實に我地方考古學上の第一曙光といふべきものにして、眞に幼稚なる現況なりといふべし。隨て我日野郡の如き未だ一度も専門家の足跡を印せずといふも不可なき所に於ては容易に當時の狀況を知るべくもあらず。たゞ僅かに一般に是認されたる學説の示すところにより、推論を試み且つ發見せられたる原史時代石器類の分布を示し、將來の研究に俟つ外なからん。(編者曰大正十一年奥部教育研究會にて、日野上村援助の下に研究開始、ついで大正十三年京大の梅原末治氏前記足立氏と、塚原の實地踏査をなせり。)

## 第二節 原始民族

或地方の原人を知らんと欲せば、先づ日本の原人についての論定をなさざるべからず。從來石器時代の人民につきては、多くはコロボツクル人即ち今日のエスキモー人なりといひ、或はアイヌ人即ち今日の蝦夷人なりといひ、所謂コロボツクル論を唱へたる坪井博士は、我等の祖先即ち日本民族が、日本島に入り來りし時は、既に金屬器時代なりしことを斷定せり。アイヌ論者小金井博士も、歸する所日本民族は日本島に於ては石器生活をなさざりしといふにありて、久しく學界の承認する所なりき。然るに吉田文俊氏は全く反對意見を持し、殊に山陰道の實地踏査の結果、毎日新聞紙上に於て「開闢前後の日本」なる題下に左の如く論定せり。

之に依て見ると、山陰地方には、既に有史以前から、我々の祖先が這入つて來て、日本に於ける最初の人類として、石器時代當時から住んで居たといふ事が考へられる。そして其豊富なる遺物の大部分は、朝鮮や滿洲のものに其形式が類似して居る。磨製石斧にしても土器にしても、殆んど同一形式で、何れが日本のものか、何れが滿洲のものか、其の差別の附け難いものがある。云々。然らば最等の遺物を遺した我々の祖先「原始日本人」は何いふ方面から這入つて來た民族かといへば、私はこれを南洋諸島や馬來半島或は南方支那などの南方から這入つて來た人間の殘したものととは思はない。それは何故かといへば、日本周囲の同じ時代の石器時代遺物と日本のそれとを比較對照して見ると、何うしても南方諸島馬來南支那地方には何等の連絡關係を認めることは出来ないが、滿洲沿海洲西伯利方面のものは其系統關係が、最も能く類似して居る。(中略)即ち我等の祖先「原始日本人」は山陰地方の石見出雲隱岐伯耆因幡方面を中心として、一方北九洲から中國四國近畿地方へと深く入込んで來て早く既に立派な日本人の根據地を創建して居たものと思ふ。(中略)而も山陰地方に於ては石器時代の第一期から第三期の末期に至るまで、我等祖先の「原始日本種族」



遺跡があるのみで、殆んどアイヌ的色彩とも認むべき遺跡遺物のない處を以て見れば、此地方に於ける我等は祖先の勢力範圍は餘程弘まつてゐたものと認める事が出来る。(中略)斯様な譯でアイヌの移住して来たよりも古く「原始日本人」が来て居るのであるから、アイヌ種族を先住民族といふのは、全く九州の南部であるとか、中國近畿の一部或は東海北陸東北等或一地方の見解であつて、日本の周圍及日本全體の上から遡つて見た結論にはならない。(中略)然らばアイヌは全然居なかつたかといふに、それはまだ、斷言する事は出来ませんが、今夏私が調査し得た事實から見れば、開闢前後の初期の有様は實に以上の如くでありました。

此吉田氏の論文は斯界最新のものにして、而も貴重なる研究なるのみか、我郷土の原史時代の研究に一大光明を與へたるものといふべし。コロボツクル、アイヌ、と日本民族との何れが日本に入這みたるかは、しばらく懸案とするも、我山陰地方に「原始日本人」が早くも先住民族として這入りたることは推定に難からず。殊に我地方が裏日本中、滿韓地方と一帯帯水、相對するを見る時、思半に過ぐるものあらん。何れにせよ。我日本民族の血液中にはアイヌ系人、天降民族系人の外に、喜田博士發見の海部系人の血液混入し居りて、我郷土の民族は、天降民族中の出雲族が、先づ日本海を渡りて大陸より大舉移民し來り、漸次勢力を張りつゝある所へ、アイヌ族が北方より裏日本を南下し來り、出雲地方に侵入し來り、一方海部族なる大山祇族も、山陽地方より比較的小數ながら入込み來り、主勢力なる出雲族のために同化又は征服せられたるもの、如し。かゝる所に天降民族中のニギ族は九州地方より此方面に向つて交抄を開始し、遂に出雲ニニギ兩天降民族の妥協成りて始めて民族的統一を見るに至れるならん。推究してこゝに至れば、我日野郡の原始民族は、略推定するを得べし。即ち伯耆國の西北隅に位する山地にして、北直に日本海に濱せる所謂淀江地方に接し、傳説に富める日野川を遡りて奥部に達すべく、西、一帯、出雲に接し、其一角には日野川、簸川の水源なる船通山(烏山峰)

の聳ゆるあり。叙上、諸民族の交抄地點にあるを以て見ても我郷土の原始民族は主系を出雲族に仰ぎ、アイヌ系等をも交雜せることを知るに難からず。尙ほこゝに注意すべきは、日野郡が出雲に接續しながら、民族的先天性ともいふべき發音に於て、全く異なる點なり。喜田博士に従へばかの出雲音はアイヌ系發音にして(編者曰人類學者鳥居龍藏博士はアイヌ音は清めりと云)アイヌの本據地なりし奥洲地方の發音と、現に全く相似通ひたるのみならず。裏日本殊に北陸地方にも原薄の差こそあれ、所謂アイヌ音の存するありて、アイヌ南下の實蹟を暗示し、出雲に於て著しくアイヌが婚姻政策等によりて浸潤せるを語るもの、如し。これによりてこれを見れば、我日野郡はアイヌの血液混入比較的少かりしにあらずやといふ推論もなし得るなり。既に互に婚姻しつゝある接續地點に於ては、多少發音の影響をうけ居れる半面には、容易に互に同化することなきを見れば、蓋し亦思半に過ぐるものあらん。これについては、桓武天皇の頃、アイヌ即ち蝦夷をば、出雲國にも少からず配布され、その待遇法を講せられたる事實あり。弘仁五年の荒糧の亂の如き、頗る猖獗を極めたる跡さへあれば、此場合の混血による事も多からんか。吉田氏によれば、アイヌ式遺物少しといふといへども、未だ直にアイヌの混入なしとは斷じ難く、尙ほ研究の進むに従つて、秘密の鍵は開かる、期あらん。以上の推論を一層明瞭ならしめんが爲めに内藤岩雄著「郷土原始民族論」の一節を抄録すべし。

「郷土原始民族論」第二章第六に曰

(一)、アイヌ系人 東北地方を根據地として次第に裏日本を南下し出雲地方に侵入し、一面東海岸より東海道を近畿地方まで分布したるアイヌ族の居住せしことは、彼等がのこせる貝塚により明かにせられ、喜田、久米兩博士其の他多くの學者の承認せ

る定説也。アイヌの残せる貝塚中より出づる土器は薄鼠色又は茶褐色で、曲線を巧に配合したる模様がついて居て、形状も千變萬化にて、種々美事なる意匠を凝したるもの多く、天降民族系の單純なるに比すべくもあらず。このアイヌは越人ともいひ蝦夷ともいへり。越とは越後地方より北海道一帯の地にて、佐渡島も亦越の一部なりき。海を越して來れるによる。久米博士の「裏日本」に土蜘蛛、國柄は古志人ならんか。出雲國神戸郡に古志郷あり云々。蝦夷とはエビの如く髭の長きより呼びなしたりといふ。降つて雄略の朝蝦夷人を徵發して佐伯部といふ兵隊とせることあり。佐伯はサエグにて言語のさわがしく聞ゆるよりいへり。エゾは沃沮人の移住したるものらしく音通へり。因に事代主神のことを夷神として祭れるは、御父大國主を大黒天に配したるよりおこれるものなれども、古史に大國主命が越の沼阿媛を妃とせられたること、即ち越人となづけられし事蹟によりて、御子事代主を以て夷神に配したるよし喜田博士論定せり。

(二)、海部系人 喜田博士の新発見にかゝり、アイヌ系より全く異なる貝塚にして、其内に含まる土器は、赫色をなし、高塚風の基あるもの多く、形状簡單にして、アイヌ系の土器が、曲線模様なるに比して、これは直線模様なり。この種の貝塚は明治四十一年に尾張熱田の高倉神社附近にて発見されしを以て高倉式といふ。其の分布状態は大隅薩摩に尤も多く、四國紀伊より東海道に次第に稀に、武藏の國まで點々發見せらる。全國に散見するアマなる地名も亦分布のあととなり。九州の隼人と同種のものらしく、此海部は記紀に従へば彦火々見杵尊と同胞なりといへども、喜田博士は言語風俗容貌等により、海部即ち隼人の天孫族なることを否定せり。此海部即ち隼人は文身の族で、阿曇氏統率の下にありしより、黥のことを阿曇川といへり。海部はかの唐書に所謂倭人にして、女は頭に物を頂き運ぶ風あり。女の活動頗る目ざましく女權頗る強し。彼史上に有名なる襲人も亦此海部と同種なりと喜田博士は斷定せり。

(編者曰一般學者は未此區別を認めざるものゝ如し)

(三)、天降民族系 これを分ちて出雲系、ニニギ系の二大族となすことを得。喜田博士は天降の意義を大舉移民と解し、啻に此民族のみならず、前後數千年幾多の大舉移民の例を擧げ、天降民族は支那より朝鮮を経て、氣候溫和風光明媚なる南地日本島さして南下せるのとし、高天原南洋説を排せり。

(イ)、出雲族 天照大神の御弟素戔鳴尊が統治せられしは海原即ち今の朝鮮地方にして、後對岸なる出雲國を本據とせられ、御子五十猛神大屋津姫、抓津姫等日本に來り木の種を植ゑられしことあり。延喜式に五十猛神は韓國の伊太氏神とありて、同神は能義郡横田村に式内伊賀多氣神社として鎮座あり。出雲系の朝鮮に深き關係を有せることを語るに似たり。即ち素神は天降民族中、率先して出雲に渡來し、古志民族を討伐し、御子大國主に至ては、東越地方、信濃關東、南四國紀伊に至るまで遠征を試み、真に大國主として大功業を建てたり。

(ロ)、ニニギ族 天照大神皇孫瓊杵尊を天降らしめんとして、折衝數度の末、武甕槌經津主を遣はし、大國主命に國讓の談判をしたることは、古史の一致する所なり。大國主は天照大神の姪で、瓊々杵は大神の孫なりとすれば、極めて近親な間柄で、正しく同族なり。たゞ本文の關係上、名分に従て瓊々杵は國を受けられたることになりしなり。かくてニニギは九州に都して天下を統治せり。云々

同書同章第九に曰

(一)、南種論 天降民族は、印度に繁殖せる人種が、支那閩域に侵入し、ついで朝鮮南部に移住すると共に、日本へも渡來せるならんといふにあり。久米博士は南種論者なり。

(二)、北種論 天降民族は、西亞細方面より支那北方に侵入して、唐虞夏段周の國を成したる人種が、東漸して朝鮮を経て、日本へ渡來したるならんといふにあり。喜田博士は北種論なり。

(三)、南種北遷南下論 南種中直に日本に入りたるものあるべけれど、主系中の天降民族なるものは、支那朝鮮と、漸次北遷し大陸より日本移民したるものにて、出雲族は日本海をわたりて北海岸へ、ニニギ族は對馬を経て、九州に著したるものならんとの説

以上三説何れにしても、日本支那朝鮮は密接不離の關係ありて、歷史上、人種上、相關せしめて研究すべきことを指示するに於て同一也。かくて予はアイヌが北種にして、海部は南洋系なること、天降民族は所謂南種なることに左祖し、天降民族南種北遷南下論を立つるものなることを言明して云々。

以上諸説を擧げて、縷々數千言を費したる所以は、我郷土が、日本原始民族移住について、重要な地歩を占むるが故にして、今後研究の地歩を進むるに従つて、愈光彩を發揮するに至るや期して俟つべきなり。

### 第三節 先史時代の遺物

日野郡内にては石鏃其他の石器を發見すること少けれども（編者曰本郡が一般に山地なるより發見困難なる爲也、次の發見物も耕地整理又は炭竈築造等の際偶然發見せるもの多し）「日野郡野史」著者が調査せるものみにも、全郡にわたりて石器時代の住民が活躍せし様を語るもの、如く、將來一層の研究をすゝむる必要をせまるに似たり。今左に同書卷の一中より摘録す。（編者曰鳥居博士は山陰にはアイヌの跡殆んどなし。又日本民族も石器を用ひたりと云）

#### 日野地上代の遺物（主文日野郡野史）

##### 日野の東北地

一今の八郷村の久古字亥の子市より石斧發見

（編者曰本郡出土品は磨製品にして石質は大抵サマカイト也）

佐伯房治郎氏所藏

一同村の林ヶ原字狐塚原より石斧發見

井上松太郎氏所藏

一同村の林ヶ原字上小丸山より石斧發見

野坂勇次郎氏所藏

##### 日郡の中部地

一今の黒坂村の黒坂宿字越木戸より石斧發見

谷口半六氏所藏

一今の石見村の下石見字温湯より石斧發見

發見者相見龜雄

##### 日野の西端地

一今の山上村の佐木谷字鏝の上みより石斧發見

（編者曰石質眞黒也珍とすべし）

山上尋常小學校所藏 發見者坪倉正一

一同村の下多田字平林 石斧發見（註片岩質微青色）

坪倉徳藏氏所藏

一同村の二部字二部奥左平 石斧發見（同上）

山上尋常小學校所藏

發見者木山清母葉侶奥土中より

一同村の茶屋字土橋より 石斧發見（同上）

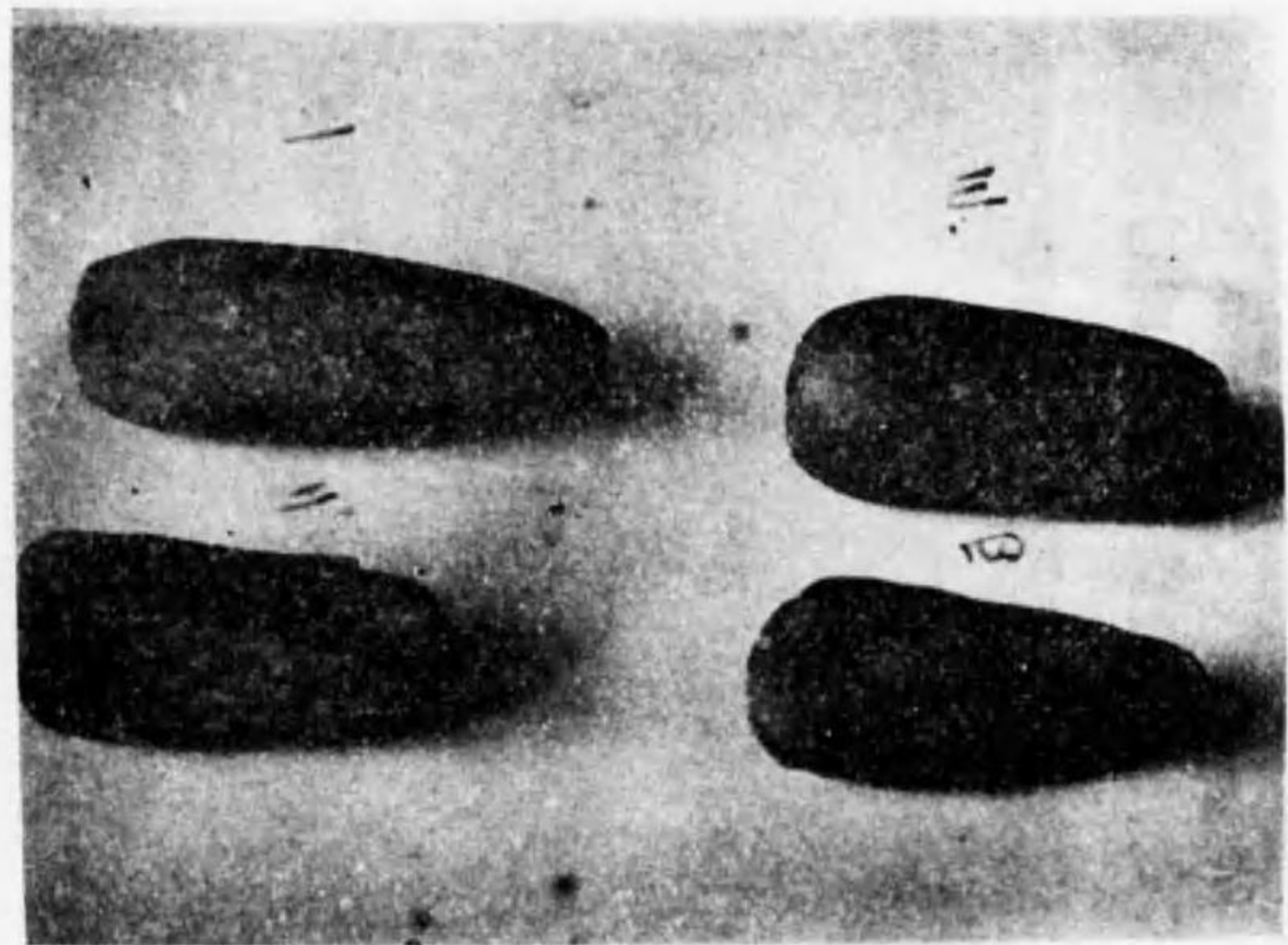
山上尋常小學校所藏

發見者渡邊正一、字土橋田地堀鑿中

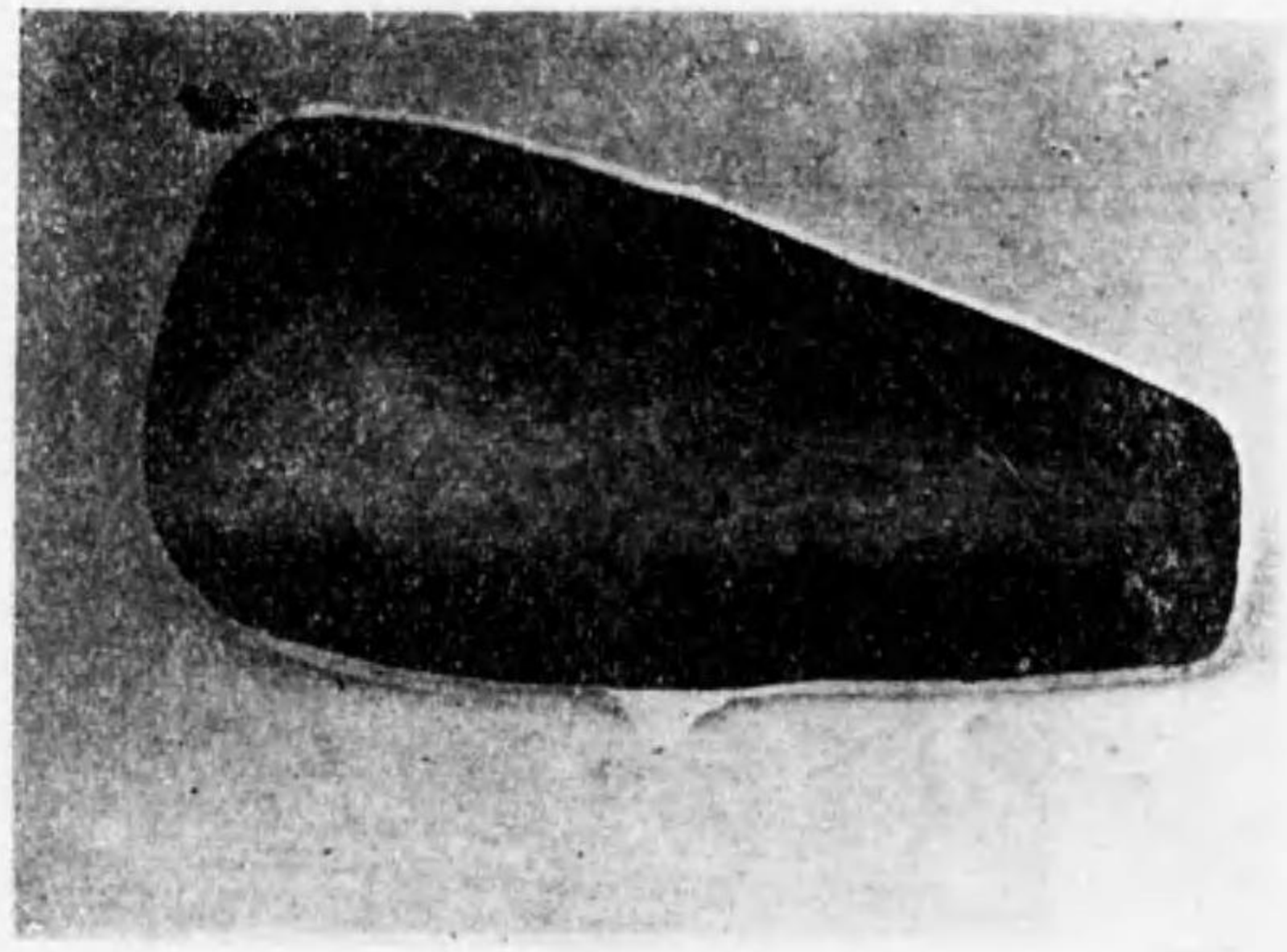
一今の阿尾縁村の大菅、發見地不明 石斧

三上惣重氏所藏

（註往古より所藏と）



山上校藏石斧  
一・二・三 綠泥片岩 四 黒石



阿毘村大字菅 三上家藏石斧

一今の印賀村の印賀宿(註大宮村大字印賀)字寺田大けたの下より伊志都々伊發見(编者曰く石棒にして長一尺七寸八分)

所藏所印賀尋常高等小學校



長一尺七寸八分  
A長一寸七分  
A幅一寸一分  
B幅四寸八分  
D幅三寸七分  
重量五百五十五  
原産青石

印賀出土石棒印賀校藏

是は長壹尺六寸廻り四寸八分兩端に花峇形を刻み、重量五百六拾目あり。國史大辭典に伊志都々伊は上代の石劔をいふ。伊志は石、都伊は威伊にて伊は助辭、威は靈威の意なり。腰間に帶すとあり。

(註京都大學研究の鳥取縣史蹟勝地調査報告書卷一採録)此發見より考ふれば、印賀には石器時代の首領の住居せし地と思はるゝなり。

(编者曰これ亦耕地整理の際に田中深く發見せしものにして本品は日本的に貴重なるものなり)。

一今の福榮村の井原字塚原 石斧發見 同所に埋没 現今不明

(编者曰前記の多くは明治四十年前後より、考古學的智識の普及につれて發見せられたるもの也)

これら石器が果して何族に屬するものなるか、未だ明かならずといへども、今日までは一般にアイヌ族によりて作られたるものと認められたり。吉田氏の新研究によれば、或は大和民族の使用せるものありしやも測られずと。

日野郡野史(大正六年十一月編纂終了)後發見せられ又は報告されたる石器及彌生式土器をあぐ。

一石 斧 下坂村鶴の池道路傍に拾得 大正十二年四月 内藤 岩 雄

二石 斧 黒坂村大字福長八兵衛巖の下 大正十一年鐵道工事中 拾得者 池 平 稔

外四名 黒坂警察署保管

三石簇數ヶ 黒坂村大字中菅内茗荷谷尻

编者曰本郡に殊に石簇の發見少し。

四同 石見村大字神戸上花見山麓

五同

六同 大正十四年六月神奈川校庭發見

安井尋常小學校藏



石見小學校藏



石環及彌生式土器破片 石見安達輝男藏



八郷土馬藏

七石簇及原料

八石 棒

九同

一 彌生式土器大壺三箇ノ内破片

大正十二年鐵道工事中完全發見、工夫破壊

(編者曰、本品は印賀の石棒と共に本郡出土品中尤も重要なもの也)

一同

一同 小壺赤褐色稍黒味

大正十一年生山、田ノ原墾道米子口附近發見

一同 高杯型ラツバ型口

大正十年鐵道工事中發見

一同 略同型數條輪形の模様あり

山上村大字笠木字トウセンジ發見

一環 石 直徑二寸餘中央孔厚七分

上石見字トハナ發見

一 土馬 埴輪に非ず石器時代のものなりと

尙京大梅原末治氏は、宗教的の意味あるものに非ずやといへりと

米澤村大字宮市方面  
金屋谷縣調查書掲載

八郷 同上

石見 校藏

八郷 校藏

大正 校藏

八郷 校藏

大正 校藏

黒坂 校藏

黒坂 校藏

山上 校藏

山上 校藏

安達輝男藏

安達輝男藏

八郷 校藏

八郷 校藏

石器製造所

由來、本郡には石器時代の出土品比較的少かりき。これ稀に石棒の如き逸品あるも、概して、田地中深く埋藏され居るか然らざれば、山林中に隠蔽され居り、全く千載一遇的の發見による外なき有様、



米澤大村字宮石市簇製所趾  
×印製所趾の位置



米澤大村字宮山神側地出土石簇製所  
(水品・石曜里・瑪瑙・馬蹄石)

(たとへば山上村出土品中の一は田中深くひそみ居り排水によりて得たるもの、一は山中に炭竈を作らんとして發見せるものの如き)にて、平野、海岸の砂地等と選を異にするによる。然るに近年來、

開拓事業等の進むるに従ひて、これらの發見も次第に數をますに至り、現今、全郡中にある石器類を集むる時は、餘程の數に達する見込あれども、種々なる事情のために、秘藏され居るものもあるらし



米澤村出土  
水品製  
瑪瑙製  
四  
川上  
五  
一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百

く、十分なる調査困難なり。編者の考察する所にては、前掲載の出土品丈によるも、石器が全部に使用され居るを肯定し得べきも、その石器が何れのところより移入されたるものなるか、此の手か、りなかりしが、可喜、郡史將に終を告げんとする大正十四年七月十一日、米澤村の一部に石簇製造所を發見し得たることこれなり。尤も同村にて先年來、星の糞、出土すとて拾得せるものありしよし。編者内藤岩雄、同村校長山田薫夫氏同村神職芦立万壽美氏案内により、親しく實地について見るに、字山神側といふ山際の畑地(約五畝歩)に散亂出土せるにて、該畑地は北後小丘の盡きんとするところ、前は頗開濶にして、眼下に日野川

谷をながめ、頗る形勝の地を占め、一角には大石の古墳もあり。その出土品を見るに主に材料破片にして、偶々石簇を交ゆ。石材の種類黒曜石尤も多く、粘板岩、水晶、瑪瑙これに次ぐ。こゝに特記すべきは、此地の石簇が全部打製なること也。磨製と見るべきもの。粘板岩のものにも見當らず。今後

一層探検の歩をすゝむれば、更に發明するところあらん。

### 第四節 太古傳説地

前節に於て提供したる實物と、前々節に於ける推論とより、我郷土が原史時代よりの古地なることは明かとなれり。遼遠の世、傳へられたる説話すら少けれども、阿毘縁（出雲風土記の伯耆國日野郡の堺阿志毘縁山とある所）の御墓山傳説の如きは、尤も有力なるものにして、將來の研究に俟つべきもの多し。左に日野郡野史中より抄録す。（後部傳説篇に入るべきものなれども本篇に限り特にこゝに掲ぐるごとゝせり。）

#### 阿毘縁の御墓山

阿毘縁村の大菅字大墓山は、出雲國能義郡と伯耆國日野郡との境に聳ゆる名山なり。上古伊邪那美尊を葬り奉りし由云ひ傳ふ。其事跡と古事記にある所と照令して考ふる時は、信憑すべき點尠からず。依て左に之を併記して尙後世探究の參考に資せんとす。

伊邪那美尊次に生ませる神の御名は鳥之石楠船神亦の御名は天之鳥船と謂す。古事記

米山曰此神は日野郡と仁多郡との境に聳ゆる船通山及び仁多郡鳥上瀧に縁故あるべし。尙能義郡西比田（編者曰御墓山裏に當る）に石船神社あり。歌に「雲はれて大はた山の木のもとに岩の御船の神の瑞籬」云々。

次に云々吐氣に生りませる神の御名は金山毘古次に金山毘賣神 古事記

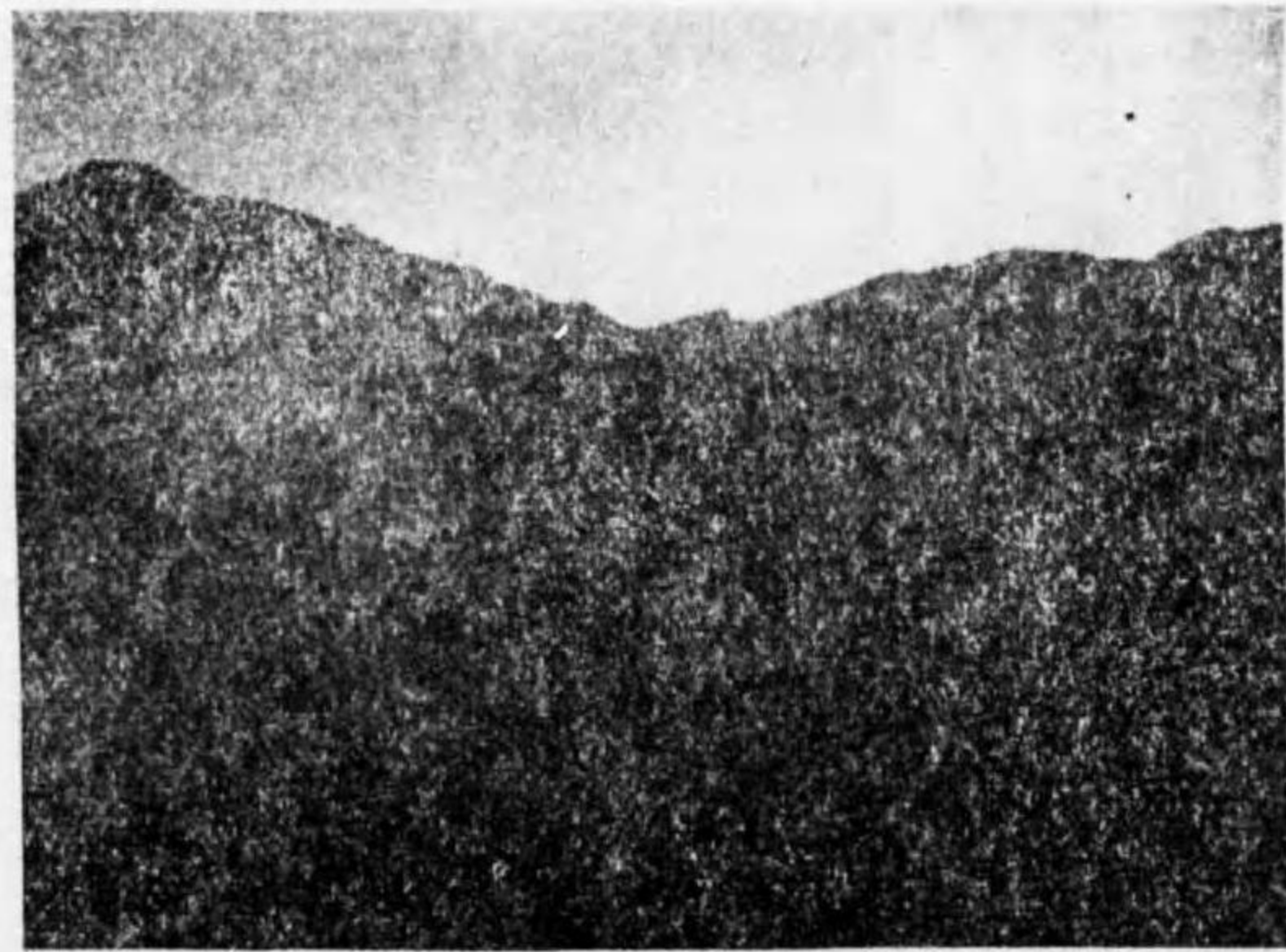
米山曰此御神は今能義郡西比田に鎮ります金屋子神なるべし。

故伊邪那美神は火神を生みませるに因り遂に神避りましぬ 古事記

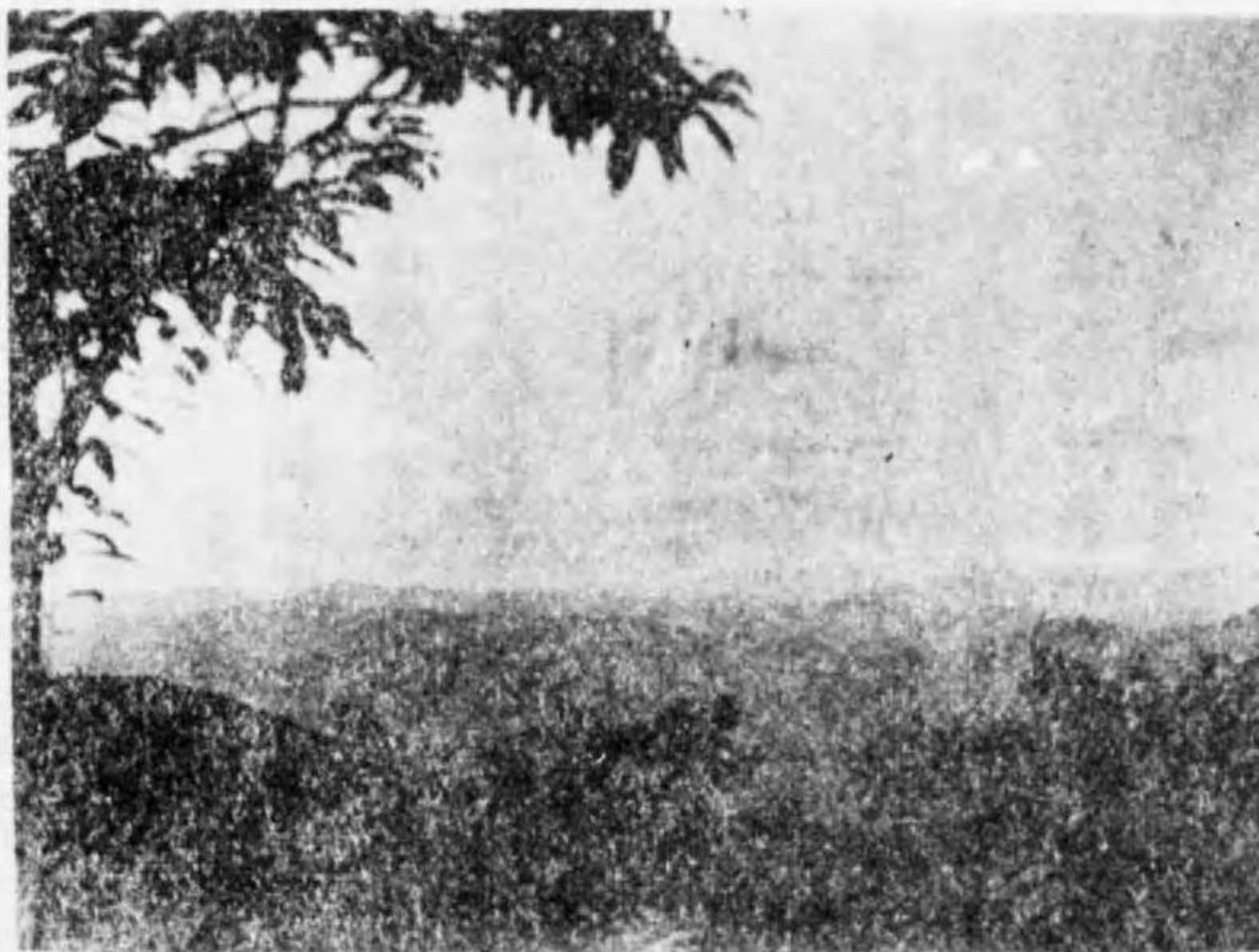
米山曰伊邪那美尊は日野郡と能義郡との境に在る御墓山の東に方り、同じ山脈の續きて聳ゆる高山にて神避り給ひ、夫より此山を

避り隠れ山と稱へしを、中古より土俗訛りて、今稜隱山といふ。云々

故其崇避りまして伊邪那美の神は、出雲國と伯耆國との境比婆の山に葬りまつりき。古事記

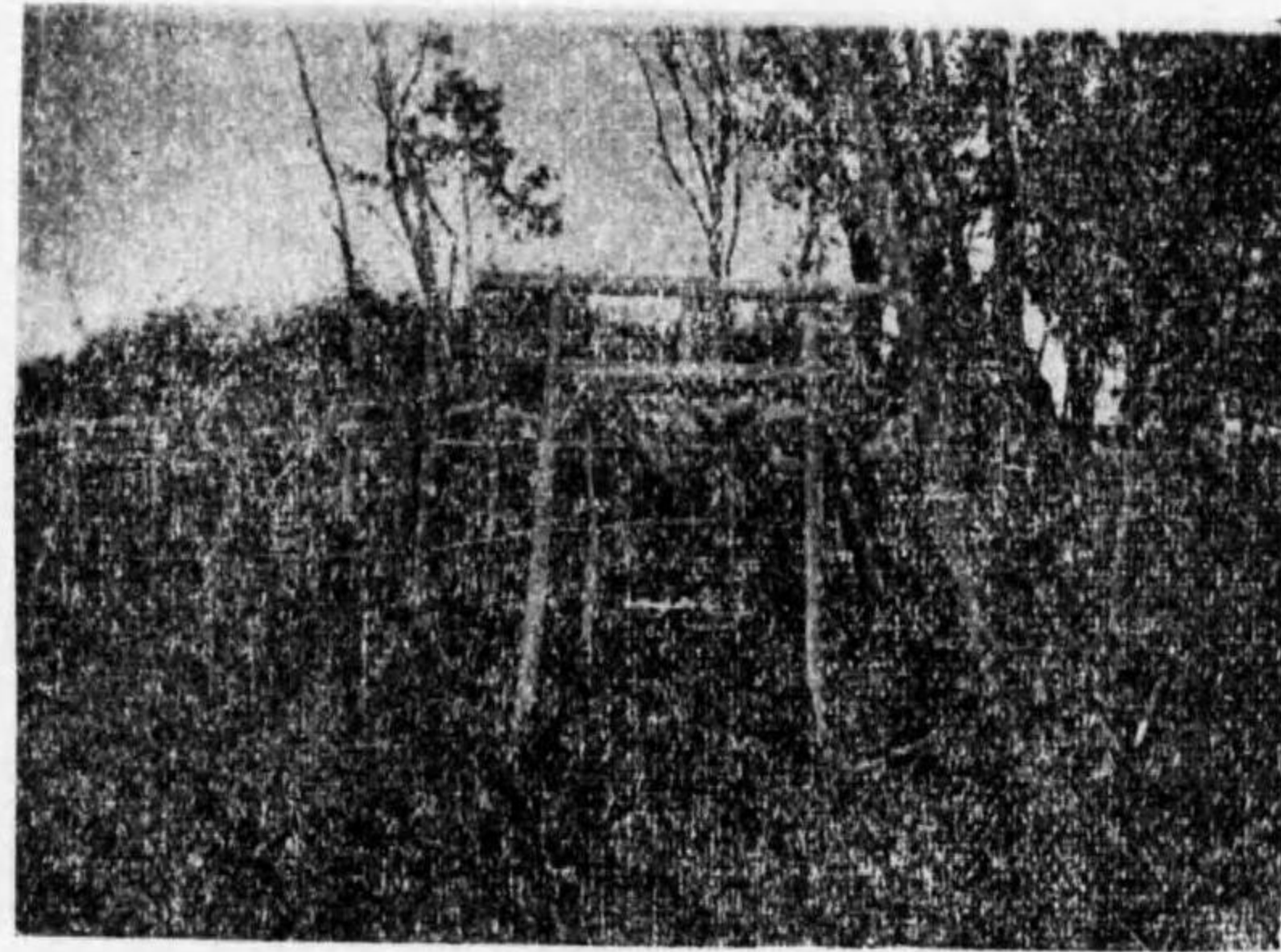


伊出雲伯耆國日野郡阿志毘縁村御墓山  
伊出雲伯耆國日野郡阿志毘縁村御墓山



御墓山より出雲を望む

米山曰出雲國能義郡と伯耆國日野郡阿志毘縁村の内大菅との間に聳ゆる字御墓山に伊邪那美尊を葬り奉れる由昔より云ひ傳ふ。同地内の井垣が塔に其神靈を奉祀せしも、深雪の地にて里人冬期參拜に困しみ、中古より同村地内字宮の下に移し奉り、熊野神社と稱へ、伊邪那命に事解男命速玉男命を合祭し、古來産婦主護の御神として遠近の崇敬甚だ厚し。此御墓山及近地を日向山と總稱す。比婆山の轉訛なるべし。云々



於是伊那那岐命御佩せる十握劍を抜きて其郷子御具土神の御頭を斬り給ひし時石柙神砂筒之神外六神並せて八神は御刀に因りて生りませる神なり 古事記  
米山曰前にいふ御墓山の近地日野郡阿毘羅村地内に字八石谷といふ所あり。此地にて彼八神生りませしといひ傳ふ。

墓 於是伊那那岐尊見畏みて避け返す時に具味伊那那美尊「吾れに恥見せ給ひつ」と言し給ひて即治津醜女を遣はして追はしめき。 古事記

御 米山曰前にいふ御墓山より三十町計り西北の方、能義郡西比田に追神といふ所あり。昔はみ登が谷といひしを今はみの敬字を省きて斯なむ呼べり。此地を始め御墓山より遊り隠れ山邊此登多く自生せり。云々。又御墓山内井垣が塔に往古御は竹ありしも享保十七年の自燃杭にて全滅せり。(編者曰古事記中に蒲葺の子及び筭の故事あり。)

故其の所謂黄查比良坂は今出雲國の伊賦夜となも謂ふ。 古事記  
米山曰云々比良坂は比田坂の謂にして今の能義郡西比田の近地ならん。云々。

編者曰、出雲風土記、東南道は、御墓山麓を通過せり。(交通史参照)

是を以て云々筑紫の日向の橘の小門ナドの阿波岐原に到りまして禊ミき祓ハひ給ひき。 古事記  
米山曰 云々予は御墓山の近地日野郡阿毘羅村字日向惡道なりしと思ふ。これ日向の小門ナドと日向の惡道ナドと同音なればなり。云々。  
伊那那岐命御身に著ける物を脱ぎ棄て給ひしに因りて生りませる神の奥津甲斐辨羅神邊津甲斐辨羅神といふあり。 古事記  
米山曰前に云へる御墓山の西の方、能義郡地内に奥かち或はかち奥といふ所あり。之奥津甲斐辨羅神の生りませし處又此處より少し南の方によりかぐら塔といふ所あり。これ邊津甲斐辨羅神の生りませし所ならむ。云々  
於是上瀬は速し下瀬は弱しと詔り給ひて初めて中瀬に降り潜カぎて漚カき給ふ云々。 古事記

米山曰前にいへる御墓山の西南の方能義郡地内に行水谷といふ所あり。之れ禊の語を中古より行水に變へしものか云々。  
編者曰、野史子の説、亦附會のあとなれども、参考とするに足る。

因に茨木縣人城内龍なるもの此山につきて、實地踏査をなし、山腹に朱塊狀の土を以て掩へる地點を發見し、伊那那美尊の陵墓として、他に比類なき所なりとの見解より、熱心なる研究の結果を發表し、且つ宮内省に請願の手續をなしたるため、宮内省よりも官吏を派遣せられたることあり。ただその研究が宗教的色彩を混入すること多く従て、傳説を妄信する傾あるは惜むべし。とにかく、伊那那美尊研究の熱心家なりしこと、此地方に一種の印象を與へたる功勞は没すべからず。西比田村野尻筆一なる人、亦これと呼應して熱心にこれが發揚につとむ。  
比婆山については、古事記傳に掲げられたる全國散在の候補地の何れよりも、此地が第一の候補地たることは、何人も反証を擧ぐる材料を有せざるべし。古事記を以て唯一の原據としながら、成務時代國境制定以來變動なき出雲伯耆の境を他に求めんとするは、例の牽制附會なり。採るに足らず。

### 第五節 原史時代概括

我日野郡は所謂神代史のヒノ川上地方の一部なり。世間一般はヒノカハカミ地方をば、出雲國簸ノ川上地方のみ指せども、喜田博士の如き、明かに簸ノ川、日野川、江ノ川増同語にして、ヒノカワカミとは山陰道一帶の溪谷を指せるものと斷定せり。古事記肥河上の段に「磐八谷、峽八尾に度り」といへるは即ち之れなり。殊に況んや簸ノ川、日野川、江の川は共に日野郡の西南隅なる船通山(鳥上峯)



より三方に發源せるをや。これを日本民族の墳墓たる所謂横穴の分布に徴するも、原史時代、早くも我等の先人が、樹木豊富にして米穀豊饒なるこの樂土に蕃息したるを知るべし。

殊に又我日野郡は日本國中稀有の鐵產地にして、而も幼稚なる工業を以てして能く熔鑄し得べき砂鐵を産するが故に、石器時代より鐵器時代に入らんとする原史時代に於ては、我等の先人は争ふてこのヒノカハカミに集ひ來しなるべし。土地僻陬にして、世の文明に後れたる我日野郡も、原史時代に於ては、出雲族等の活躍地として、めざましき發達をなし居たることを推定するに難からず。(交通史東南道考等参照)

左に日野川天叢雲劍に關する尤も重要な研究を抄録す。

真日本(書名)抄

二二二頁—二二三頁 出雲國下、鏡川上の條。

文學博士 久米邦武著

凡て創始拓植の時代に於ては土曠人希なりしを以て、他邦よりの移住民を歡迎し、近世の事情と反對なること、彼の秦氏漢部が韓地より從來て諸國に扶植したる史跡を今の南米諸國に考へ合せて、神代に當り、出雲へ韓人及越人の從任したるも亦其如しと知るべきなり。紀記の神代に所謂鏡川上といふは多く出雲の外部に於ける伯耆備後に當る。内部に於ては上に略述したる仁多郡横田を鳥上の峯の麓として、南の室原川、阿位川の源までみな鏡ノ川上なり。若し八岐大蛇の棲たる所を出雲の内地とすれば則ち其窟谷に當れば、出雲の要部は大蛇に呑れたるなり。豈其れ然らんや。

(編者註八岐大蛇は次にある如く、博士も越人と推定せり。)

故に予はこれを廣義に解して、伯耆の國日野川上、及び三國山の陽なる備後の諸窟を含むと看做すなり。之を要するに、八岐大蛇は記に古志八岐大蛇とありて、越狄の從任したる諸酋長にして、冉尊の時にも既に神門郡に來りて堤防を造り、古志郷を開いて居

住したれば飯石仁多の鏡川上にも處々に越人部落を成たるを疑はず。斯く越狄の血を混じたる故にや。出雲國人の方音は鼻にぬけて奥羽人に似たるものあり云々。

(編者曰博士の所論は神代活動の規模頗る雄大なるものあるを説かれ、山陰の地を實に當時に於ける人類活躍の檜舞臺とし、從つてヒノカハカミをたゞ今の出雲の鏡川上に限定するが如き小規模なる固陋を斥けられたるが如し。我好んで日野郡人なるが故に、日野川に水を引くが如き頑迷のそしりを後世に残さんや。尙ば次に抄録するについて見られよ)

三二二頁—三二二頁

日野川上(里多) 然るに鏡川上といふは出雲の鏡川には限りませぬ。當國(編者曰、當國とは伯耆國をさす。この書、元來、博士が山陰道に入りて、實地の地形等を踏査考察して、その結果を自ら記述せられたるものにて、この節は米子にての演説の自記なりとす。)にも鳥上峯の東谷に落る水は流れ墜りて此日野川となつてゐます。國遠なる故にまぎれぬ様に文字を違へてあるまで、是も其水上は鏡川上である。又書記一書に愛の川上とも書いてあるが、愛の川は藝州の奥から打出して石州に落つる大川の江の川である。すれば此日野川より彼の江の川の出づる谷々までには、早くより高志人が殖民して次第に勢力を廣め其頃には大蛇と稱したものである。

三二二頁—三二七頁

斯く大山祇の本國は薩摩にあり。別族は當地方を領有したるは、いづれも大藩主であつて、皇室と婚姻する程の資格ある高貴な家なることが明白するのである。(中略)其時代に於ては外國交通の事は全く俗事となして、政務の中に全くなく、上古來より習例の其儘にして、外交を主とする國は別に定まつてゐたもので、是が渡津見、山津見の兩家であつて、いづれも強大な藩國であつたので



す。(中略)山陰地方にては出雲より伯耆邊にかけて必ず其領地はあつたと思はる。(中略)すれば出雲の能義郡から東の大山までの日野谷は大山祇の領地ではないか。(本郡地方大山祇を祀りし小祠頗る多し。神社篇及沿革参照)(中略)今度汽車で大社に詣で、當地米子に引返ししました。道すがら宍道湖の周圍よりして馬場安來までの地形を見まするに、其中に大山祇の占領したる港は此處であらうと思ふ處は見當らなかつた。出雲は素尊の各地へ船を仕出し給ふ港とのみ認むるんです。大山祇が開いた港は、伯耆にあつたもの、日野川の谷が其國と思はるれば、日野川口に必ず其港はあるべしと断定するのである。(總者曰○點は原著の儘)

三七二頁—三三三頁

大山驛(古蹟古物の質造) 日野川 日野谿の鐵 叢雲神劍の辨 大神山神社(略) 兩川(簸ノ川と日野川)を比較するに出雲は山嶺に圍まれたる四塞の國にして、簸川の中部を貫流するは獨城中に漕運を通ずる如き用をなす。因て是を舟尊の本國として湖山の景勝を占め、而して長島の各港(今の島根半島は全く島なりき。)より韓網、越路へ國勢を發展せられたり。伯耆は谿外にありて谿外廓の如し、日野川は大山の麓を流れ、背に吉備の谿谷を控へ、前に夜見の漆津を開く。其景の潤なるが如くに地勢も亦壯也。

神代に於ける簸川上の歴史は出雲にのみ注意せられたれど、彼の火神、大山祇、八岐大蛇等はみな嶺外の簸川(註日野川也)上にあり。日野川の源流について之を覓めざるべからず。(中略)日根郡(博士は辰日根といふ。)の黒坂には日根氏(註日野氏あり)の墟ありといふ。是もと當郡の舊族にて或は大山祇の子孫ならん。云々。

日野の谿谷は古來産鐵地として著はる。(中略)以て日野谿より備後八郡の谿谷に互る花園石層は古來産鐵の地なるを知るべし。中にも日野谿の印賀村は鳥髮峰の東麓にあり。(編者いふ、今の山上、阿尾縁、大宮一所謂印賀の地一は鳥髮峰のふところにある一帯の高臺にして古來日野川沿岸の川筋に對して山の上といふ。製鐵部郷村部等参照)鋼鐵を出す堅硬比なし。大阪造幣局は是を以て貨錢に打込む刻印用とす。是によりて神代に簸川上に據たる八岐大蛇の尾より出たる天の叢雲劍を聯想することあり。(中略)されど余の考にては、八岐大蛇の尾より出といふは簸川上の八谿を跨り居る酋長の最後に斬られしものゝ持たる劍との意なるべし。簸川上(註日野川上)は産鐵の地なれば、彼地の産鐵を以て治成したる劍と解釋せざるべからず(中略)伊井冉尊の時已に高志人が西の石洲界にゐるより推せば、彼等が彼地より漸次に地を拓いて伯耆に接し大山祇の手誦乳脚誦乳の迫りたりとすれば、尾とい

ふも即ち伯耆と見做すべく、從つて叢雲の劍は伯耆鐵にて鍛成したるものと見るを適當と判定したり。(編者曰、近年仁多郡神職船通山(鳥上峰)絶頂に一天叢雲劍出現之地一碑を建てたり。その筆者は熱田宮司なり。建設前に余は傳説といふ二字を加へてはの意見を選べたることあり。思ふに船通山絶頂の地點を限定的に指したるものにはあらざるべきも、博士の卓論を讀む時、今更其碑を眼前に髣髴して、深き感慨にうたるゝ也。幸後人を誤るなからんことを。なほ郡内に須賀(菅)の地あり考へ合すべし)

### 第六節 古墳

内藤岩雄著「郷土原始民族論」によりて古墳即ち横穴の分布を瞥見せんか、同書第三章の四に曰

四、貝塚 石器 横穴の分布

貝塚中アイヌに關するものは東北地方より、主として裏日本に一帶にあつて、關東から東海にも處々見ゆる。即ちアイヌは漸次

西南下して出雲をとめとして蕃殖したことを證する。

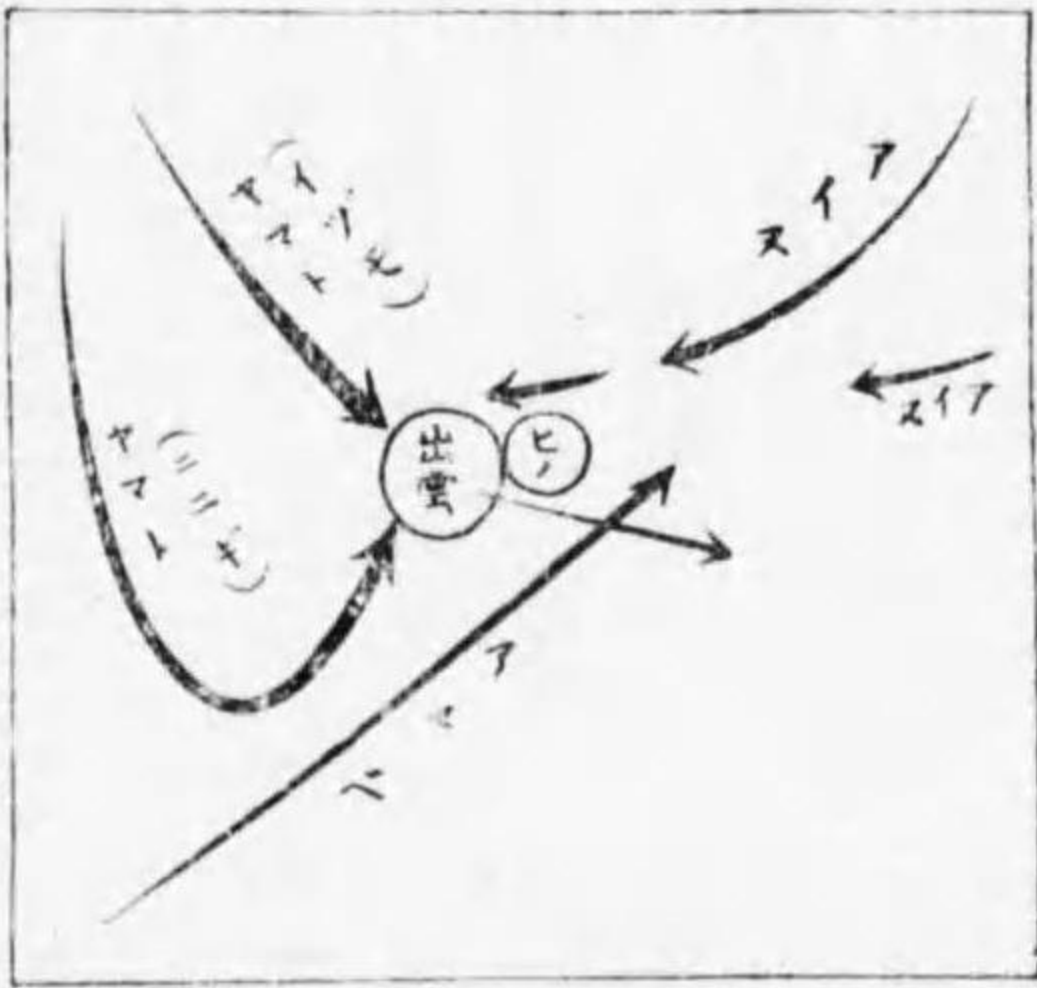
(編者曰繩紋土器は此地方に發見せられず。前述の如く。鳥居博士もアイヌ品の雲伯方面に殆皆無なるは史實をうら切るものなりといへり。記して後の研究にまつ)

貝塚中の(所謂喜田説の)海部に屬するものは、九州南部より山陽、四國、紀伊、伊勢にかけて、尾張から、武藏野にも入つたらしい。

(編者曰、本郡貝塚を見ず。但彌生式土器は前述の如く少々あれども、石器と共にヤマト民族の、のこしたるものと見るが妥當なるに似たり。尙アイヌは新研究によれば備前備中の海岸、徳島縣、九州南部等にも遺跡をのこせりといふ。更に

大に研究すべき餘地あることを吾等に告ぐるもの也)

やまと民族は朝鮮方面から二派に分れ、一は直接出雲に入りそれより信越關東に入ったあとが見ゆ、他の一派は九州北部より瀬



出雲の民族の移動の中心

戸内海沿岸を東へ、畿内平野に大繁殖をなし更に進んで關東平野に一大發展をなしたあとが見ゆる。これは所謂祝部土器を含める古墳分布に基いて述べたのである。我日野郡地方の此流の支脈が高梁川等の河川を廻りて、日野川上流地方に出で、日野川を南下した形跡が歴然としてゐる。云々

同書同章の五に

五、土器の三系統 我日野郡にある土器は祝部式即朝鮮土器(鼠色)尤も多く彌生式(茶褐色)の發見せられたるもの少々あり。繩紋土器即ちアイヌ式のもの未だ發見せられず。たゞ石器(吉田文俊氏に従へばこれも大和民族のものなるやも知れず。併これら石器は横穴に伴ひて發見せられたることなし)の現存せるより推測して、アイヌが多少の侵入をなし居たることを證すべし。海部系の高倉式(編者曰彌生式と同物か)に至つては、未だ些の手がかりなく、先づアマベの侵入は僅少なりと斷じて可ならん。(編者曰前述の如く近時、八郷、山上、石見、黒坂等より彌生式のものを見せり。尙石器の多くはアイヌのものにあらずといふ説近時有力となれること前陳の如し。一般の研究を要す)。

今、日野郡野史に載せたる村別地名を轉載し、併せて編者等が新に發見せるもの等を加へて記載し更に項を追ふて説明するところあらんとす。

古墳の説明

本郡の古墳を記するに先ちて、日野上村古墳をモデルとして其の如何なる物なるかを究明せん。古墳は我國上古の遺跡中最も顯著なるものにして、我國考古學上の時代圖を擧げて説明に使せんか。年代の如き固より正確に論定し難しといへども、便宜上諸學者の學説を綜合して假に推定せる時代對照表を作りたり。

編者曰く利器は其時代に於ける銳利なる器具の謂なり左表必ずしも正確といふに非らざれども讀者使せん爲に記載す。我國に青銅器時代なしといへる學者の説を尊重して之を省略す

時 代 對 照 表		時 代	
石器の時代	石器の時代	新石器時代	鐵器時代
遺跡の時代	貝塚	彌生式土器中間土器	古墳時代
土器の時代	繩紋土器 黒色	赤褐色	古墳卒塔婆混用時代
文献の時代	先史時代	原史時代	有史時代
歴史の時代	神代	上古	奈良時代

前表によりて古墳が年代の上に如何なる位置を有するかを示したり。印は比較的明瞭、印は不明瞭

本郡の石器時代(先史時代)は前已に陳べりと雖、いさゝか古墳時代の説明に入るの過渡期として略説せんに、本郡未だ繩紋土器の發見を見ざることを前述の如しと雖、石斧石簇石棒彌生式土器を各地に於て發見し、所謂遺物散列地帯と見ることを得るのみならず、最近米澤村に石鏃製造跡の發見あり。これら石器の大部分が先住民族のものにあらずして、我等祖先の原始時代の用品なりとの説に従へば、古墳時代に先ちて我先人が早くも我郡に入り來れることを語るもの也。

古墳は先史時代に於ける原史時代の墳塋にして、其の位置は最古のものは山頂にあり、漸次山腹に移り、後山麓に位置したり。形状は圓墳あり、方墳あり、前方後圓墳等ありて、前方後圓墳の如きは最も完備したるものなり。周湟を穿てるものに、二重式三重式のものあり。其の構造は概ね巨石建造物とも稱すべく、一石にして數十人を要するが如きもの少からず。其の石室の構造には大凡左の三種あり

- り
- 一、縦穴式石槨
- 二、横穴式石槨
- 三、横 穴

縦穴式石槨は、四邊の周壁を一大磐石を積みて造り、其上に蓋石を置き土砂を盛りたるものなり。横穴式石槨は、左の略圖の如く、羨門、羨道、玄室の三部を有し、羨門を覆ふに一大巨石を以てす。我郡に於ける古墳には横穴式のもの最多し。



可及的大岩磐を使用せんとしたる形跡あり。横穴式石室の中には右の三部明確ならざるものもあり。縦穴式と其の差別の認め難き程度のものもあり。横穴は自然の粘土層を利用して横穴を穿ち、石材を使用せず、其穴を以て槨に代用せられたり。吉見の百穴、隱岐飯の山等其例少からず。我郡日野上村字丸山及米澤村字杉谷のものは此類に屬す。玄室に安置せる棺には石棺あり、陶棺あり、木棺あり、石棺陶棺は依然たりと雖、木棺に至りては、腐朽痕跡を止めざるもの多し。日野上村大字生山田の原

の山頂に組合式箱形石棺の残片あり。斷層面に露出したる松の根を以て辛くも維持されたり。聞く明治十九年洪水あり、山崩れの爲完全に露出し、中に人骨二體あり、一體は涅齒のものなりしといふ。現状によりて之を推せば、石棺人骨二體を容るゝとしてはや、小型の觀あり。或は洗骨せるものなら



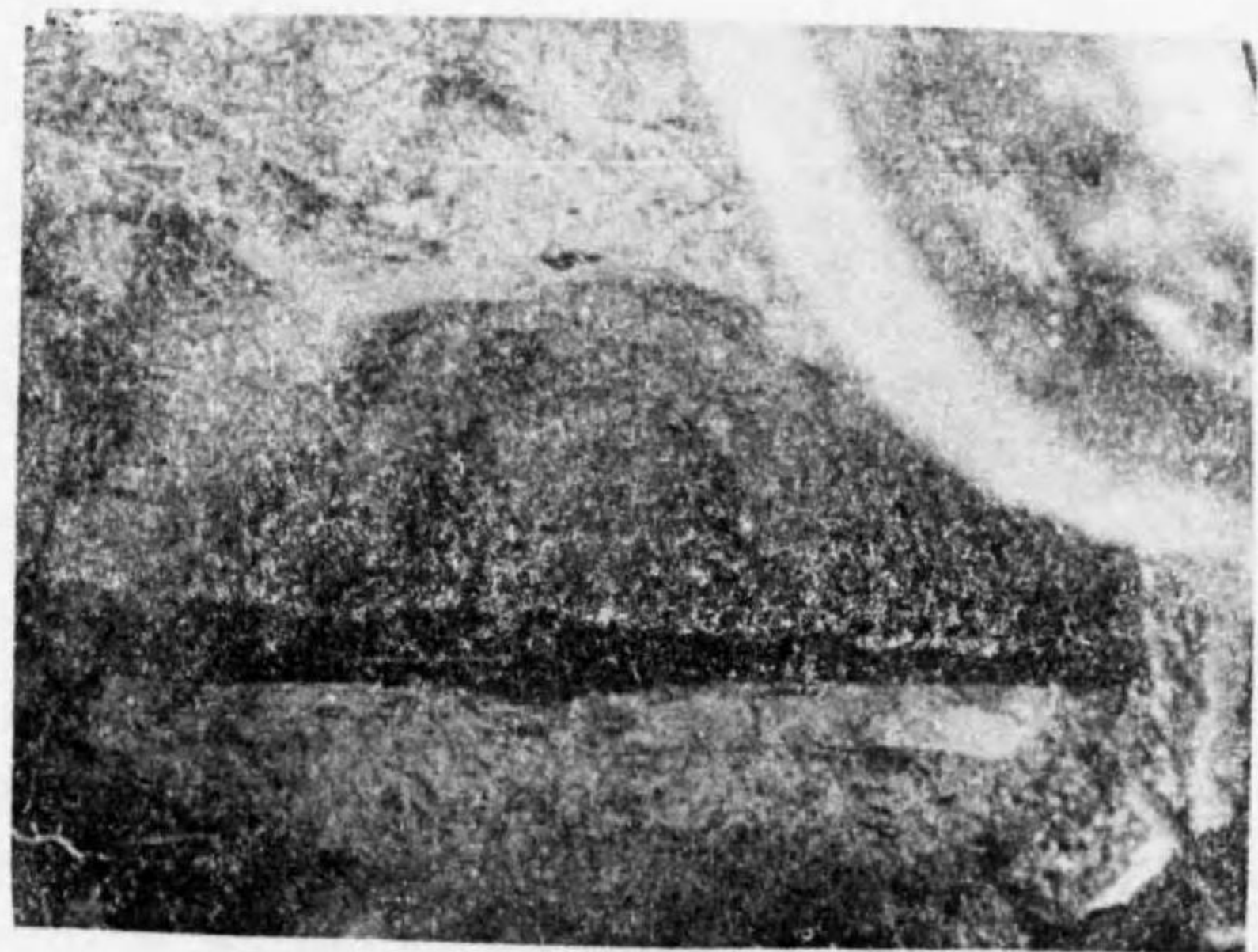
日野上村塚古墳・墳の上の木は大木



田原の石式穴

むか。石槨の存せざるより推せば、木槨を使用せしものならむ。副葬品は貴族のものに至りては、鏡、玉を初めとして、祝部土器、金環、銀環其他青銅製品の出土を見るは其例乏しからず。是等の副

葬品は棺と同時に並列せるあり。又別に小石槨を築きてこれを埋めたるものもあり。日野上村の古墳は左の三箇所を主なるものとす。



田の原組合式箱形石槨の一部



田の原の古柄、土銀環、金環

器は多く散逸したりといふ。弓場の家を中心として、裏山に横穴式石槨あり。其附近に已に崩壊せるあり。其擴穴の僅に見ゆるあり。今尙開口せざる墳丘も二三見たり。弓場より道を生山に向へば右

- 一、田の原古墳群
  - 二、丸山古墳群
  - 三、塚原古墳群
- 田の原に弓場といへる家あり。其の屋敷已に古墳なりし由にて、宅地擴張の際發見今尙宅地内に多くの岩板を据へたり。此所より土器多く出で、部分品柄頭は所謂圭頭式にして金を巻き。鞘の一部亦金を巻きたり。金銀環も同時に出で、土

側田の畦畔に露出せるものは、構造は縦穴式石槨ならむ。

丸山は内藤岩雄宇田清隆及大正、校長坪倉清藏が高橋清吉氏の案内にて、最近調査せるものにして、未だ全部を盡さずと雖、此所に所謂横穴あり。同地鐵穴平といへる所にありて埴土を穿てる珍らしきものなり。其他古墳多し。中にも久保木清作の宅地に接近して、畑の中に横穴式石槨の露出せるものあり。覆土は全部除かれたれども、中は發掘したることなしといふ。同地山中に古墳多し。中に半崩壊せるもあり。中より人骨及土器破片を發見せり。

塚原は矢戸を距る數町にして、一溪に沿ふて急坂を上げれば田圃あり。中に一農家あり。其沿道、山腹墳丘連互せり。中にも最大のもの農家の裏山にありて墳丘上に多行の老樞あり。本縣史蹟名勝天然記念物調査員足立正來り下検査をなし、京都帝國大學講師梅原末治來り調査して、本縣の調査書に載せたり。詳細は同書に譲る、何れも横穴式の石室なり。由來本郡には大古墳少く多くは山腹山頂にあり。

副葬品中土器は何れより搬入せるものなりや不明なりしが、最近二部村大字三部の中山に大土器の破片出て、其破片に小石礫の熔着せるを見、これが製造原料ならむとの疑問を生し、同地の實地を踏査せるに、出土の破片悉く不成功品の觀ありて、何れも歪みたり。殊に同地は最良の粘土に富み、年代不明の粘土採掘址あり。前記小石礫と一見同様なる橄欖岩の、同部落北端山角に露出せるあり。大に研究の餘地ありと雖、今暫く朝鮮土器の製陶所ならむと推斷せり。(別項詳説)

前述説明によりて次に掲ぐる材料をたどり、郡内古墳の状況を察し、尙ほ次々の各項に説明するところ

ろを通讀して、編者の意のあるところを諒せられんことを。

八郷村

口別所字下モ貝田原四箇所

同所字初湯坂三箇所

同所字高平原三箇所

編者曰編者曾て探究せる時の豫定によればなほ少からぬ遺跡あるらしく、附近石州府といふ所にも少からず群落あるを見受けたリ。

溝口村

岩立字岩屋の向苗手一ヶ所

金澤村(日光村)

富江字うね一ヶ所

福兼字山王河原一ヶ所

同所字菖蒲ヶ平ル一ヶ所

米原村(日光村)

吉原字猪里枚一ヶ所

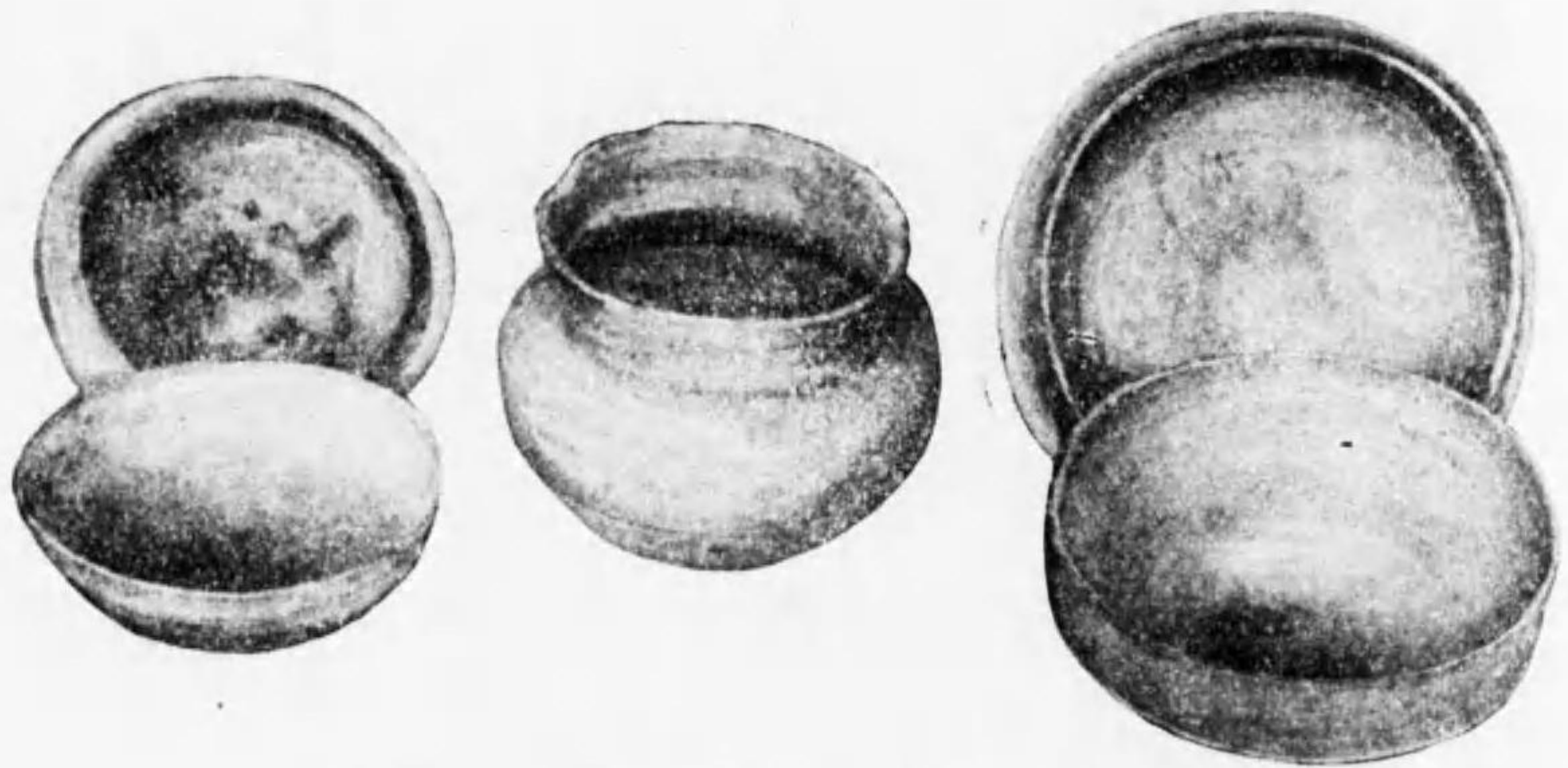
大河原字津かん原二ヶ所

同所字後谷二ヶ所

編者曰、吉原清水慶重新田開墾の際獲たる高塚ハサフの破片を藏す所謂日光村には到る所開墾に伴へる出土品多し。

米澤村

美川字家の向三ヶ所



米澤村大字美川上原古墳出土品

同所字うね原一ヶ所

杉谷字下やしき二ヶ所

編者内藤岩雄、字小塔にある珍しき形式のものにつき研究、後項に委し。

同所字をしきめ二ヶ所

貝田字横路林二ヶ所

宮市字みさき谷一ヶ所

同所字市ノ塔一ヶ所

同所字向の原一ヶ所

同所字ひめ谷水口一ヶ所

同所字中らね一ヶ所

同所字山の神脇一ヶ所

編者曰、貝田の塚平といふ山林にて古墳發掘佛像刀劍出土又美川御机の間

なる上原に古墳群(十五)あり。

江尾村

江尾宿うしろ山一ヶ所

同所字にげ塔一ヶ所

佐川字ひつり塔一ヶ所

同所字岩屋が平ル一ヶ所

編者曰、神奈川村大字武庫字荒田半ノ上附近にもあり。現に明治初年其

他より發見せりと云蓋付土器、安江家に藏す。武庫の中心地方故踏査研

究を要す

旭村

古市字福屋一ヶ所

同所字東屋敷一ヶ所

中祖字芋畑一ヶ所

字代字鉾塚一ヶ所

同所字ふた子一ヶ所

編者曰古市海藏寺に開墾の際多くの土器(祝部彌生兩式)出でたりと。

野上村(二部村)

三部字城山一ヶ所

編者曰、最近中山発見の大瓮より推さば、蓋し此方面にも古墳群あらんか。委細は別項に説くべし。

二部村

畑池字泉原の下一ヶ所

同所字土居廻り一ヶ所

二部宿字三軒屋一ヶ所

日野村

榎市字谷奥一ヶ所

同所字塚ヶ市廻り一ヶ所

本郷字上ミの原一ヶ所

野田字大屋敷上一ヶ所

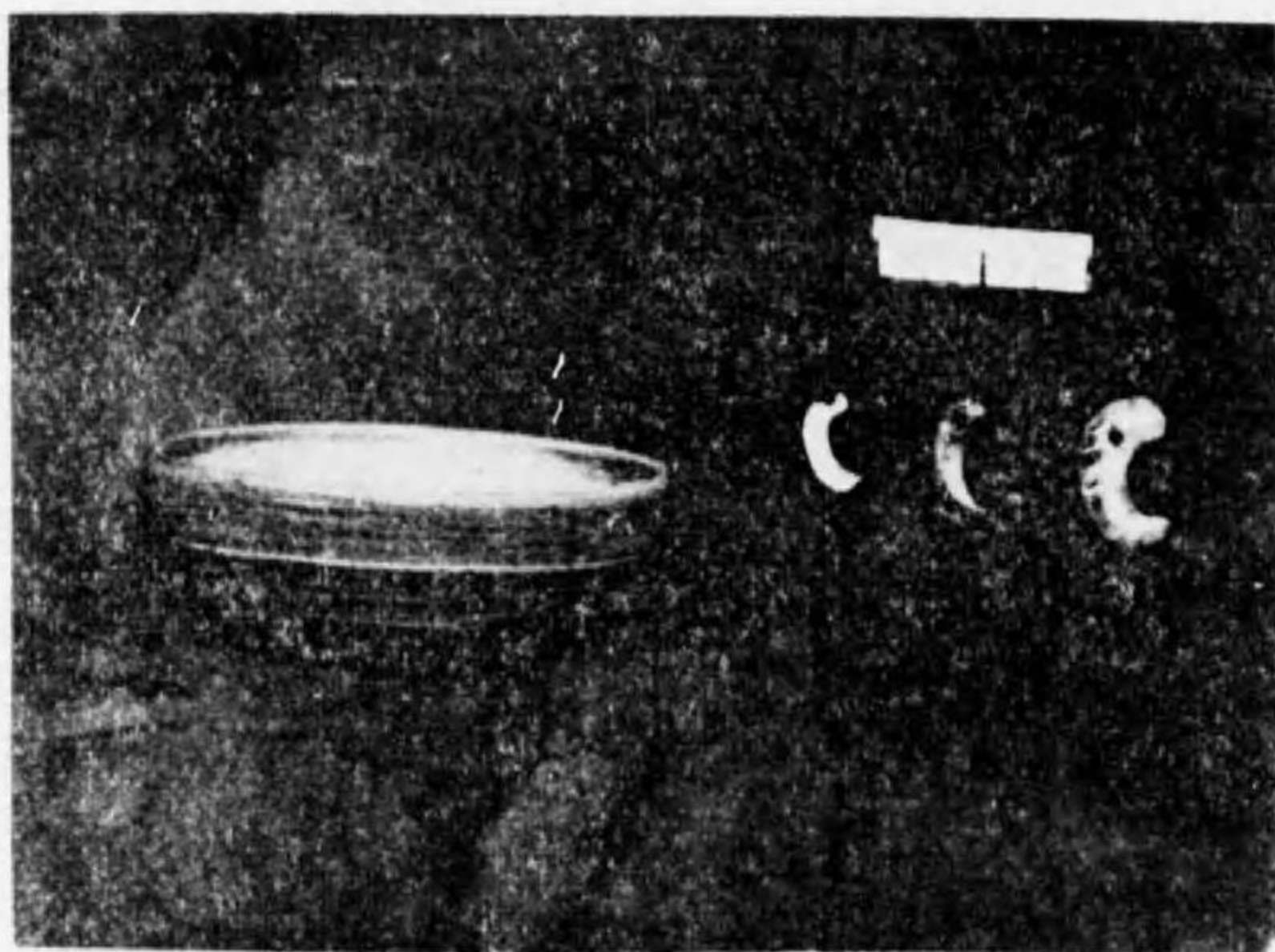
津地字塚の本一ヶ所

同村字山田二ヶ所

編者曰、黒坂村大字黒坂字山手山麓一帯に群落あり發掘せるもの三、又下黒坂に二ヶ所發見。明治十八年矢倉峠掘下工事中高塚



(出露部内) 墳古宅伯佐村上山



土出墳古谷河木笠字大村上山  
藏家伯佐村上山

形土器出た

ることあれば

未見の古墳も

あるべし(後

出)

印賀村

印賀宿字城

山中倉二ヶ所

折渡字御所一

ヶ所

同所字中鑑

山一ヶ所

編者曰、御

立山に一あり往年より觀音をまつる穴觀音といふ

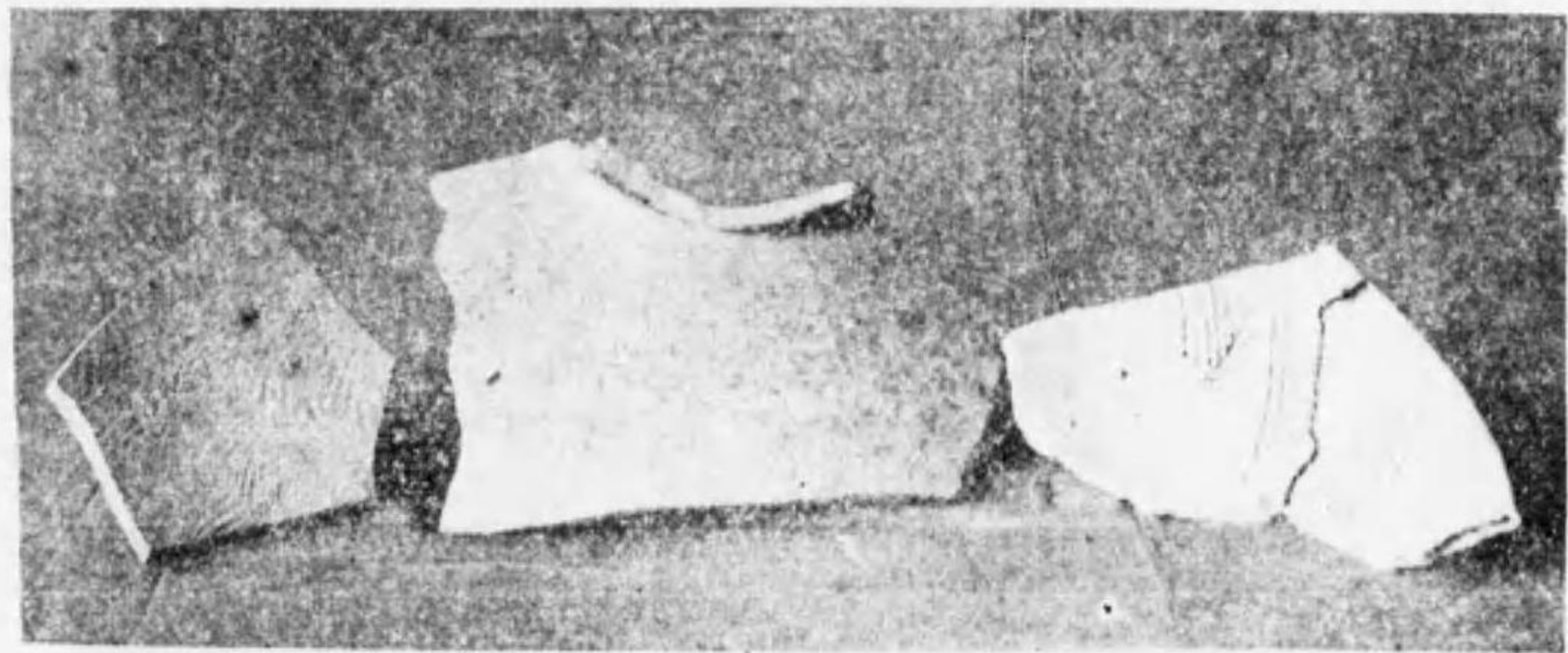
山上村

茶屋字大松ヶ峠一ヶ所

福萬來字山王塔一ヶ所



片破棺陶藏校上山



(藏校上山) 片破瓮大

同所字楡の木一ヶ所  
同所字熊たら山一ヶ所  
笠木字御城一ヶ所  
福壽實字横の塔一ヶ所

編者曰、本村にも尙ほ茶屋字土橋、笠木水谷方面に祝部式土器を發見したることなどあれば、なほ他に未發見なるもの多かるべし。

最近佐木谷にて横孔發見曲玉數個等出土品あり。

宮内村(日野上村)

宮内字塚原八ヶ所

編者曰、矢戸字三本杉畑中にもあり。なほ未發見のもの多々あるべし。大正十一年教育會第四部會が日野上村(元宮内霞)の援助の下に古墳講演會を開催したる際黒坂小學校長なりし宇田清隆之に臨みて講演し調査に着手し同年秋縣委員西伯郡養員小學校長足立正氏來り宇田清隆大正小學校長宮代好介氏と共に踏査研究し大正十三年京都大學專攻學者梅原末治氏足立正氏と共に來り調査せり其の結果は鳥取縣史蹟名勝調査報告中に採録せること前述の如し蓋し本郡に於ける古墳熱の高まりたる先驅といふべし。

結果は鳥取縣史蹟名勝調査報告中に採録せること前述の如し蓋し本郡に於ける古墳熱の高まりたる先驅といふべし。  
三榮字大成の内塚ヶ平一ヶ所

霞村(日野上村)

霞村のぞき岩一ヶ所

編者曰、糠ノ庄法道寺方面の詳落は、塚原、田ノ原と共に頗る重要なものゝ一にして、大正十四年六月二十二日宇田清隆等第一回の踏査を試みたるに、他に類例なき粘土中の横穴さへ發見するに至れりしこと前述の如し。

生山字上松上一ヶ所

編者曰、こゝに特記すべきは、生山の川向字田の原に於ける古墳詳落なり。これは前記本郡古墳中顯著なるを以て、特に項を設けて、塚原詳落と共に詳説することゝせしなり。從來一二世に知られたるも、大正十一年田邊榮太郎内藤宇田三人が實地踏査するに至り、その數とその質とを明かにするを得るに至れり。

石見村

神戸上字鑓屋敷一ヶ所

同所字松ヶ峠山一ヶ所

同所字千谷一ヶ所

同所字貝妻の奥一ヶ所

同所字水木ヶ塔一ヶ所

同所字長砂一ヶ所

同所字竹の内一ヶ所

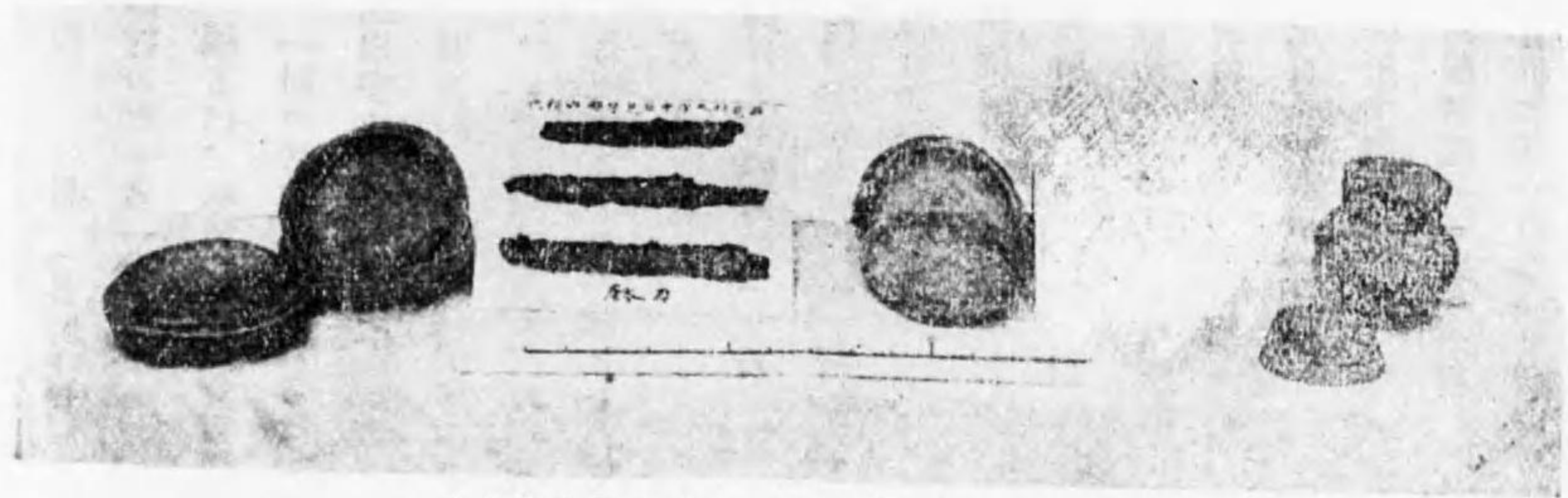
上石見字塔田一ヶ所

同所字奥田一ヶ所

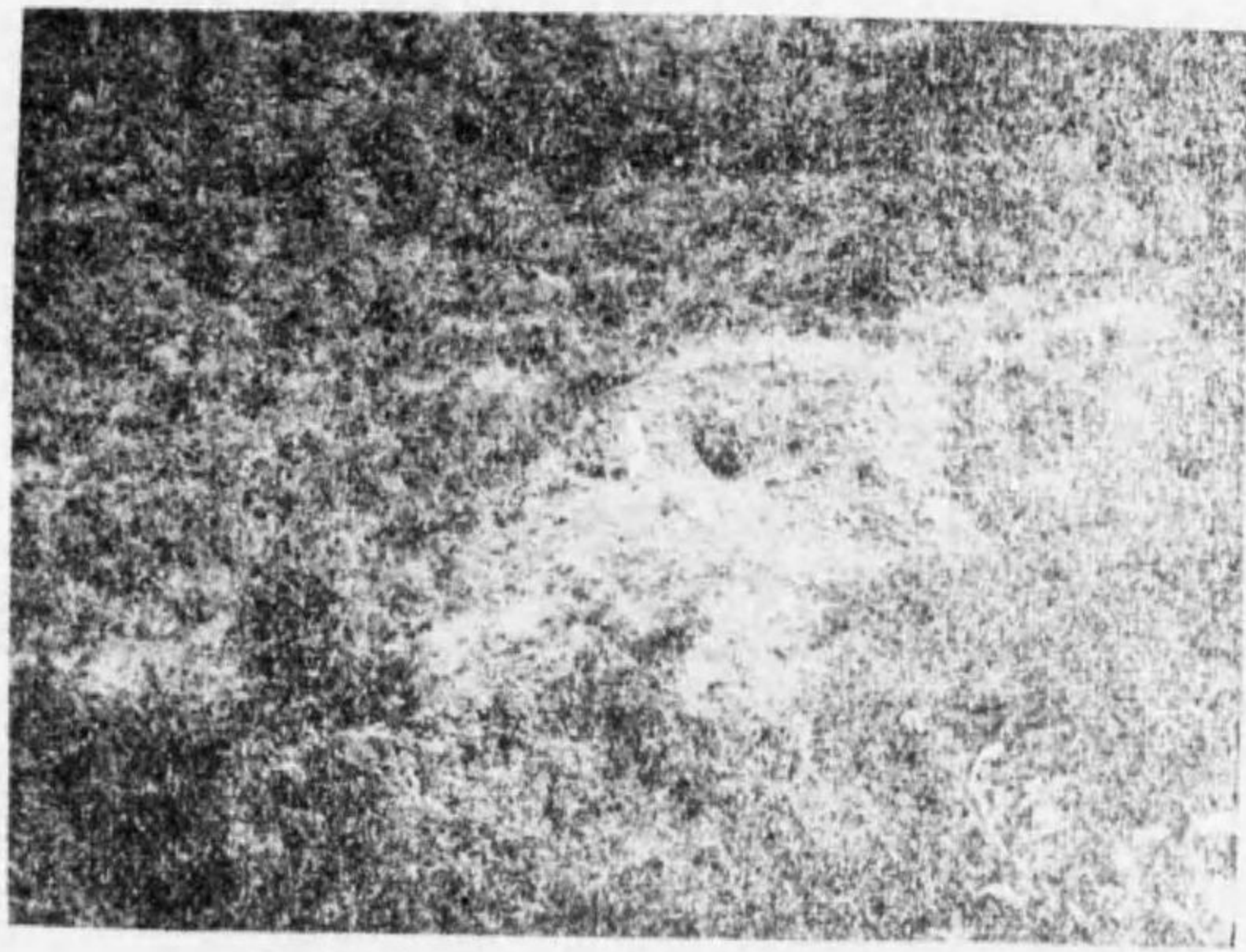
同所字龍泉寺山一ヶ所

同所字下木の原一ヶ所





品土出山銀金宗 品 藏 校 見 石



墳古平塚見石下字大村見石  
りな大偉てに瞭明丘墳園

五六

同所字空田一ヶ所  
中石見字塚ノ塔一ヶ所

同所字井谷一ヶ所

同所字山の神下タ一ヶ所

下石見字櫛挽一ヶ所

同所字びくに山二ヶ所

同所字中の谷山二ヶ所

同所なげしばの向一ヶ所

編者曰、更に下石見半尾峠のものは  
相見雄氏發見最も立派なるものゝ  
一也。又字林ヶ谷三ヶ所、宇田清隆  
發見尙前記石見村の古墳は日野郡野  
史の記事にして編者の踏査せしもの  
にあらず探究を要す。

福 榮 村

福塚字木塔一ヶ所

同所字池の内一ヶ所

同所字簇内一ヶ所

同所字杉坂一ヶ所

神福字神戸奥一ヶ所

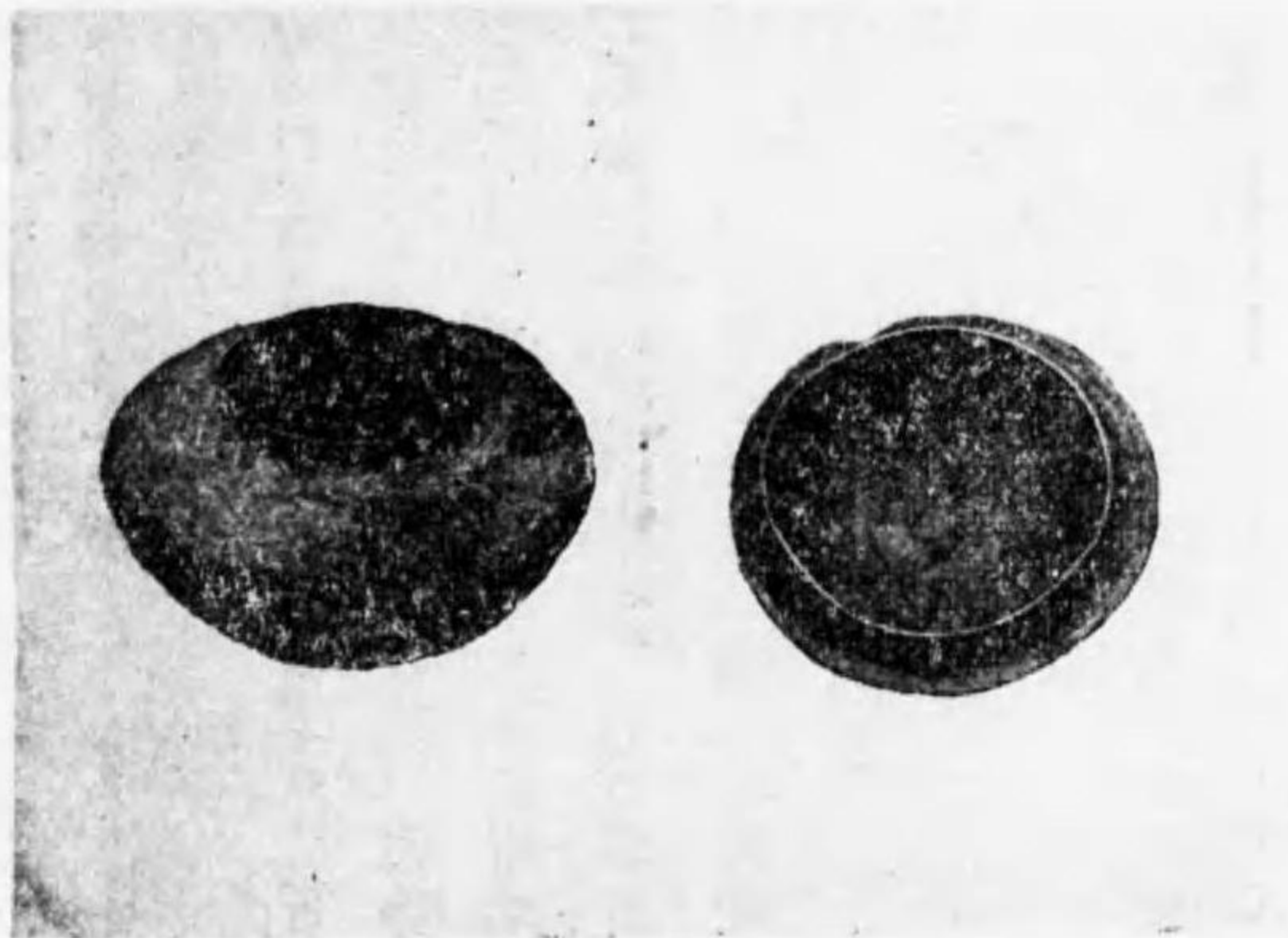
多 里 村

湯河字山根田一ヶ所

同所字菖蒲ヶ塔一ヶ所

同所字三本松一ヶ所

同所字塚原二ヶ所



品土出墳古中山塚福字大村榮福



一の墳古村郷八

同所字けいはな一ヶ所

豊榮字祝ひ神一ヶ所

編者曰、高代三、宮田一、井原二、飛時原一、中野二發見

多里宿古市城の下タ一ヶ所

計百九ヶ所

編者曰、新發見のもの及墟を加ふれば二百箇所に及ぶ。

現在發見されたるものについて、大勢をながむれば、海岸部に連絡せる大山原一帯の地、(八郷村に近き西伯郡縣村石州府に尤多きこと前述の如し)及び備中高梁川上流地に接續せる石見谷方面に、尤も繁昌せるもの、如く、これについて出雲に接せる山の上地方に多きを見れば、所謂東南道一帯にそひて發達せるあと歴然たり。而して日野川中流地方にはや、うすきを見る。左に最も著しきものを摘録して詳説せん。(田ノ原等は例説したれば更に贅せず)。

編者曰古墳のある所は多く塚といふ字を有す。八郷村大字真野の七人塚、八人塚比丘尼塚、黒坂村久住谷の千人塚(七人塚ともいふ)等或せその類ならんか。

米澤村及大山々麓古墳群落

大山、山麓一帯の古墳群は、西伯郡海岸より、近くは同郡縣村石州府の古墳に連絡して、本郡内著名のものとする。編者は内藤岩雄三十年前、大體の酷查を了したるが。

大正十四年七月十日、更に、再米澤に入りたるに、古墳群落、殊に其形式の珍とすべきものを發見せり。同村大字杉谷加藤金一裏山字小竈に東南面せる大なる緩傾斜面あり。(斜面約三十間中六十間)地質は安山岩の露敗せる所謂ナメラと稱するものにして、此方一帯にこれを見る。その斜面の頂點に近く相

並べる二個の古墳口を露出す。(向つて左を甲號とし右を乙號とす)甲號は羨道のII字形をなせる岩石現存し、繭形なる蓋石もあり。乙號は羨道の石とりのぞかれ、玄室の様式を直に見ることを得。兩者共大體に同形式にして、玄室は硬質のナメラを穿ちて作れるものにて、今尙鑿の跡歴々として見る



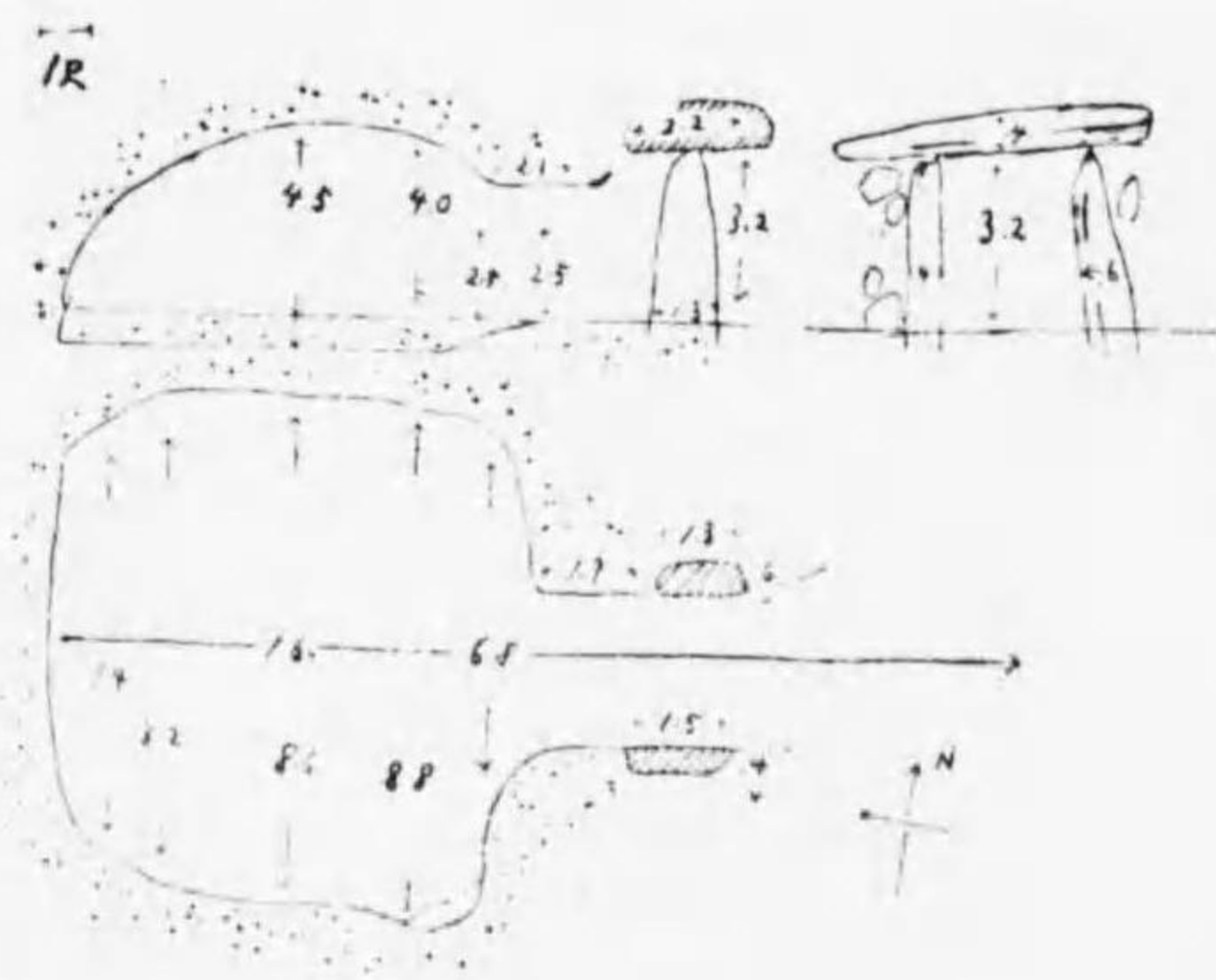
米澤村大字杉谷古墳



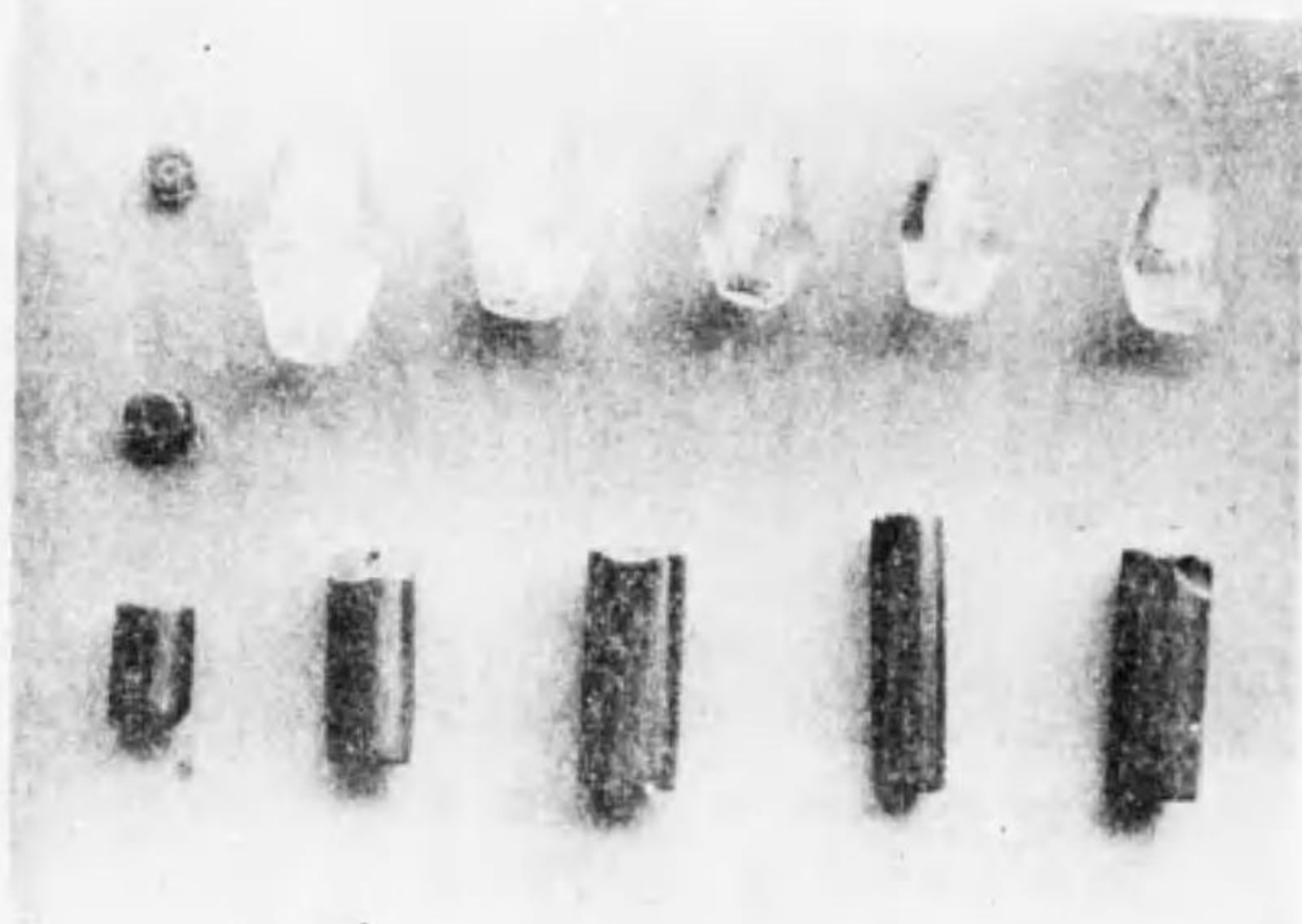
米澤村大字杉谷古墳甲  
羨道石造・玄室得敗土中掘鑿

べし。殊に乙號の天井にあらはれたる石を、平鑿にて削りたる痕の見ゆるは頗面白し。痕跡によりて察するに鋭利なる金屬製の道具を用ひたるが如し。尙乙號には、壁の中央を横ぎりて、横線あり。壁

の三方にわたり、恰も器物に蓋をなしたるが如く見ゆ。これは恐らく、自然の現象なるべきも、一見人造かと思ゆるほどなり。又同室内右方の壁面には、十様の大きな長一尺三寸位の溝あり。その他所々に( )様のわざとらしき稍深き孔あり。幼稚なる壁畫と見るべきか



米澤村大字杉谷の横穴  
下村章雄測圖



米澤村大字杉谷古墳出土切玉等  
加藤一金郎藏

(羨門を石にて築造せるは珍とすべし)

甲乙兩方の玄室の形、甲號は圓く乙號は方形なり、天井は兩方共(形をなし、床面は低平にして、亦石を用ひず。今大さを見るに凡左の如し。

甲羨道。左右の立石右中一尺二寸 左中一尺五寸蓋石横五尺五寸 厚二尺厚一尺五寸その口前面に左右各數個の岩を積みたり。

乙羨道。羨道との境界をなせる圓孔の大きさは直徑三尺、室内の横徑(長徑)八尺六寸、奥行(短徑)七尺五寸、高さ四尺五寸

乙羨道、破壊、玄室との境界孔、方二尺、  
玄室、方十尺、高さ、六尺三寸、

室内出土品は、兩者共土器の出でたるを知らず、曾て出土せりといふ玉類を山の持主加藤家に藏せり。(刀の折様のもの及五徳破片の様のものありたれども今なしと)

曲玉 赤瑪瑙製五顆

管玉 瑯玕製八顆

切子玉 水晶製十顆

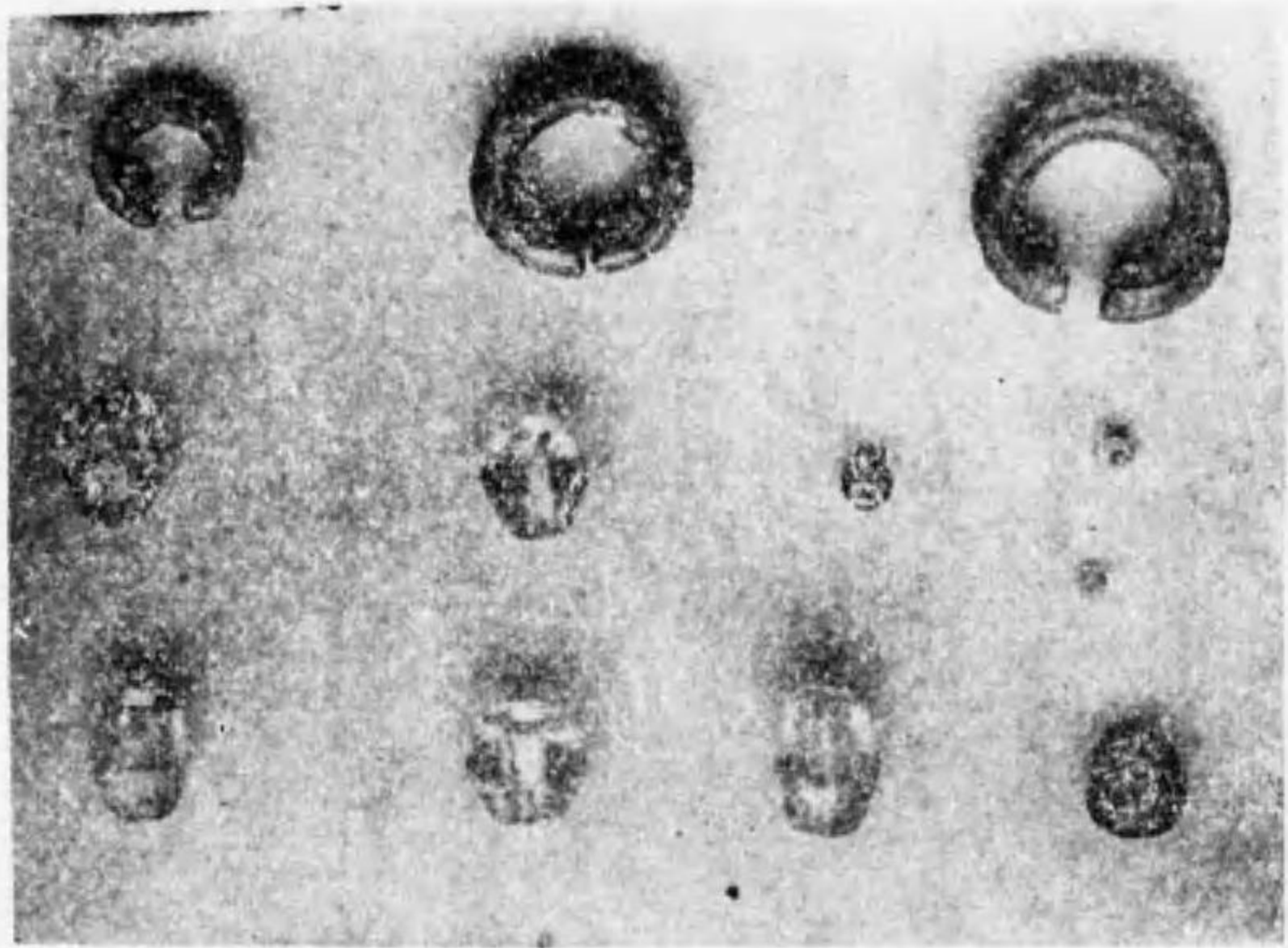
小玉 硝子製と思はる、もの黒一青二翡翠と思はる、もの一

右小塔の状態を察するに、隱岐に於ける飯の山横穴の如く、多數のナメラ古墳を包めるにはあらずや。探究を要す。

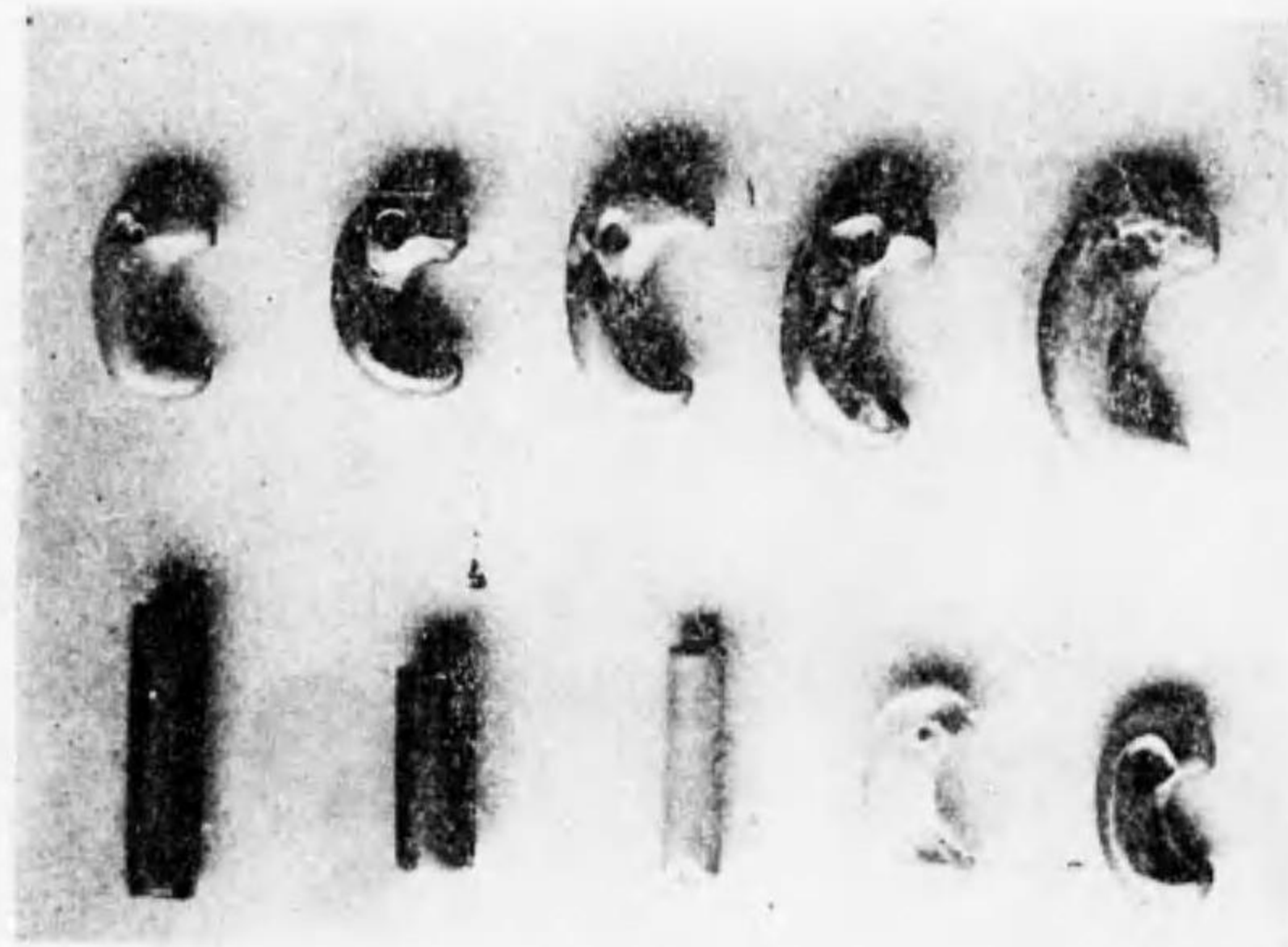
又兩孔の上方數間にして八形の頂點あり。古來經塚といへり。今ついて見るに小丘をなし、一部には堆石あり。元來米澤村地方は多くは角閉安山岩より成り、大岩の見るべきものなきに、同村宇山ノ神側及今一所にある古墳の如き頗る大なる岩(長七尺、巾五尺、厚二尺にあまるものなり)を組合せて作れり。谷深く、通路險峻なる同地に於ける作業の如何に困難なりしかを察する時、うたゝ先人の偉大さ

を思はしむるものあり。

同村美用御机の間を塚原といふ。田地開拓の際赭色土器中に鼠色土器を入れたるもの出土、今は鼠色土器のみ川上松太郎方に藏せられ居ると。今赭色土器を見る能はざるも、同地芦立神職の實見談を聞



等玉子切環金土出墳古谷杉字大村澤米  
藏 郎 一 金 藤 加



玉管玉曲土出墳古谷杉字大村澤米  
藏 郎 一 金 藏 加

くに、彌生式ならむかと察せらる。即彌生式土器中に祝部式土器が入れられありたりとせば過渡期に於ける何事かを語るものにあらずや。

同村内美用御机下り蚊屋方面にも多數ある見込にて大山横手道に上る所にも存せりと。それより、日光村八郷村へかけて、尙ほ探査の歩をすゝむるに従ひ、頗る多數に上るべし。

因に鳥取縣史績勝地調査報告書(主任梅原末治)には山上の古墳一と塚原古墳とを主とし、金屋谷ノボシ原古墳群及新屋字千曾横穴(陶質坏十數箇合)等數箇所を採録するに過ぎず。

古墳時代に於ける遺物中の逸品

完全高杯 皿部周圍一尺一寸五分臺周八寸四分高三寸八分黒坂村矢倉峠出土

上石見 安達輝男藏

はさふ(豚) 周一尺一寸一分出土未詳

同 田ノ原 弓 場 氏 人 藏

横 甕 同

因二十年前に掘出したるもの五、六十個ありしかども散佚して今はなしと

提 甕 高六寸徑四寸七分日野上村字糠庄井手原出土

平 甕 同所發見者

相見義健藏

前記大甕破片

(二部小學校、内藤岩雄、宇田清隆所藏)

大 瓮 御机城山麓出土品

河上 與 吉

1 金環、銀環、銅環 田ノ原弓場氏發見の内

2 1 宇田清隆 岡勇治郎 内藤岩雄

前記はさふと共に數十個発見せられたるものゝ一部分

3 弓場氏

劔柄頭被金圭頭式

同 上 内藤岩雄

宇田清隆

佐伯勇四郎

曲玉(大)

山上村河谷出土 根雨窪田令吉

宮内村塚原発見 霞相見清衛

原史時代人骨

塚原句墳出土 山上校

玉類各種多數

米澤村杉谷 米澤加藤金一

玉

同舟谷 同加藤友一

糠庄古墳出土 大正校

石見村銀山出土 石見校



古墳見石上 安達輝男藏 品土出墳古

原史時代人骨 劔(刀身)

高 白色坏(珍品) 坏

同 上 同 上 同 上 同 上

祝部土器製造所付水甕について

大正十四年七月四日紹介者池田茂一郎の東道にて内藤岩雄加藤章太安達一彪同行四人日野郡二部村大



山中部三字大村部二 土器製造所址



三中部大土器破片出土の地

字三部(古代の野上郷本村)中山(幕府時代の御立山、今學校林)、部落に近き小山に至り粘土探堀中偶然

土出せりといふ土器に就いて調査せるに、驚くべき大形の横甕にして、累々層をなして出土する様全く稀有のものにしなり。今一つについて其口径を測定するに、約一尺六寸あり。従つて俵形胴體は少くも長徑五尺、短徑三尺位はあるべきを以て、如何にその豊大なるかを知るに足らん。厚さ五分前後にして色澤、紋様朝鮮土器の特色を有し、質は頗る堅硬にして、金聲を發す。頸部の外側には幾何學的紋様帶模様あり。精巧を極め、數本の大線を以て三段に區劃し、最下部は肩に續けて、廣き細直線模様を畫き、上部二段には極めて細緻なる波模様を附したり。(大小種々あれども大體圓形)調査の歩の進むに従つて、發明する所頗る大なるべしといへども、現状より推せば、此地良粘土を有するより、土器の製造として、盛に製造せし其の破片を累積したるものにあらずやと思はる。現に内藤岩雄採集品の肩部には前述の如く土器同色の小石焼付られ、又肩部上反せるを見る。而底部と思はるゝ部分も凹みて木理様のかろき線を現す。全山に互り、土性及採掘跡、其他内外兩部の細密調査を要す。(七月五日報告)

大形の朝鮮土器即水甕らしき土器は、古項に伴はざるを普通とするを以て、疑問の内でありしが、鳥居龍藏博士は、朝鮮の風俗より推定して、水甕のある所は、部落のありし所にて、必ずしも墳墓に伴はず。此水甕の破片の包藏地點を調査せば、當時に於ける部落の位置をも知ることを得て、文化史上有益ならんと語りたり。

それによりて考ふるに、前述三部の土器製造所(水甕専門らし)は雲伯地方に水甕の供給をなしたる所にあらずやと思はる。此地和名抄に所謂野上の郷にして、地勢亦頗る四通の地にあり。山腹を巡りて

直に天萬剗に過する古道あり。川に添ふて下れば一路日野川の平野に達すべく、川に添ふて廻れば、

阿太、葉侶、日野地方に行くことを得、武庫にも遠からず。もとより六郷以前のものなれども、その内消息の通するものなからんや。

歴史的には尙武内宿禰の裔として、伯耆の最舊族進家は海藏寺に居り、古市及外構(三部のつとま)に分家したることもあれば、これらとも連絡して考ふる餘地あらん。(系圖及傳記部参照)

同七日内藤岩雄、宇田清隆等再調に向ふ。前記の如く三部中山は、所謂野上郷の里近く孤立せる小丘にして、頂上は平坦なり。地質を検するに、下部は長石の含量極めて多き花崗岩の露敗せるもの露出し、半腹に上るに従ひ、全山粘土を以て掩はれ、其粘土の色凡三種(赭、薄赭、白)となり、粘質極めて強く、壁土としては稍々粘きに失す。砂粒を交ふることなく直に粘土細工に用ふべし。

現在出土の地は山の南にあり。その麓を清冽なる溪流の絶えず流るゝあり。陶器製造地として恰好の地位を占む。出土状況は、地表下二三尺の所に大破片として包藏され居り、最上層は腐埴土にして。凡二尺、その次は



三中部山出土大土器破片

直に粘土にして一見稍々粗鬆、人工によりて一旦崩壊せしものにあらずやと思はるゝ、點なきにあらず。粘土凡一尺にして出土品は山の傾斜面にそひて大體上圖の如き断面をもつてあらはる。

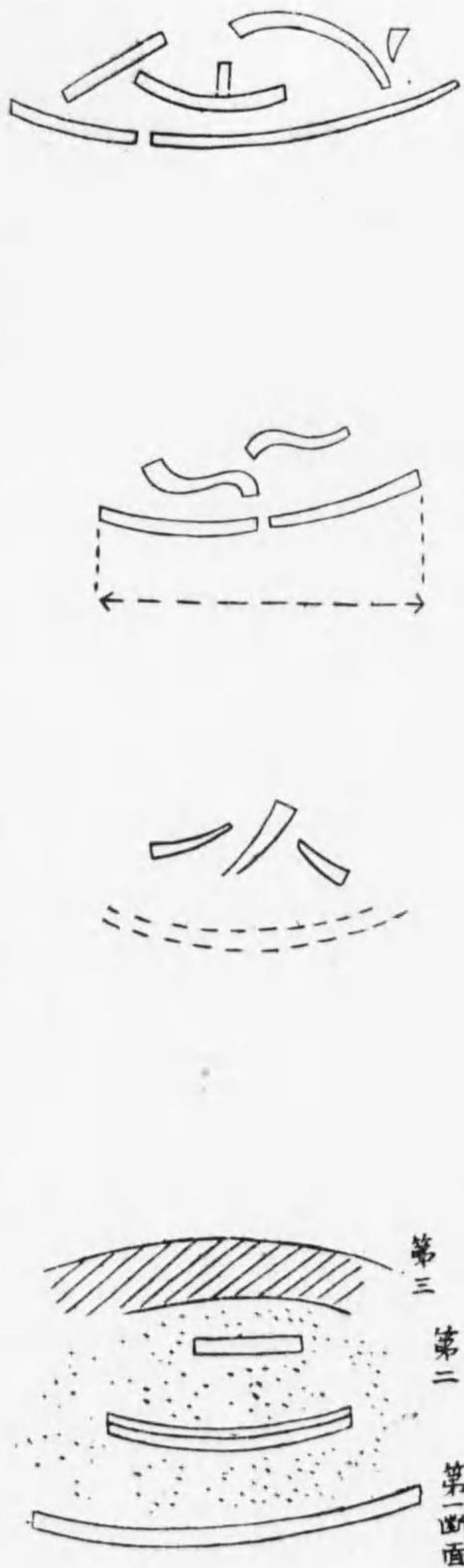
(第一断面は發見當時の實況實話により推定す)

第一断面

第二断面

第三断面

斜面圖



それとの破片は大小種々あり。頸部も數種あり。恰も大瓮の壞れたる底部を放棄したる中に破損物を投入したるもの、如く思はる。尙他の部分よりも出土したることありといへば、探究の歩を進むるに従つて種々なる事實を發見するに至るべきも、その破片中、著しく歪みたるもの數個を此日拾得し得たるより、その製陶所なりしことを確め得たるが如し。

前記の如く、此山は長石多量の花崗岩質の上に、粘土を掩ひたる有様なるを以て、粘土以外の製陶原

料を有せず。圖に示せる黒色小石が果して石粉(著色及硬度増進のため)材料なりとせば、その小石と同質のものを近傍に見出すの必要あり。附屬に散亂せるものなきかと思はれども遂に見當らず。道を隔てたる岡平に橄欖岩の産出するあり。附着小石は、これと全く同質のものに屬するが如し。これによりて我等は硬質にして青黒色(ここに本出土品には青のみ強きものあり)。なる土器の製造法を暗示せられたるの感あり。

それについては、非常なる高度と熱を與へたる製造竈の跡を求め、その組織を研究せんことを切望せしが、未だ手がかりを得ず。又此製造の製品が近傍、いつれの方面に運ばれたるか、この出土品と同一のものが、少くとも郡内何處に頒布され居るかを調査するは頗興味あることなりとす。

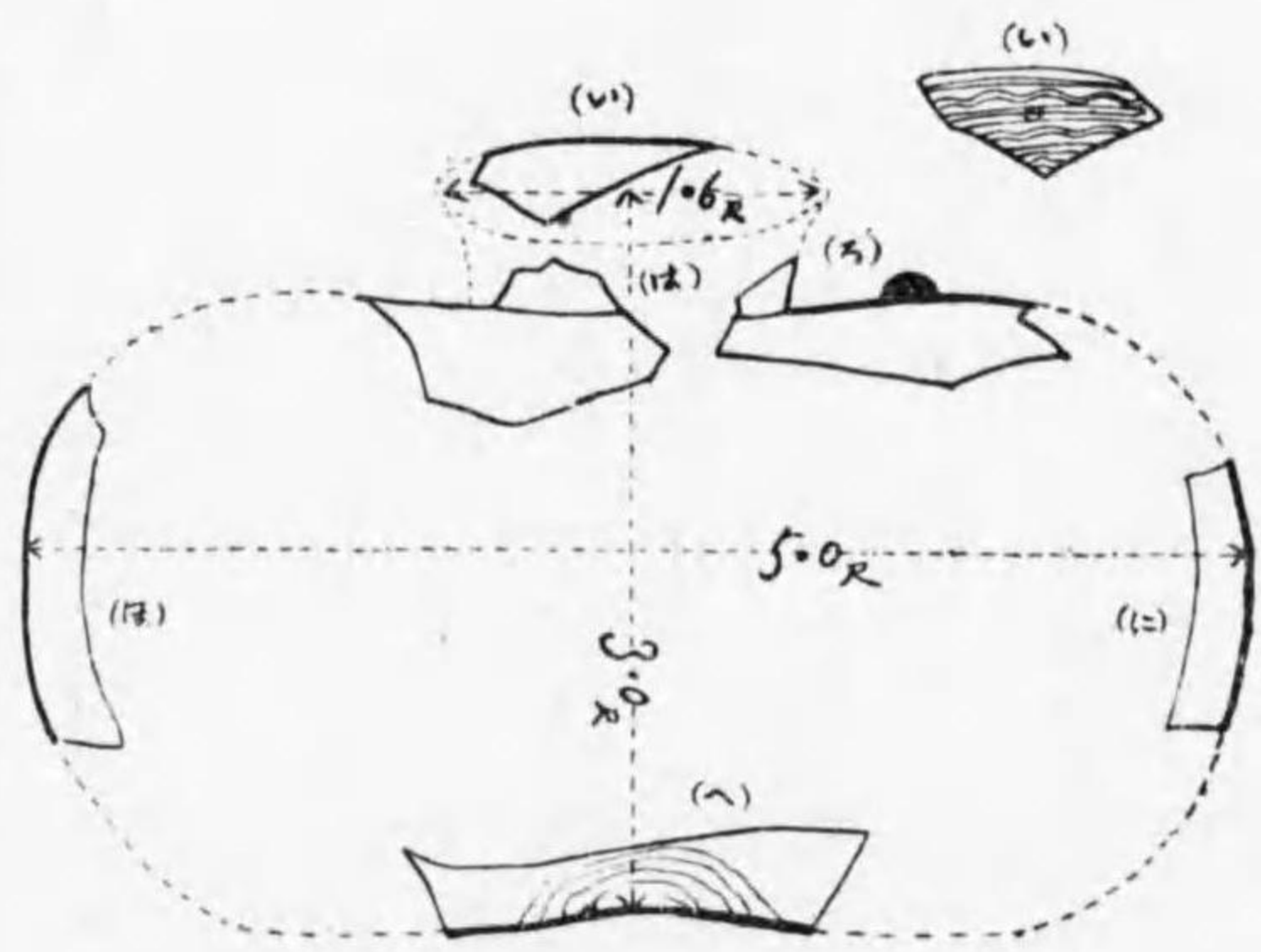
此出土品は水甕もあるべけれども、非常に大形なるにより推して酒甕として用ひたるものならんかと思はるゝ、ふしあり。帝室博物館藏品中にも素焼の酒瓶あり。大和大神社附近には土器の酒造器とおもはるゝもの多く出土すと。これらの類ならんか。

三部中山出土品大横瓮還元圖説明

この還元圖に示せるものは、出土品中最大のものにして、(ろ)(は)(に)(ほ)(へ)は同質にて青みあるもの、(い)は表面に黒色の釉薬様のものあれども、弧の一部及紋様全く(ろ)(は)(に)に等しきものにて、現發見中、縁邊の完全なるものゆゑ、還元の参考材料とせり。而して(い)(ろ)及(へ)を主要材料として大横瓮なりと推定す。

これによれば此横瓮の口径は約一尺六寸にして、高約七寸の頸部は、相當の角度を以て外側に傾く。

品により角度種々あり。口径及頸部其他腹部破片等により、相見龜雄所藏出土の中形横瓮の寸法を標準として還元せるもの左圖の如し。



圖元還瓮横大土出山中部三

肩部強く反りたるは、その歪みたるより見て或はやき損じたるものならんか。然れどもその姿態によりて、その偉大さを窺ふに十分なり。(c)は極めてすなほに豊麗なる曲面を見せ、(e)は拗體著しく殆んど統一を破るかの觀あり。何れも頗る雄大の氣に充ち、厚き四分乃至七分あり。うてば金聲を發す。殊に特筆すべきは

標準出雲出土横瓮 相見龜雄藏品

三、(c)の肩部に黑色の小石の焼付けられ居ること。これは思ふに土器原料の小石が偶然に膠着せ

二、同及其他の破片に黑色釉藥をぬりしかの如く見ゆること。尤もこれは自然にじみ出でたるものなるやはかられざれど、その普くゆきわたれるより見れば、人工によれるものらし

るものか。この石質橄欖岩らしく、中山の隣、岡平に産すること前述の如し。

四、(e)は底部と思はれ、いたく歪みたれども中央に木理紋様あり。尙裏面に焼割疵あり。

五、此出土品には多くの焼損品のあることなり。

第七節 神社分布

神社の祭神必ずしも、直にその土地に縁故ありとはいひ難く、將又、中には祭神に異動を生ずる等の事情もあるべく、強ち信じ難きものもあるべけれど祭神と土地民族の間には隱微なる神秘的關係の存するものなれば、これが分布を瞥見するは頗る緊要の事なりとす。依てこゝに本郡内に於ける神社祭神中、天照大神、素盞鳴命、大國主命、少名彥命、猿田彥命、天鈿女命、思兼命、元兒屋根命、武甕槌神、經津主神、大山祇命

等神代史中重なる神々について、其祭祀柱數と分布狀況を見、且つ出雲方面との關係を見んとす。今日野郡野史によりて郡内神社について、祭神の柱數を檢するに、大山祇の百一柱を第一とし、素盞鳴の四十七柱、これにつき、大國主命、第三位になりて二十四柱なり。其他金山彥二十柱、天皇大神、十八柱、少名彥、思兼命十柱、大物主十柱、(大國主の荒魂なれば、これを前の二十四に合すれば、三十四となる)伊弉册、保食神六柱、經津主、武甕槌、伊弉諾、武御名方の各五柱、天忍穗耳四柱、大年神三柱、大國玉三柱、(大國主の和魂なればこれを前の二十七柱となる)。猿田彥二柱等とす。



## 第八節 神代記に關聯せる日野郡

郷土史料日野郡史話に曰

太古に於ける山陰地方は、出雲丹波の二地方よりなりしは、學者の定論にして、その疆界けじめ定かならねども、因幡以西出雲地方に入りしは明なり。抑々出雲石見の史に見ゆるは、崇神の朝天穗日命十一世の孫宇賀部久怒命の出雲國造に對せられし時にして、稻葉伯伎の始まりしは、成務の朝大八木身尼の伯伎國造に封せられし時なり。されば古事記に所謂稻葉の八上姫、伯伎國の手間の山本、出雲國と伯伎國との堺比婆山などあるは、この記編纂の時、其位置を示すよすがとせしなれば、神代の昔これらの國ありしにあらず。

素戔五十猛命と共に、韓地に入り、檜樟の種子をもたらし、後出雲の須賀に稻田姫を娶り給ひ、御子大國主命國土の經營に従事し給ひ、天日隅宮を中心とせる出雲民族の發展期に達し、一葦帶水を隔てたる新羅に殖民地を有し、相互の交通頻繁にして、浮寶盤樟船などの船舶は、出雲灣より美保岬、髙陵島より旭日灣に航路を開き、大陸の文明を輸入し、内は山陰の大部の開拓を進め、山間に蟠居せる或は土蜘蛛の征伐に或は針蒙を携ひ、荊棘を開き、以て殖民の利福を圖り給ひたり。郡内大國主命の鬼浪治を傳ふるは、決して妄誕にあらずるなり。命を祭れる神社の多きはこれが爲にして、又故あるかな。

ご即ち日野郡は出雲地の中央に位し、所謂正史のヒノカハカミ地方にして、日野郡の神代史は、郡の西南隅に聳ゆる鳥髮峰と日野川にかけて考へざるべからざること、前にも屢々いへるところなり。

## 第九節 上古時代

我日野郡の上代史は、本郡宮内村に鎮座したまふ縣社樂々福神社にかゝるを以て、稍々其真相を伺ふ

ことを得べしと信す。即ち同西社祭神大吉備津彦命が四道將軍として中國地方を鎮撫し給ひし事跡中、よしや正史に闕くる所ありとも、我日野郡方面は、その關係最も深きものあるが如し。以下節を追ふて闡明につとめんとす。

## 第十節 樂々福神社及崩御山

樂々福神社縁起なるものあれども、史實としては、到底十分なる價值を認め難きものなれども一の傳説としてその裏面に伏在せるものを探究する便ともなるべければ、内藤岩雄著「樂々福神社縁起考」を抄録して參考とす。

思ふに樂々福は笹葺などの俗名にはあらで、大吉備津彦又は若建吉備津彦命の父の名樂々葺にはあらざるか。葺といふは當時に於ける名辭ともいふべく、彦國葺などいふもあり。日本書記によれば、その十年吉備津彦を西道に遣したまふことあり。ついで六十年吉備津彦と武停名河別を遣はして出雲振根の曲狀をせめて誅せしめられしことあり。蓋し宮内村は備中川を遡りて、中國山脈中尤も低き石見の峠をこゆれば、直にその處なれば、備中吉備津神社とも關係あるべく、ここに後段出雲振根を征せられし時の如き、わが日野郡を通過あらせられしこと疑なき所なり。

(參考) 地名辭書の一節に伯耆誌に云々相傳ふ。孝靈天皇、備中の蟹魁帥を征したまふ時、此地に巡幸あり。皇后細姫此に崩すと。天皇にはあらず。吉備を征したまへる稚武彦にや。細姫とあるも稚武彦の妃なるべし。云々)

同社は式内の社にあらざれども、全く土地僻遠にして國守の調べ漏し、ものなるべし。其起原は頗る古きもの、如く、宮内に隣れる今の福榮村に神戸ありて其また隣村に神戸上(今カドのカミ)あり。思ふに和名抄神戸の卿は石見谷にして、崇神記七年の條に

天つ社國つ社及び神地神戸を定む。

とある、それによりて、樂々福神社は、少くとも上古に祀られたるものにして、その神戸として石見谷を献られしものと覺ゆ。

樂々福神社縁起考(明治二十六年起稿  
内藤岩雄)

(編者曰、便宜上傳説部に譲る。寺院部神宮寺縁起等参照すべし)。又樂々福神社の祭神を古事記により西社大吉備津彦東社若建吉備津彦とする説あり傾聽すべし。

孝靈天皇傳説補遺

一、宮内村東村に鬼塚と號し方五間餘の古塚あり、天皇の退治せられし所の惡鬼を埋めたる塚といへり。(伯耆民談記)

編者云、東樂々福神社前島地に今尙存す。積上式ならんか。その近傍太刀洗の池あり。

一、日野郡宮原村に御座ありて惡鬼を盡く退治し遂に此地にて崩御あり、其神跡として社の後方八間の岩窟あり(同)

一、生山村山上に柴灌と稱する地あり、孝靈天皇の皇女福姫誕生の地なりと云ふ。同野新屋村御笹山は孝靈天皇稻を積み亞ひし跡なり。此山に稻倉大明神を祭る(因伯大年表)

一、從軍の勇士は大水口宿禰の子新の森王子、同大矢口宿禰の男那澤仁與外七士なりと口碑に傳ふ。編者云、宮内入澤家は那澤氏の後なりと云代々樂々福神社に奉仕し、同社縁起卷物を藏したりしが、今他に轉じ該文書紛失せしよし、編者が縁起考に後半部を存せる外、舊地方史料所々に散見せるのみ。

樂々福神社の側に山あり。山の日野川に向つて迫るところに古墳あり。崩御山といふ。同古墳は雜誌歴史地理第二卷第一號に、八木葬三郎氏應答に

「質問の古墳は既に日本考古學會雜誌第一編第七號に報導せるものにして、近くは東京帝國大學なる理科人類學教室發刊の古墳横穴地名表中に採録せり。而して獨修子(内藤岩雄)が記する如くなれば塚の高さ六間四尺(編者いふ崩御山は一方山により一方日野川の斷崖にかゝり、日野川方面よりつき上げたるところを指すなり)ありて餘程大なる様に見える。今右の塚を大吉



日野山上村崩御山全景

備津彦の墓(編者いふ。こは元樂々福神社々司、大道雜誌社長故川合清丸翁の所論なり)なりや否やを確めんと欲せば、墓制の沿革上其時代に適合せるや否や。又遺物の種類は如何なるやを調べ。次に歴史及口碑傳説の類に徴して、兩々對照する事を務めらるべし云々」

莫制上、當時、山腹に設けられたる時代なれば、更に疑ふべき餘地なきも、發掘して遺物を調査すること能はず。現に千古斧鉞の入らざる境にして、敷丈をめぐる槻の木など晝なほ暗く、こゝには「山たにし」てふ蝸牛類の蓋を有するものあり、何れにしても千古人跡不到の地にして容易ならざる由緒あるもの、如し、美保神社禰宜清水真三郎氏は大吉備津彦の命の妃の墓ならんといへり。(縁起には細姫命



崩御の山古墳



東樂々福神社側鬼塚

此地に崩御の旨記せり)或は然らんと肯かるる點なきにあらず。備中吉備津の宮縁起と對照して、一層の研究を重ねる必要あり。

蓋し西社主神大吉備津彦命の御陵墓は備中吉備宮側に推定せられあるを以て、當地方に殊に因縁深しとおもはる東社主神若建吉備津彦命の陵墓と推定するは當を得たるものならんか。

因に記す、矢戸入澤武治氏の俳友、四伯郡境町(現今米子在住)の人谷尾長氏、日野郡史編纂を耳にし、樂々福神社の祭神に關する所見を同氏に寄せたり。入澤氏は更に同書を内藤委員に轉送す、時恰も全卷脱稿の時なり。然れども高論卓説傾聴に値するもの少からず、池田宇田兩委員校正の用務を帯びて京都に趣くや、これを沿革中に採録せんとせしも、己に上梓殆餘地なきを以て茲に其の要旨を概説し、全文は口傳傳説部に挿入することとせり。

三宮三征説

- 一、本 宮 西、樂々福神社  
祭神 大日本根子彦太瓊尊 (第一征孝靈天皇御親征と同時に御軍に従はれし神々)
- 二、若 宮 東、樂々福神社  
祭神 稚武彦命 (第二征、吉備津彦命若建吉備津彦命に相當す)  
弟稚武彦命
- 三、今 宮 (舊社地跡なかるべからずとの説なり)  
祭神 大水口命 (第三征、稚武彦命弟稚武彦命の御征伐に従はれし神々)  
大矢口命  
豐石碓命

第十一節 吉備津彦命に關係ある諸神を祀れる神社

前節の如く縣社樂々福神社東西兩社(編者いふ日野川を隔て、東西兩社あり。かゝる社制は日本にも稀なるを以て、己に今回神社整理の際兩社合併を願ひ出でたるも許可せられざりき)。を始めとして、本郡中には吉備津彦命及關係諸神を祀れるもの四社あり。其一は日野溝口村大字宮原に樂々福神社。其二は奥日野山上村日谷神社(元王宮神社)にして共に郷社たり。その三は印賀なる樂々福神社(字大宮)にして、吉備津彦命の義母とも申すべき孝靈天皇妃細姫命(社傳には媛姫即皇女たりといへどいかゞ)を祀れるよしいへども社號より考へて、恐らく、吉備津彦命を主として祀れるものならん

か、その四は黒坂村神社菅福神社(元高宮神社といひ古棟札に皇宮とあり)なり。  
 山上村及び印賀村は宮内村を距る里餘の間にあり。出雲に往來せる所謂東南道にあたれるところ、溝  
 口及黒坂は日野川の下流より宮内村地方に至る沿道にあり、深き縁由のあること疑なし。  
 縁起には細姫命日野川を遡りて御遠征ありしよしあり。或は命の備中吉備津方面より御發向なりたる  
 に邂逅せられたるならんか。出雲方面に於ける神社分布を見ても、宮内邊より東南道にかゝり出雲路  
 に越えて、杵築附近に至るまで、進發せられたる跡歴然たるものあるが如し。  
 因に西伯郡宮内村に高杉神社亦同神を祀る。すべて同神を祀る地、多くは宮内大宮宮原宮本等宮の  
 字を附せり。

尚日光村大字柿原無格社山田神社に孝靈天皇の靈を祀れり。(口碑傳説部參照)

### 第十二節 中古時代の日野郡

前述の如く和名鈔(延喜年間源順著)に己に日野六郷あり。所謂葉侶(今ヨコロといふ)、阿太、神戶、  
 武庫、日野、野上にして、日野郡の名は天平年間に撰ばれたる出雲風土記仁多郡の條にも、伯耆國日  
 野郡の堺、阿志毘縁山に通りに云々等の文あり。又同書通度の條に、東南道(中略)其の一道は東三十  
 八里一百二十一步。國の東南の堺に至る伯耆國日野郡に通ふ云々とあり。又延喜式にも載せられたり。  
 文學博士吉田東伍氏の地名辭書によれば、古の六村につき、左の如く推定せり。

葉侶 今山上村宮内村の邊をいふごとし。云々

阿太 溝口などの邊歟。云々

神戶 今福成村石見村などの地歟。云々

武庫 今江尾村神奈川村根雨村等なるべし。云々



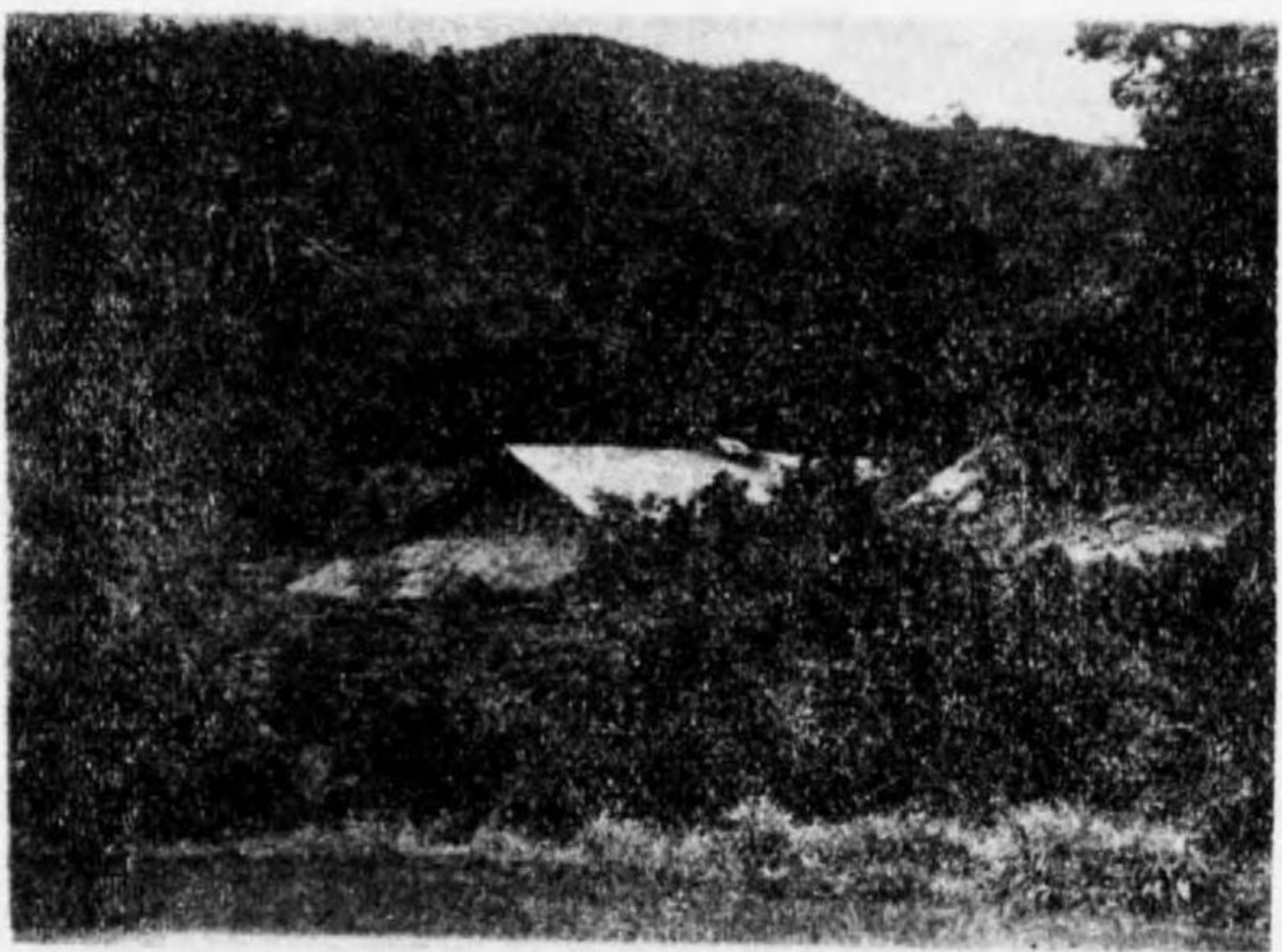
神 戶 部 落



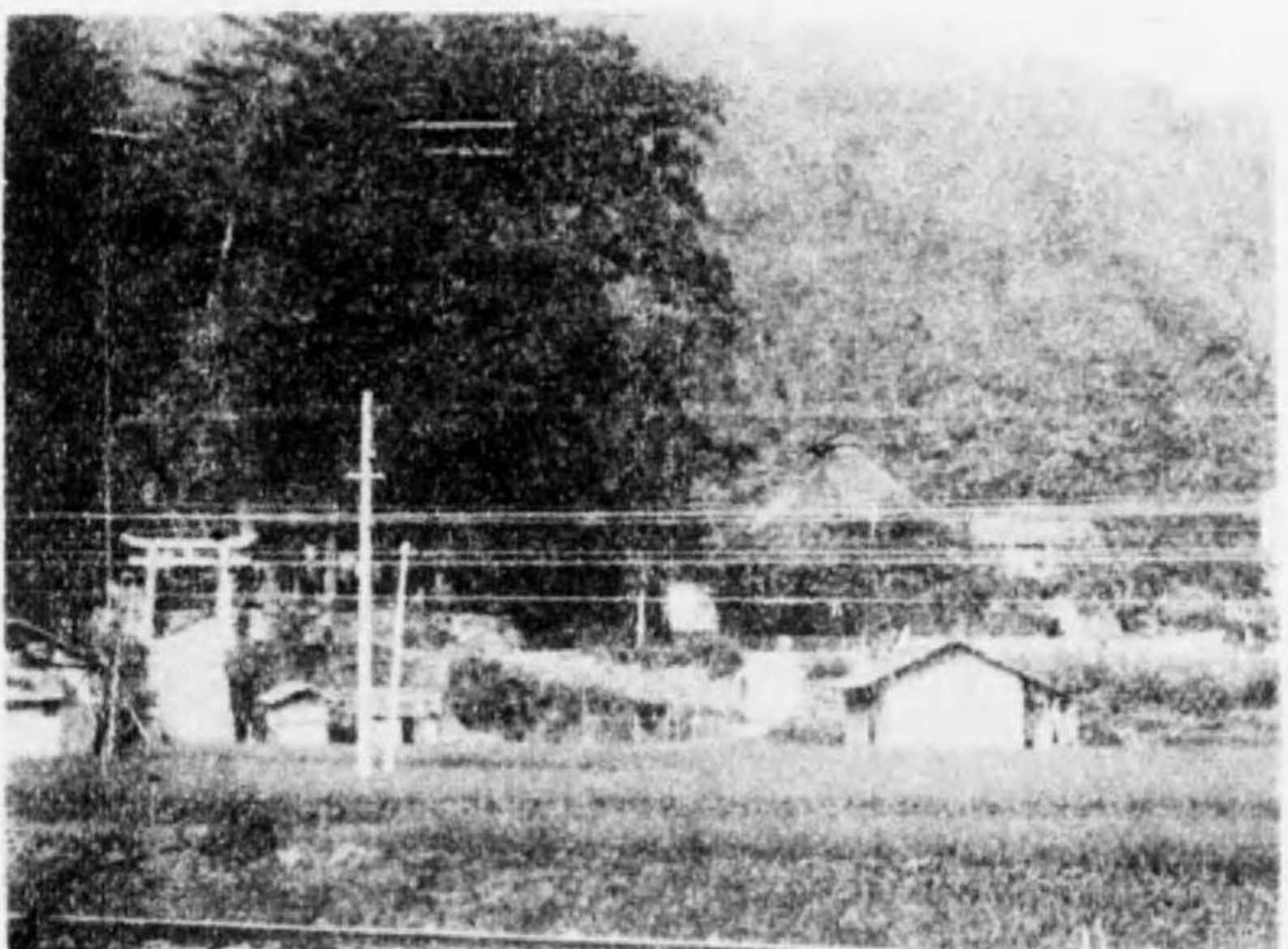
神 戶 神 社 趾

日野 今黒坂邊なるべし。云々  
 野上 今野上村二部村是なり。云々

されども、現存せる小字名等につきて、調査足らず。遺憾なる點多し。今現存せる小字（編者いふ。小字には古來言ひ傳へて正確なる由緒多く、もとより淳朴なる農民が特に僞稱すべくもあらず。また



阿太上



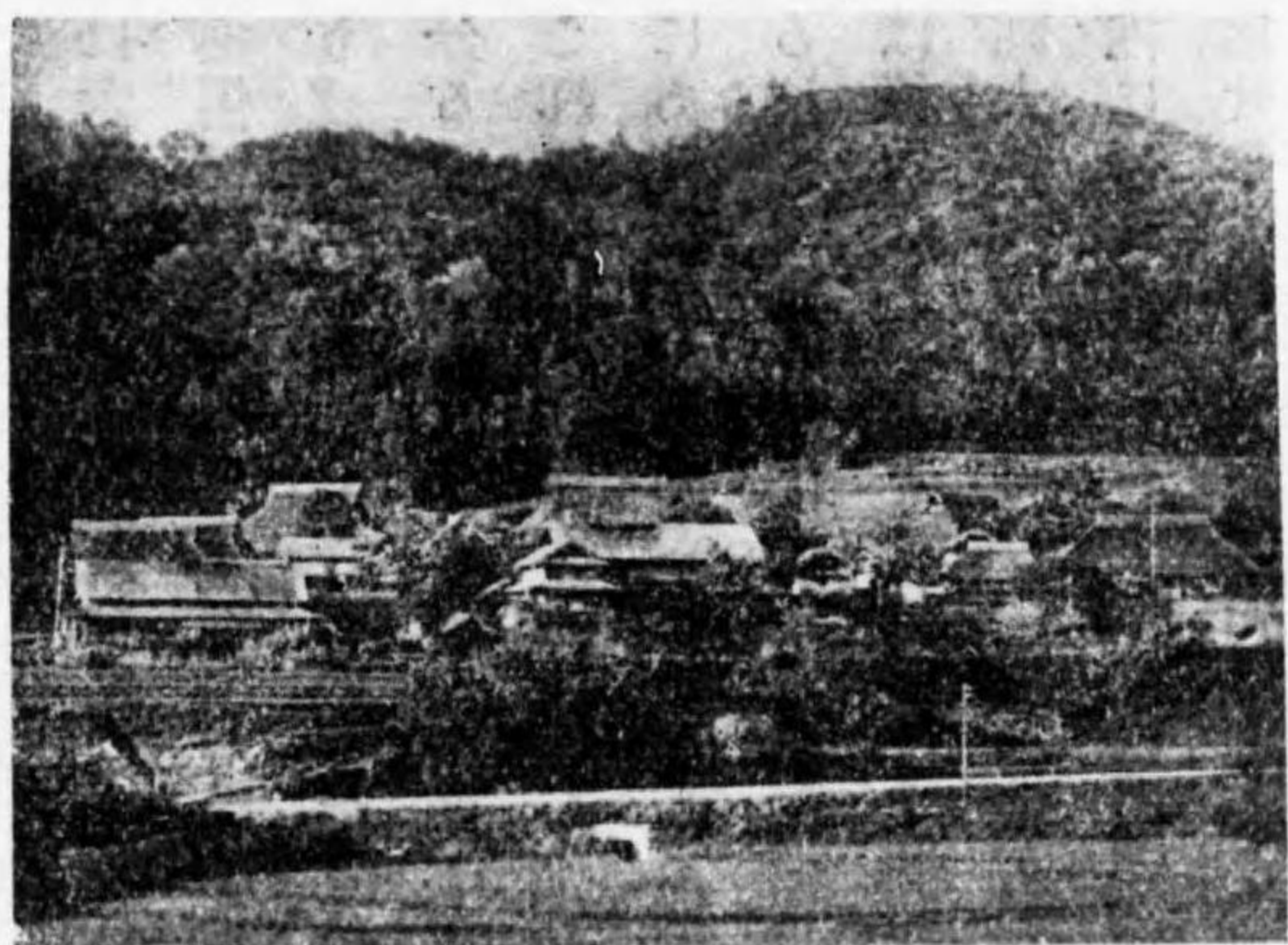
武庫部落

の研究を俟つ。

奥日野郡は、出雲より山陽道に通ずる要路に當り、太古より頻繁に交通せしことは推定に難らず。御慕山、鳥上峰ヒノ川上、大吉備津彦の遺跡、郡家遺跡等によりて考ふるも亦奥郡が早く開けたること

その痕跡の見るべきものもなし。を一々調査し、これを経とし考古學上の先史原史國史の上古各時代に於ける歴史的發達の經路を緯として考證すれば、日野郡は奥部よりも開けたる形跡あり。隨て中古に於ける六郷は、多少奥部に偏したるものと思はる。記して後人

を斷定することを得。六郷中、葉侶、阿太、神戸、日野は奥部にあり。武庫野土は口部なるが如し。先郡家（郡を主宰せる郡司の在りしところ。大化年中縣を改めて郡となし之を國に隸す。續日本記に和銅六年三月詔曰任郡小領以上者性識清廉云々あるこれなり）。について見るに、今の石見村の内大字



郡家部落

中石見地内に郡家あり。（編者曰、中石見は友廣、郡家、宗金、銀山の五村を合併改稱せしものなり）。此處なることは郡家の地に大三輪の神を祀り（現今は合祀せられてなし）程遠からぬ上石見村舊月瀬村に月瀬神社のあるによりても知らるべく、（註大三輪神と郡家との關係は最初の郡司大和より來りて茲に産土神を勧請せる形跡あり今郡家に「神下しの地」と稱する地あり）今なほ月瀬神社の祭祀には、郡家部落が全氏子の首班たり。古來月瀬神社氏子の各部落を名といひ、その内、家格古き家、名頭（支配人格）を世襲せるが、郡家部落の名頭が名頭中の首班を占むる習はしとなり居れるは、蓋郡司所在の部落なりしによれるなるべし。附近の山に巨利の跡残りといふも、郡家に縁由あらんか。ことに況や、東南道の經過地として、最も適當なる地點を占むるをや。即ち出雲、

仁多郡家（今の龜嵩村の内、郡）より出雲風土記に所謂東南道を経て今の阿毘縁（同書阿志毘縁）より今の山上村を通り、日野川筋に出で石見谷に入り郡家に達すべし。今日尙重要道路にして、殊に出雲と

備中とを連絡せる唯一の線路也。(交通東南道考参照)

これによりて考ふるも、奥部が上代に於ける主要地なることを知るべし。更に又鐵の主産地は奥部なる。ことに思ひ至らば、前説について首肯するを得んか。

次に六郷について考證せん。

葉侶 郡の西南、日野川左岸なる高原、即ち出雲に接する一帯の高原に古來山の上と稱する地あり。鳥上峯のふところにあたり、所謂東南道の通過地點なり。現今、山上、大宮、阿毘縁の三村に分る。その山上村大字福萬來に字葉侶残り、(現に葉侶と書きてヨコロと訓めり。

これ即ち和名鈔の葉侶ならん。而してハロとよみたるは寧ろ誤にして餘戸に呂を附したる例も全國にあればヨコロの方正しからんか。本郡中今の根雨町内に字横路あり。これまた餘戸なるべく思はるれど、備中境に近き方面にて、且つ文字も雅ならず。人文發達の經路より見て、和名抄の葉侶には緣由なきやうなり。尙考ふべし。

阿太 今の大宮村大字寶谷にあり。阿太上といふ。もと寶谷村と並びて一村なりしが、今は寶谷の内に併せられ、たゞ僅かに民家一戸あり。こゝに小祠あり。もと前記葉侶のある山上村の内狩場に屬せしが、後大宮に屬すること、なれり。所謂和名鈔の阿太は今の太宮地方(元、印賀、菅澤)なるべし。元來、この地方は、郡中にも鐵質最良の地なることは前にも述べたる如く、曾て御手山(官營製鐵)もありし所なり。

吉田博士はこれを溝口邊に配當したれども、博士自身の言へるが如く、全く證徴なきことにて採るに足らず。阿多上の地、今の太宮村の一隅にのれども、これより元、菅澤村まで、一帯の高原にして、出雲國及西伯郡並に黒坂村にこたへて、一地區をなすに足るのみならず、阿太の文字頗る雅にして到底後人の作にあらざること明かなるをや。博士が他の村々を、一々現存の地名に引當てながら、此名のみを逸したるは、實狀にくらかりしによるものならん。

神戸 郡の南端、備中界福榮村に字神戸(今カドといふ)。あり。鎮座の社を神戸(特にカンベと訓む)神社といふ。福榮村の東隣石見村の内に大字神戸ノ上あり。思ふに石見谷一帯が神戸ならん。

日野 郡の中央黒坂邊にして郷中の豪族日野氏の居城黒坂にあり山手山附近古墳多し此の地を中心として日野川筋は其の域内に屬したりと見るを妥當とす神戸の北にあたりて元日野神社ありしも維新の際に附したる新名にして本證に關係なし、蓋し日野郷に牽強附會したるなり

案するに日野は日野上流一帯の川筋地方ならんか。因に根雨町の南隣日野村は新名にして何等の緣故なし。

野上 日野郡中、この地名今存せざれども伯耆誌二部村條下に野上川あり。新村名野上村といへるはこれに出でたるものか。思ふに二部谷地方ならん。

武庫 口日野部神奈川村に字武庫あり。武庫神社を祀る。民談記に武庫を尊と記し、宮市庄の内とせり。根雨より江尾溝口へかけて、日野川沿岸地方をさせるものか。宮市庄、一つに小原庄といへる地方は全く武庫郷の區域ならむ。

参考 吉田博士著日本地名辭書抄日野六郷

野上郷 和名抄、日野郡野上郷。今野上村二部村是なり。旭村も是に屬す。溝口の西南にして、一山谷を成す。二部谷ともいふ。  
阿太郷 和名抄、日野郡阿太郷。今詳ならず、溝口などの邊歟と想はるけど證據なし。  
武庫郷 和名抄、日野郡武庫郷。今江尾村神奈川村根兩村等なるべし。神奈川の大字武庫存す。智とも書したり。野上郷の東にて日野川のに居る。

神戸郷 和名抄、日野郡神戸郷。今福成村、石見村などの地歟。福成に神戸上の大字遺り。神戸をカドとよむは、後世の訛なるべし。不審。

葉侶郷 和名抄、日野郡葉侶郷。今山上村宮内村の邊をいふごとし。笠木の條參看すべし。

笠木郷 今茶屋、佐木谷等と合せて山上村と改む。宮内の北にして、小原川の谷邊。伯耆誌に應永十五年文書に日野郡笠置郷樂々福神社神領のこと見ゆ、佐木谷の南に葉侶といふ地名のこる。此邊即和名抄の葉侶郷なりと述ぶ。

日野郷 和名抄、日野郡日野郷。○今黒坂の邊なるべし、黒坂に日野氏の墟ありと云ふこと、徴とするに足らん、武庫郷の西南に接す、渡村に本郷と唱ふる大字あり。

日野氏は、東鑑、寛元二年、日野六郎長用あり、伯耆志に日野三郎義行、子息又三郎義泰、その縁者に河追兵衛三郎義員以下十餘人船上山へ馳參する由見ゆ、其註に「平氏、日野太郎掃部左衛門、長門守」と曰へり、當時郡中の大名なりしを知る。

### 第十三節 近古時代の日野郡

#### 一、概観

此時代に於ける文献の徴すべきもの少きを以て、首尾一貫したる記述をなすこと頗困難なれども、精探せる材料の限を盡して、當時の大勢を窺はんとす。

源平時代は中古期なれども、便宜上近古の始に附することとせり。

一、治承四年九月以仁王の侍長谷部信連本郡金持村に配流せられ後下榎村に移り住す。(文書及傳記參照)

一、根雨延曆寺、榎長樂寺、加茂大明神、下榎嚴島大明神の建立(社寺部參照)

一、承久三年七月、後鳥羽院隱岐遷幸の途次本郡四十曲邊を越わたまふ。これによりて民心に鈔からざる刺激を與へたるもの、如し。(傳説口碑部參照)

一、元弘二年三月後醍醐天皇隱岐遷幸の途次御通行或は大山領(現今の米澤日光方面)に潜行ありしやの形跡あり。(同)

一、大山寺の全盛に伴ひ僧兵を貯へ所謂大山領を財源として威を四方に振ふ。名和長年の弟信濃坊源盛が官軍に應じたるは此時なり。

一、日野義行黒坂要害にあり。船上山の義舉に應ず。(傳記)

一、金持景藤勤王の兵を擧ぐ。(傳記城砦部參照)

一、奥日野郡印賀村字塔の山及び口日野郡米澤村の内助澤字龍王の山腹に正平塔あり。前者には正平十二年十月口日後者には正平十五年三月と彫記せり。(詳細日野郡野史卷十)印賀村のは古城跡らしく、米澤村のは古寺境外らしき證據あり。船上義舉に對する我郡の嚮背とこの正朔とを對比して、當時に於ける大勢を察すべし。(傳説口碑部參照)

一、黒坂村聖神社古棟札に北朝の正朔(延文五年)を記せるものあり。元弘に於ける日野義行の義舉前記正平塔と對照して、亦當時に於ける形勢の尋常ならざりしを察するに足らんか。

一、當時に於ける本郡内戸口の状況を見るに足るべき材料殆どなきが中に唯一の史料として本郡口部の中心なる江尾村佐川村戸口調書現存す。(租税部参照)これによりて現今七十戸の同部落が應仁の比僅に二十一戸なりしことを知ることを得ると同時に略本郡内の大勢を推すを得るは幸なりといふべし。(政治經濟部参照)

一、本郡内神社の棟札も多くは戦國時代に屬するもの多く、たま／＼南北朝時代のものあり。又寺院も多是慶長前後に發達せるものにして(寺院總説)以て本郡發達の大勢を窺ふべき也(神社寺院部参照)

一、郡内舊家名家に傳はれる家譜、藏品又は古文書中確實なりとおもはるゝものによるも、多くは室町幕府より戦國時代にわたれるもの多く、中にも毛利尼子に關するもの最多し。(舊家名家系圖美術部参照)

一、山上内藤氏系圖に主殿介朝俊、明應五年尼子經久、龜井能登守秀綱の命により、伯州に移り神職となり、その弟左馬介朝行は永正八年舟岡山合戦高名、その弟下野守隆世は長州勝山城主、弘治元年自殺、その弟左衛門隆春は大内義隆諱となり、その弟三左衛門隆季は信長公に従ひ天正二年遠州高天神城合戦刻武勇を顯し、下野守隆世の子四郎左衛門隆義は天正三年長篠合戦之刻軍功を顯し、隆義の弟藤助宗義は信長公四老の内諸所軍功ありし由、記せり。考證不及ものあれども諸家系譜等の記載と綜合して以て當時當地方が中國の戦雲と密接なる關係を有したるを窺ふに足らんか。

一、陰陽に介在せる本郡に於ける戦國時代は陰徳太平記の物語るが如く尼子を中心とせる戦争所々におこる。これ本郡文化輸入の捷路なりしが如し。(政治經濟史傳部城砦要害部傳説口碑部神社部舊家部等参照)

一、本郡内社寺の多くは此頃より盛大となりたるものらしく、山上の矢原神社、大宮の樂々福神社棟札中、尤古きには、尼子經久龜井秀綱の名あり。何れも永正年間のものに屬す。本郡の巨剎多里常福寺の如き天正中の建立に係り、其他多く文明以降徳川時代創建のもの多し。

一、黒坂不動嶽合戦と江美(今の江尾)城の合戦は當時の大局に比較的大なる影響ありしものにして、鎌倉山戦争傳説及自照寺小早川隆景傳説等と照合して本郡が尼子毛利衝突の渦中にありしを窺ふべし。

一、多里村龜尾城跡の古瓦尤も珍とすべし(城砦要害部参照)

萬代の龜尾の山の古瓦

うてば矢叫の響もそする

茶 村

要するに近古に入りては、朝政衰へ政治地方に及ばず。本郡の如き、僻地は殊に放任の状態にありしもの、如く、偶々流人の謫所となり。或は權力争奪の渦中に入りて、四分五裂、多くは群小武士の割據に委したるものらしく、現に城寨要害の郡中に普く、而も構造の大なるもの殆んどあることなく、中國の大勢なる影響を及したる尼子毛利の間に介在して反服常なき有様なりしが如し。従て文化の見べきもの少なりしに似たり。然れども如上の刺撃は本郡の發達史上不知不識の間に甚大なる影響



を興へたることは疑ふべくもなく、この比よりして、或は居残りしもの、或は敗殘せる武士等の民間に介在歸農せるものも多かりしが如く、遂に近世に入りて、文化稍見るべきものあるに至りたる基礎を作りたるなり。

## 二、尼子毛利二氏の折衝

建武中興の制壞れて、世は室町將軍家の勢力圏内に屬する國々多く、我が伯耆因幡の如きも足利尊氏の重臣山名時氏守護として來り治するに至る。

時氏の諸子、山陰各地に分封し、伯耆は長子師義倉吉城に治し、八子氏重因幡に鎮す、後師義の子氏之松崎城に在りき。永享七年山名持豊但馬因幡伯耆三州の守護となり、七世の孫澄之の威令行はれず、大永四年五月尼子經久の爲に略せらる。

尼子氏は佐々木高綱より出づといふ、六世の孫鹽谷高貞讒を以て死す。遺孤あり、某尼に養はれ尼子氏を稱すといふ。經久の祖父持久父清定出雲の守護となり富田城に居る。(一説尼子莊に居り尼子を氏とすと)

大永四年五月經久伯耆を略し吉田光倫を尾高城に。その弟吉田左京亮を八橋城に、尼子國久を羽衣石城に、同誠久を泊・川口城に配置す。天文九年經久の嫡孫晴久兵を伯耆に募り、吉田兄弟を伯耆に留め、國久以下を率ひ大舉安藝に入り毛利元就を吉田城に圍む。大永の敗將山名氏豊南條宗勝小鴨貞幸但馬の山名祐豊因幡の山名豊次等布勢城に會し、晴久南征の虛に乗せんとす。

吉田兄弟急を國久に告ぐ。國久歸り吉田と會し、橋津川を隔てて大に戰ひて利あり。國久將に因幡に

入らむとする時飛報あり、大内幸隆元就を援けて來ると、是に於て國久、光倫を留めて、安藝へ進むこの軍晴久歿す。

永祿六年晴久の子義久、元就の長圍に逢ひ、富田城下に降る。永祿十二年尼子の遺臣山中幸盛。尼子勝久を奉し尼子家再興の軍を起したるも遂に勝たず。

羽衣石城主南條氏尼子經久に敗られ、城地を掠奪せられたりしが、尼子氏の亡ぶや毛利氏の勢を得て宗勝の子元續再び此の地を復す。

天正七年尾高城主、杉原盛重、南條元續と善からず、吉川元春、盛重と共に羽衣石城を攻めてこれを陥れ、元續因幡に去る。元續羽柴秀吉の援兵を得て城地を恢復せしかば、吉川元春憤激して、之を攻め、元續利あらずして退く、時に天正八年八月なり。

天正九年、秀吉軍を進めて、鳥取城を陥落す、時に吉川元春馬山城に在り、秀吉之と相持すること三日、秀吉風雪を慮りて播磨に歸る。

戦後、龜井茲矩鳥取城に鎮し、後鹿野城に居り、子孫石見國津和野城に轉封す。

當時兵馬倥傯、千軍萬馬の往來甚しく、我郡も亦馬蹄の蹂躪する所となり、城壘堡寨の遺跡少からず。殊に黒坂不動嶽、江尾江美城の如きは、尼子毛利兩軍の戦跡にして、陰徳太平記之を詳記したれば、其の全文を擧げて参考に資せん。

伯耆國日野之不動カ嵩夜討事 (陰徳太平記)

翌レバ永祿七年三月上旬。三村修理ノ亮家親。香川左衛門ノ尉光景。伯耆國へ越ケル間南條。山田。小森行松等相從テ所々ヲ打廻

リ。燒働キシテ北國ノ饑<sup>アケ</sup>リノ道ヲ斷ナドシクケレバ。尼子方ノ城トモ皆落去テ。今ハ出雲境ニ五六箇所許ゾ堪ケル。此由ヲ聞テ尼子義久。如何ニモシテ。三村。香川ヲ討バヤト議セラレケル所ニ。福山肥後守ト云者。本ハ吉田筑後守ガ郎等也シガ。筑後守播磨ノ刀田<sup>トダ</sup>ノ太子堂合戦ノ時討レテ後ハ。晴久ヨリ所領ヲ賜テ居ケリ。福山。義久ヘ訴ヘテ曰。家親ハ吉田左京ノ亮ヲ討テ候ヘバ。私ノ主ノ敵ニテ候。軍兵五百人被ニ相副<sup>アヒ</sup>候ヘカシ。日野ヘ立越。彼處ニ四郎大夫トテ親シク申合スル者ノ候門渠ヲ以テ一揆等ヲ語ヒ集ヌ。三村。香川ガ障ヘ一夜討仕テ討取レ申候。義久是ヲ聞給尤神妙ノ志也ト大ニ感ジテ。倉澤十郎兵衛。石邊四郎五郎。鷹巢三郎兵衛。山路太郎兵衛。遠石五八ナド云者ヲ先トシテ。足輕五百人被附タリ。福山急ギ伯州日野ノ在處ヘ打越一揆原ヲ語ラヒ催シケルニ。皆尼舊好ヲ思ケレバ。一味同心シテ。軍ノ評定ナドシケルニ。不動之嶽ノ麓ノ麓ナル如來堂ニ。香川左衛門 尉光景ガ陣ヲ取テ居候彼所ハ構ヘモ淺間ニシテ。勢モ又算候間。夜討ヲカケンニ立所ニ可<sup>ニ</sup>討<sup>レ</sup>取ト。四郎大夫等申ケルニ由テ。福山此儀ニ同ジ。一揆原ヲ先ニ立。夜討ニ馴タル兵五百餘騎ヲ勝ツテ。今夜々討セント更行空ヲ侍屋タル。香川光景是トハ不知。比ハ水無月七日ノ事ナレバ晝ノ程ハ土サヘ裂。金モ流ル。許ニ照日ノ影限ナク。肉山ヲ蒸カト疑ハレ。南州藤畧モカクコソ堪ガタキニ。暮テモ猶畧サ消ヤラズ。蚊遣燒烟ウルサク。流テ傾ク僧房ニ風絶テ。最々堪ベクモアラテバ。光景。入江與三兵衛利勝ヲ伴ヒ。郎等ノ香川石見守景勝ヲ召連。本堂ノ椽ノ亭ナル板敷ニ伏リテ。時節ヲ轉變。世間ノ盛衰ナド語り寐ナカク空詠メシテ。天河只在南樓外<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>借<sup>ニ</sup>人間一<sup>ノ</sup>滴涼<sup>ト</sup>云詩ヲ嘯キ。下<sup>レ</sup>覺眞眠ケル所ニ。光景此程。日野ノ庄屋ノ女ヲ妾トシテ召仕シニ。障ル事有テ親ノ許ニ在ケルガ。子ノ刻許ニ來テ。光景ガ足ヲ捕テシタ、カニ引。香川驚キナガラカバト起。誰ナルラント見ル所ニ。在シ女也。コハ如何ニト、ヘバ。彼女息モ不<sup>レ</sup>繼敢<sup>ニ</sup>ツフ如何ニ聞給ヘ。富田ヨリ福山殿昨夜忍テ常所ヘ打越給香等ガ親兄弟共ト密カニ呼カレ候ヲ。不<sup>レ</sup>審<sup>ク</sup>思ヒ立聞シテ候ヘバ。今夜御身ヲ夜討ニセントノ評定シテ。唯今福山殿路次ニ置レタル兵共四五人喚越。常所ノ者共ヲ案内トシテ打立レ候ゾヤ。白<sup>アカラサマ</sup>地ナル御情故ニ彼祭中息ガ女ノ。夫ニ背キシ孝心ニハ引カヘテ。市乾鹿文媛ノ父ノ弦斷シ不義ノ迹トヤ等シカラン事ヲモ忘レ。親ノ隱謀ヲモ告知セ申候事ヲ。女ノ身程無<sup>レ</sup>棄者ハ候ハジ。合戦御勝利候共。吾今告知申ツル志ニ對シ。父ヤ兄弟助ケサセ給ヘ。ハヤ敵ノ近付候ハンニ。御物具召シ候ヘト云ヲ聞テ各心得タリト立騰ル。サレバ同類相求ル習ツテ光景ガ妾ナレバ。此女イトカヒ<sup>シク</sup>腹巻取テ著セ籠手サ、セ。枕上ナル十文字ノ鎗取テ與ヘナトスル所ニ。ハヤ門外ニ當テ七、八百人が聲シテ時ヲ咄トゾ揚ニ

ルケ。香川十文字提ケ。廣椽ニ跳リ出レバ。郎等石見守弓取テ押張。手矢取添ヘテ續キタリ。入江ハ胸丸計取テ肩ニ掛。上帶ノ長刀持テ庭上ニ走り出タリ。寄手聲々ニ呼ハリケルハ。富田ヨリ福山肥後守馳向ヨリ。香川。三村ニ力ヲ合セ。松山ニ於テ吉田左京ノ亮ヲ討タリシ其冤ヲ可<sup>レ</sup>報也。連モ遁スマジキニ。蓬キ働キセンヨリ。潔ク自害セヨト罵テ。枝折戸ノ外ニ支ヘタリ。入江イラツテ技折戸ヲ切テ落シタレバ。敵得タリヤト。一度ニ咄ト亂入所ヲ。石見守ノ矢ニ二人射伏タリ。光景眞先ニ進タル敵五人突伏タレバ入江モ續ク兵二三人雜伏タリケル故。敵堂中ニ多勢在トヤ思ケン。此勢ヒニ僻易シテ。一度ニ颯ト引ケレバ。二陣入代テ切テ入ケルヲ。香川入江等此彼所ニ開キ合セ。相詞ヲシルベニ。手ニ任セテ突伏難倒シ。身勞レバ木隱レニ立忍テ息ヲ繼。馳翔廻リ。半時許ノ戦ニ、庭中ニ血ヲ洩リ。人塗ヲ築テ篋々タリ。寄手アマリニ強ク被<sup>ニ</sup>切立<sup>ニ</sup>テ。終ニ前後一ツニ成テ。門外ヘ崩レ出ルヲ。香川。入江三人ノ者共。大音揚テ。一人モ漏スマジキゾ東ノ寺ニ在。江戸。猿渡。松原。芥川ノ者共ハ。敵ノ後ヲ遮レ。西ノ坊ニ宿シタル。三宅細野原。宗像。沖。財間。塚脇等ハ横合ニカ、レト。味方多ク近邊ニ陣取タル様ニ。口任セテ喚キケレバ。敵誠ニ只今後ヲ討ル、ト心得。吾先ニト逃ケル間。香川モ入江モ引敵ト一ツニ成テ打紛レ。押合劔合大門ノ外ヘ遁レ出ケルヲ。敵ハ少モ不<sup>レ</sup>知ケリ。福山是ヲ見テ。コハ口惜次第哉。堂中ニ敵多ク共。二十、三十ニハヨモ過シ。借使樊噲ガ勇ヲナストテモ。是程ノ小勢ニ被<sup>ニ</sup>突立<sup>ニ</sup>一事ヤアル。押返シ攻入ヤト不知シテ眞先ニ進ミケル間。又取テ返シ切入ケレ共防ク敵一人モ無クケリ。堂ノ中ヘゾ引籠リタルラント廣椽迄飛上リケレ共。流石唐戸ノ内ヘハ入事ヲ不<sup>レ</sup>得而々立并テ伺リケルハ。蓬モ引籠ル物哉。幾程延スベキ命ゾ。出合テ切死セヨヤト再三呼ハリタレ共。内ニハ人聲モセザリケレバ。福山早攻入テ搜セト云ケル間。亂入テ見ケルニ。内ニハ敵ハ一人モ無リクリ。福山如何ニ敵ハト、ヘバ。内ヨリ日野ノ一揆ノ中ニ相見賢徳ト云者カラノト笑テ。香川ハ隱形ノ法ヲ得タルニヤ。何處ニ在共見エ候ハズ。唯木尊ノ不動明王利劍ヲ提テ御座ス。是コレ能敵ニ候ヘ。御首給ハリテンヤト云ヲ咄ト笑ヒタリケレバ。福山大ニ腹ヲ立。何ノ今ノ戯レゾヤ。思敵ヲ打漏ス事皆臆シタル故也。其古入道打伏セヨトゾ怒リケル。此時光景ガ力者三人主ニ押隔ラレセン方ナクテ。天井ヘ上リ隠レ居ケルガ。事ノ様ヲ委シク見居テ。後ニカクトゾ語りケル。三村家親ハ麓ニ當テ閨ノ聲ノ聞エツルハ。イカ様ニモ香川夜討ニコソ討レツラメ。此十餘年ハサシモ親シク云昵ミツル心友ヲ。無<sup>レ</sup>益敵ニ討セツル事ノ。口惜シサヨト。涙ヲ流ケル所ニ。門ヲ荒ラカニ扣ク音セリ監門誰可ト咎メケレバ。香川ト答フ。家親是ヲ聞テ。敵若方便テヤ云ラン。吾出テ聞ントテ。鎗提ケ走り出

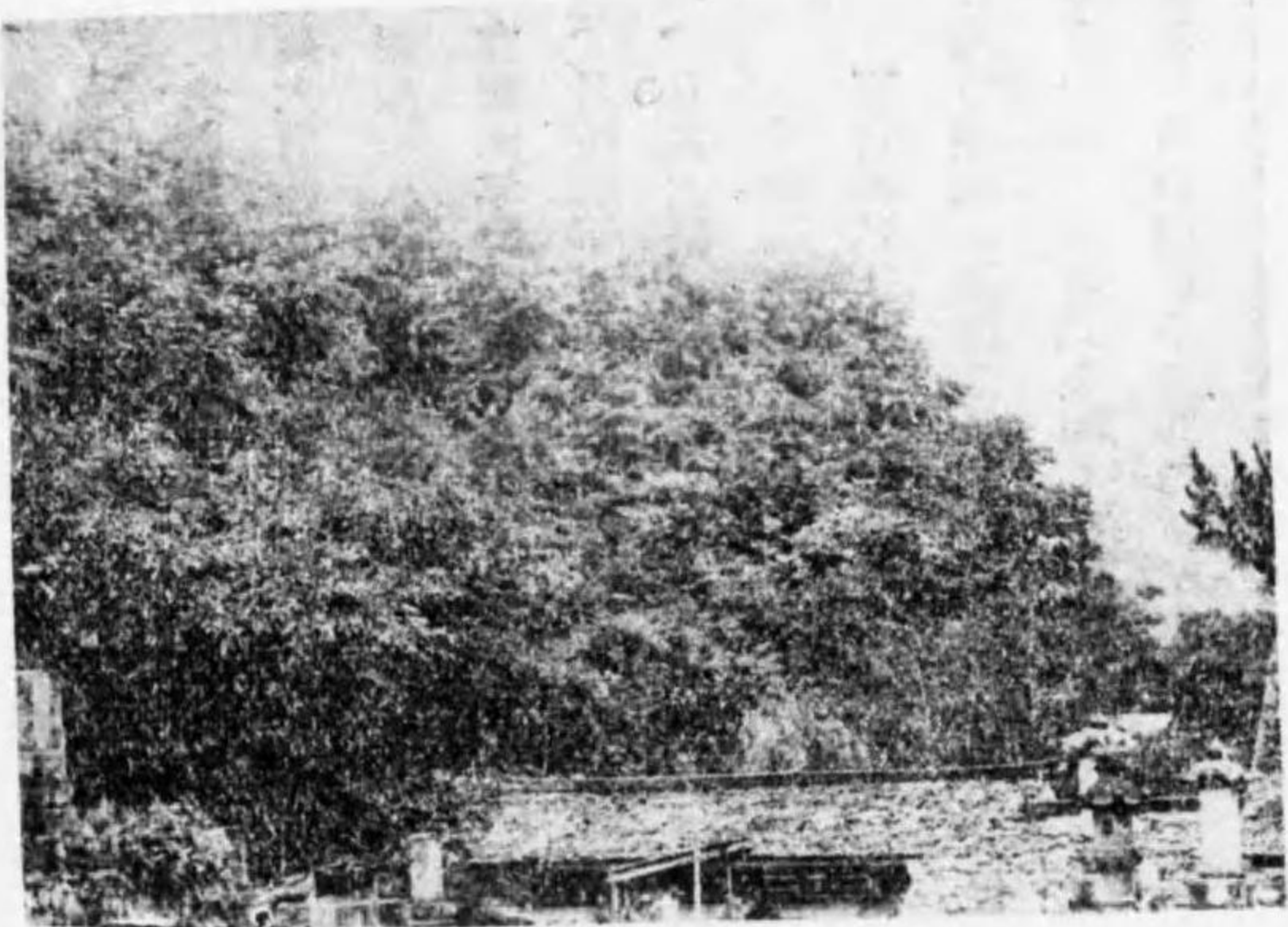
テキケバ。紛ル所ナク香川入江等也ケレバ。家親死タル者ノ再蘇シタル如ニ悦テ。手ニ手ヲ取テ内ニ入。扱先刻如來堂ニ當リ時ノ聲ノ聞エツル故。無ニ心許ト思物見ヲ遺シテ候シカ共暗夜ナレバ不二分明ト云ツル間。一定討レ給ツルトコソ思シニ。如何シテ遁レ出給ツルヤト尋ケレバ。光景云々ノ由語ケリ。家親聞テ扱モ勇智無雙ノ働キ哉ト大ニ感シ。吾腰ニ刺タリケル法光ノ脇刺ヲ是ハ悦ノ符也トテ。光景ニゾ與ヘケル。扱明レバ八日三村家親。イデサラバ人ニ膽ヲ潰サセツル福山退治シ。并ニ一揆原薙捨ニトテ。一手ハ香川左衛門ノ尉光景。入江與三兵衛利勝。元春ヨリ被ニ差添タル境備後守經俊已下三百五十騎。一手ハ家親一千餘騎。不動ガ嶽ヲ下リテ。日野ノ在所ヘ左右ヨリ押寄セントス。福山肥後守手勢五百騎ニ一揆原相添テ。七八百許ニテ打出ケルヲ見テ。家親鐵砲雨落ト打懸ルト齊シク。間ヲ作テ切テカ、ル。是ヲ見テ香川。入江。境等横合ニ蒐ラント進ケル間。一揆原不レ堪逃去ケレバ。福山モ無レ力引退ヲ。追蒐四五十人打取ケリテ。所々ニ隠レ居タル一揆原共搜シ出シテ。悉ノ頭ヲ刻ケル間。從ニ是シテ伯州ノ一揆等靜マリニケリ。其後家親ハ不動之嵩ヨリ同國。法性寺ノ城ヘゾ移リケル。

伯州江美之城没落之事 (陰徳太平記)

伯耆國江美ノ城主、蜂塚右衛門尉ハ、先年尼子ヲ背イテ、毛利家ノ命令ヲ請ケタリシガ、本庄父子被レ誅ツルヨリ、又志ヲ反ヘシテ、本ノ尼子ノ幕下ト成リヌ、如斯テ富田城中、勢ヒ衰ヘテ頼ムカヒ無ク成リケレバ、蜂塚ガ一族共今ハ早ヤ尼子ノ爲ニ義ヲ建テタリトモ、行末ニ於テ其益無カルヘシ、只再ヒ毛利家降參ノ縁ヲ求メラレ候ヘト、諫言ヲ納レタリケリ、サレ共蜂塚ハ、吾累年ノ好ミヲ忘レ、毛利家ニ腰ヲ折リツルサヘ思ヘバ志士義人ノ耻ツル所ナルニ、サラバ其マ、ニテ有ルモ不レ果、亦本ノ尼子ニ歸服セシ事、是又千悔萬悔也、然ルニ今尼子ノ滅亡可レ在<sup>テウキニ</sup>。遁ト見テ、復タ、弱キヲ捨テ強キニ附カン事、人間ノ色身ヲ受ケタル者ハ不レ成所ニシテ禽獸夷狄ノ心トヤ云フヘキ、カ、ル時節ニ至リテ、貞節ヲ守リ、討死シドラソコソセメテ舊惡ヲ少シハ蓋フ便トモナルベキ、吾レ義心爰ニ極マレリ、命惜シク妻子モ不便ニ思ハンズル者共ハ、悉ク毛利家ニ降り候ヘ、士ハ渡リ物也、何ゾ恨ミトモ思フベキ、吾ハ一人タリト雖、當城ヲ枕トシテ善道ノ死ヲ守ルベキナリト云ケレバ、家ノ子郎等共、皆此儀ニ心服シ、一向ニ討死ト思ヒ切ツテ居タリケル、去程ニ蜂塚尼子ノ舊盟ヲ不レ變、兎角戦死セント議定シテ在ル由聞エケル間吉川元春ヨリ杉原播磨守盛重ニ、彼ノ城攻メ落スベキ由下知セラレ、爲ニ檢使一今田上野介、二宮木工介、森脇市郎右衛門、山縣四郎右衛門等ヲ差添フレニケリ、各永祿八年八

月朔日、雲州三保ノ關ヨリ舟ニ取り乘リ押シ渡ラントシケル時節俄ニ猛風吹キ來リ迅雨盆ヲ傾ケテ降り出テ、怒潮海岸ヲ穿テ、雲霧山ヲ掩フテ暗ク、舟已ニ覆ラントシケル故、不及レ力漕ギ戻シ、福良、戸之井ニ四日滯留シテ、打損セラレシ舟ドモ修補シテ、同五日又押渡リケリ、其夜半、山縣四郎右衛門屋敷四郎兵衛等ヲ相伴ヒ、蜂塚ガ館ヘ押寄せ放火シタリケルニ、敵ハ皆館ヲ明捨テ城中ニ籠リ居ケル故、可レ防者一人モ無カリケリ、翌朝寄手三千餘騎城ノ左右ノ山頂ニ攀テ躋リ、鐵砲ヲ揃エ散々ニ打蒐ケル間、雜兵 堪ヘ兼テ城外ヘ颯ト崩レ出デケルヲ、追ヒ詰メ一人モ不レ殘打取リケレバ、蜂塚ハ連モ叶ハジトヤ思ヒケン、腹撞キ切ツテ失セニケリ、杉原、今田、二ノ宮等ハ、數百人ガ首ヲ捕リテ、氣色バフテ歸リケル所ニ元春、各江美ノ城攻メ取ル事ハ、粉骨ノ忠也ト雖大風暴雨ニ舟共無理ニ出シ、多クノ兵共ヲ失ハントセシ事甚ダ奇怪ノ曲事也ト以テ外ニ忿リ給ヒ、今田、二ノ宮、森脇、山縣等四五十日ガ程ハ出仕ヲ止メラレケル。

因本郡内杉原盛重に關する事蹟少からず。生山徳雲寺に木主あり。丸山小谷家の祖先玄蕃永祿中毛利氏に屬し、戦功あり。盛重より賞賜されたる鎗穂を藏せる旨島根縣諸材料に見ゆ。伯耆誌に石見村宗金の條戰場山は盛重の陣する所なりとせり。



江美城跡

三、龜井氏の銀山採掘

戰國時代に於ける經濟政策上、屢々群雄によりてこころみられる採鑛冶金の一として慶長年間、因州

鹿野城主龜井氏(因伯紀要)が本郡石見村大倉山に銀山を開き(前記大宮、樂々福神社及山上矢原神社の棟札に永正年間のものあり。龜井秀綱の名あり、こは鹿野城主にあらで尼子氏家臣なるが如し。これによれば銀山も亦尼子の經營なるやも知りたし記して後の考證をまつ)探鑛冶金頗る盛大を極めたるもの、如し。左に引ける二文書を見よ。

大藏神社々領證文寫

大藏大明神宮山森之竹木一切きり申事かたく相留候殊に銀山用木等少しもきるまじき者也

慶長十八年五月廿七日 關主馬正書判

文政三年社領復興請願書袖控抄

一、日野郡下石見郷六ヶ村大社大藏大明神之儀者往古は日野郡生山之城主關主馬正様格別被遊御信仰候云々  
一、私家之儀は往古は下石見村並生山村銀山村所持仕候其節銀山村與申候者凡千軒計も御座候云々

文政三年辰五月日

石見めぐり抄(銀山の條)

此地方鑛鑛の遺蹟至る所に散在し、維新前迄八町四反の畑にして、後これを田地に開墾せり。その當時の鑛鑛の蹟歴然として存せりといふ。其形式を聞くに粘土を以て造られたりといふ。

同地に山口神社あり其由緒左の如し。(多田家神社明細帳による)。

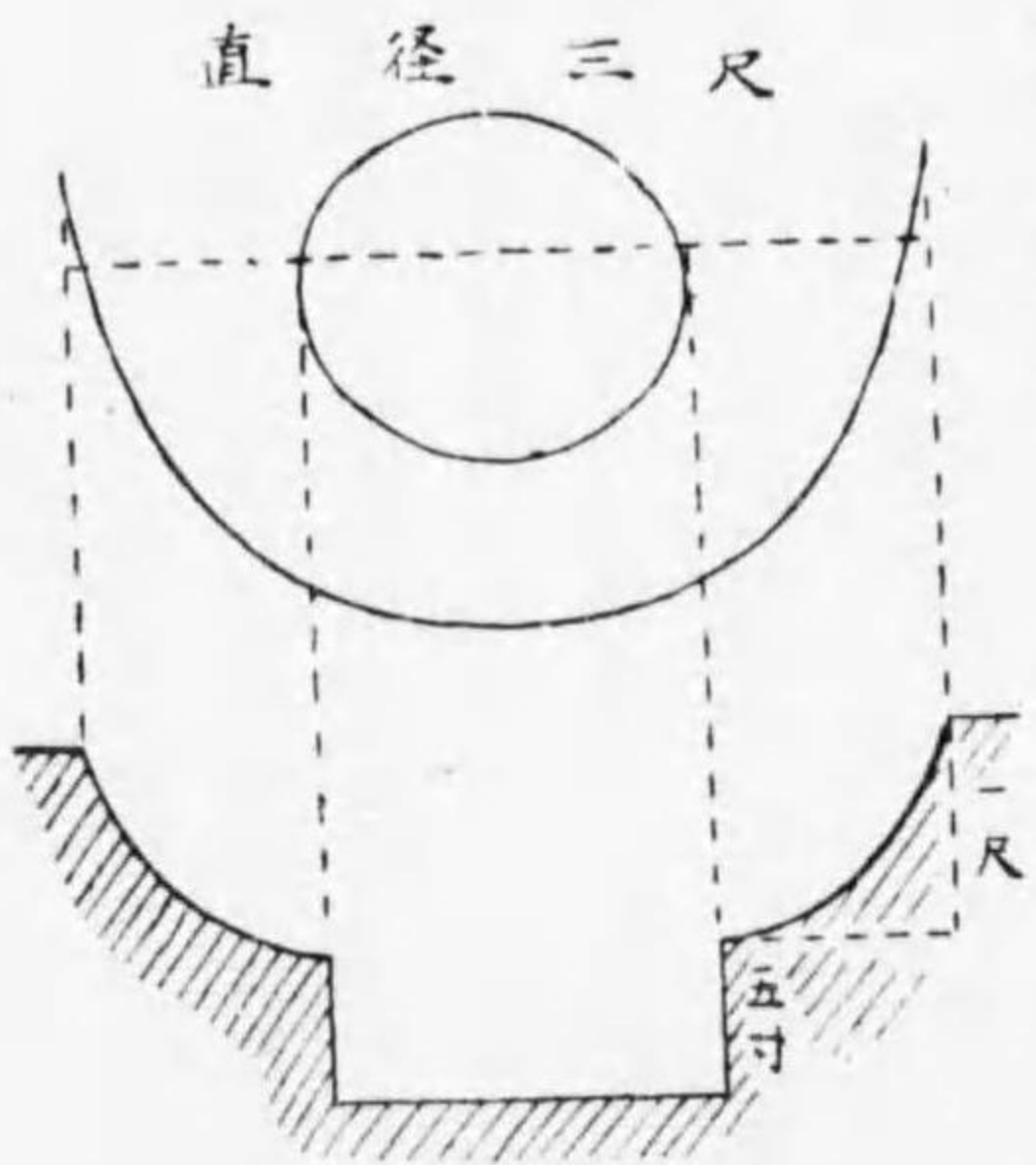
慶長年因中州鹿野城主龜井武藏守殿鑛探業の節勸請依て舊銀山産土神たり(下略)坑口の存するもの左の如し。

中大倉三 宗金一 追立一 銀山一 山根一 中大倉坑口の附近を俗に三十枚といふ。カラミ(鑛滓)堆積せり。三丁枚の謬傳ならんかといふ。銀山、山根には今尙ユリ場の遺蹟あり。其當時千軒ありしと傳ふ。墓地至る所に多々、又町坂といへる坂あり。その繁榮なりしこと想像するに餘りあり。

相 見 市 正  
松 濤 生

日野郡史には六箇所を擧げて、中石見の内字友廣の上み大倉の三十枚に二箇所、字宗金の下も大倉金井谷に二箇所、字是次の下も大倉追立に一箇所、字銀山の下も大倉せばとに一箇所とせり。由來戰國時代には、日本全國に亘りて、金銀の産出最も多く、諸家族は、軍資として、競ひてこれが、採掘に努めたる時代なるを以て龜井氏の銀山採掘の事業は、偶々以て、當時の局面に於ける本郡の位置を語るものにして、或は尼子毛利兩氏の間にも、銀山爭奪の目的を以て、開戦せしに非ずやと推せらるゝ點なきにしもあらず。

熔鑛鑛の圖



石見村銀山坑口

因に大正十四年八月銀山地内に於て、學校

敷地工事中、熔鑛鑛用燒石材を、土中より發見せり

(島根縣誌材料日野郡部山根幸史編)

元弘中名和伯耆守長年ノ領タリ建武以來山名氏六分一公ノ封ニ入ル支族重臣輩諸城ニ在テ代領ス遺蹟各所右在應仁以來天下戰亂才止ム時ナシ大永中尼子經久雲州ニ起リ山名氏ヲ侵シ諸城ヲ蹂躪ス遂ニ尼子氏ノ領スル所トナル地頭ヲ置テ守護セリ天文中度ニ及ヒ毛利氏ト不和起リ毛利氏吉川元春ヲシテ中國ヲ蠶食セシム連年尼子氏ト兵結ンデ解ケズ郡内各地戰爭ノ遺蹟ヲ存セリ攻城戰數フ可カラズ永祿元年尼子氏終ニ亡ビ毛利氏ノ管轄ニ屬ス古屯長門守吉種久米城會見郡ニアリテ代リ領ス天正十年豊臣秀吉中國ヲ徇フ毛利氏ト成ヲ行フニ及ンデ吉川氏ノ領地トナル本國ヲ二分シ西三郡(日野會見汗入)吉川氏東三郡(八橋慶長四年吉川廣家西軍ニ與ス南モ西軍事平テ徳川氏其封地ヲ削弱シ此地ヲ沒收シ同五年中村伯耆守忠一ヲ本國ニ封ズ久米城ニ居テ管領ス同十四年忠一卒ス嗣ナリ國除ル古田氏一柳氏在番タリ同十五年本國ヲ三分シ加藤、關、市橋三候ヲシテ各其一ヲ有タシム關長門守一政鏡山黒坂ニ在城シテ茲ニ領主タリ(後略)

四、重要文書

本期に於ける重要史料として左の文書を採録して真相を明かにすることゝせり。

下榎村 長谷部家々譜

我伯耆國の生みたる唯一の國學者門脇重綾大人の考證せられたる作品なるを以て特に全文を掲ぐるごとゝせり。かの名和氏記事と共に史家必讀之書也

門脇重綾編修(元治元年)

長谷部氏家譜(伯耆國日野郡)

長谷部氏 左兵衛尉長谷部信連の裔なり信連の父を右馬允爲連といふ長谷部氏は姓氏錄に據るに神饒速日命十一世ノ孫千速見命の後より爲連迄の世數事蹟等總て詳ならず(東鑑に爲連を長馬新太といへるも長谷部右馬允の略稱なり信連を長兵衛尉と云ふに同じ然るに當家系圖に三浦兵太夫爲通を始祖として其の玄孫大助義明の五男義季信連と更め長谷部と號すといへるを今三浦系圖諸本に

考ふるに大助義明の五男五郎義季何れとも是は長井一流の祖なり此の義季の弟佐原十郎義連の七郎政連の二男に二郎信連あり東鑑に據るに寛元五年六月佐原の一族若狹前司泰村と共に北條氏の爲に亡ぼされ二郎信連も此時討死すと見たり。

斯れば長谷部氏三浦氏にはさらに新縁無きを適々信連の同名あるを以て後世これを混じて如是牽強附會せるものなり故に今系圖中この一條を取らず長谷部と云へる地は和名抄に參河國碧海郡谷部、上總國長柄郡谷部波世などあり伯耆民談記に信連を尾強人と云へり若し實ならば參河の谷部に由縁あるに似たり)

信連治承中高倉宮以仁に候す源三位賴政宮を勸めて大事を擧げ一敗地に塗るゝに暨んで信連終に討手の爲に虜となり本郡命持村に配せらる(信連の事源平盛衰記に委しければ爰に贅せず)時に治承四年九月なり信連の長子太郎實信(母は日吉山王の神主雅樂字稱名か女と系圖に記し盛衰記にも信連本妻は日吉の神子なりと見ゆ)郎黨矢田貝加茂岡田等と共に父を逐ふて金持村に來る信連金持村に居ること三年にして根雨村延曆寺を建つ壽永中金持を轉じて下榎村に移る郎黨安井津知田渡里松原相藤小河内志津野等また逐ふて爰に來り住す(安井渡里)松原、小河内等の地名今尙本郡に存す)文治二年四月鎌倉右幕下頼朝卿信連の舊功を録して安藝國檢非違使に補し所領能登國珠洲郡大屋庄を賜ふ(大屋庄或は鈴庄ともいへり)信連金持及び下榎に居ること前後七年にして尙國を去り任處安藝に轉じてまた鎌倉に至り(家譜に信連元暦元年梶原景時を頼みて鎌倉に參すといへるは違へり今東鑑によりて是を訂す但し信連景時に所縁ありて吹擧の沙汰ありしことは知るへからずまた伯耆民談記同民談記に信連建久二年鎌倉に赴くといへるは彼安藝國を去りし年にや)後建保六年十月廿六日食邑大屋ノ庄河原田に終る(民談記民談記の二書に信連下榎村に終り長樂寺に葬るといへるは妄談なり)子孫今加賀の老臣長氏はなり(初め信連鎌倉に召されし時さる武勇の胤を繼がしめんが爲に由利小藤が後室をして是に醜せしめられしといへり東鑑文曆二年六月の條に初めて長掃部左衛門尉秀連といへる見たり信連の子なるべし是れ彼の後室の腹の子にて能登の長氏の祖歟又仁治二年二月廿九日條に秋連高田武者所盛員と所得上野國菅野庄内の境諍論の事あり能登の外にこの地にも所領ありしなるべし此外一族の同書に見いたるは長三郎左衛門朝連長四郎左衛門尉長内左衛門尉長右都門尉長兵衛三郎長二郎右衛門尉久連長又太郎左衛門尉等なり。

此中に二郎左衛門尉久連は建長三年謀叛の企ありて誅せらる此後大平記二十五に□□年の末に長左衛門細川陸奥守に隨て河内國藤

井寺に出て楠正行と戦ひ□□年長九郎左衛門高師が手に屬して四條畷に戦ふよし見えたり九郎左衛門上の左衛門と同人歟又貞治六年三月廿九日の條に中殿御會の時長次郎足利義詮に陪せる由見たり其後は花營三代記に應安より應永の季年に至るの間長二郎左衛門長佐渡前司長佐渡守長能登守頼連長修理亮など見ゆ詳書類從に載する永享以來御番帳に長彌三郎長三郎左衛門走衆長下總守又文安年中御番帳に譜衆長二郎左國衆長九郎左衛門尉長孫三郎長四郎二郎などあり又應仁記に二年三月長九郎左衛門尉内藤孫四郎等と共に但馬國朝來郡に亂入し山名方太田垣新兵衛行本山城守等と戦て討死すと見えたり(此時長氏東軍細川方に屬す)又長享元年九月十二日常徳院殿江州御動座着到帳に二番衆長十郎左衛門尉三番衆長能登守同信長二郎左衛門尉など見えたり。

此後天正五年長重連松任彦詔と共に織田氏に應し一向賊を誘ひ穴水城に據りて上杉謙信に從はず九月城破れて重連遂に打死すと外史また荒山合戦記に天正十年六月長九郎左衛門尉信實前田氏に屬して石動山の山徒を討つた末城記に同十二年前田氏佐々成政と合戦のとき能登七尾城に國士長九郎左衛門尉其外名ある侍共都合三千餘騎を入置かる然るに末成の合戦危急に及て其の後卷すべき由利家郷下知せられける時信實衆議をすて一番に馳付け遂に敵の岩荒山城を拔て功を奏す同十三年九月羽柴氏金澤へ着陣せりて信實以下に賞金各五十兩道服一襲を賜ふ當時長子徳丸城に居すと見えたり彼の家の家譜に詳なるべし(今諸書に散見するところを採摭ひて其大概を記す)

太郎實信下榎村に留る後此地に殿島大明神を祀りてこれを産土神とし(按するに父信連安藝國檢非違使に補せられ彼國に在る所縁を以て彼國の一宮を勧請せるなるべし社説に養和元年信連の勸請する所なりといへれど今延暦寺文書に實信の代とするを是とす)また長樂寺を建つ寺に信連の神牌を安す法號樹峯元功大居士とす民談記には長樂院芳樹顯光太居士民談記には樹芳院顯功大居士など見えたり是非考ふべからず此等も右等の書に養和中信連の創する所とすれどもしからず實信の男豊後守實連家號を長と稱す東鑑建長四年三日の條に長雅樂左衛門尉見文應弘長の間長雅樂左衛門政連といへる見えたり是當家の祖にて長雅樂の雅樂は上に見ゆる如く實信の外戚の姓なるが能登の長氏に別たんが爲に是を加へて長の雅樂と稱ね呼べるものなるべし下に記する如く當家後世に至て一旦姓を雅樂と改めたるも此故なり實連の男左衛門尉信豐元弘三年閏二月廿九日名和長年の催促に應じて後醍醐天皇を船上に奉じ隱岐判官清高と討死す信連文治二年當國を去て後元弘三年迄百四十八年の間太郎實信豊後守實連左衛門尉信豐三代

としては世數少きが如し年紀を以て按するに上に記する長ノ雅樂左衛門尉長ノ雅樂左衛門三郎は實信の子又孫などにて豊後守實連は此の二人の子又は兄弟などにやあらん今の系圖後世に記せるものにて誤説あるなり信豐の男石近信成より右衛門尉家連に至つて六代の間事蹟詳ならず太平記に天平十六年長九郎左衛門信綱但馬國にありて阿保肥前守入道信禪と共に山名時氏に應じて攝摩の赤松勢と戦ふよし見えたり但馬は伯耆と間違からざるに因れば是當家の人ならんか康正二年造内裏段井國役引付帳にも三貫文長豆守殿但馬伯耆段錢と見えたり但馬伯耆符合する事かくの如し段錢は當家の采邑段別に懸れる賦錢なり又永享以來御番帳に長伊豆守同四郎次郎二人見えたり伊豆守は上に見ゆると同人にて四郎次郎は系圖に義行の父豊後守信明同人歟斯くて九郎左衛門信綱は何れの系ならん今詳ならずして右の康正永享より前には殿島大明神棟札に應永九年長信清と記せるあり系圖によりて年代を推すに彦四郎信義に當れり信清は後に更めたる名にや右の如く應永に信清康正永享に伊豆守四郎次郎など見えたるを系圖に參考する處父子三代の如し此後また殿島大明神棟札に應仁元年長門守家連と記せるあり是は四郎次郎義行の子にて系圖に右衛門尉と見えたると同人なり家連の男内藏助重信應仁亂に山名教幸守相模に從ひて西軍に屬す重信の男左衛門元秀の時永正五年十一月大内義興左京大夫足利義植を京師に奉じて三好長輝守と戦ひ同八年八月細川政賢右馬等と大に船岡山に戦ふ元秀この役に從ひ功を以て備前國兒嶋庄賜ふ元秀二子あり大内藏左衛門信澄加賀守元信と云ふ延暦寺文書に信澄後に加賀守元信と改むといへるは違へり殿島大明神元龜四年の棟札に長元信と記せり是を信澄とする時は下に見えたる天文弘治の事蹟に合はずかくて元信といへるは今系圖にのせず然れども信澄の下に妾腹不繼家と註せるを以て按ふるに元信は信澄の弟にして嫡腹なりしが嗣子なきに依りて終に系圖に脱せるものならんか但元信の兄信澄より其子信重の間の系天文元龜の古文書に依りて疑はしき由あり下に云ふべし。

天文中毛利元就右馬大内氏と共に尼子晴久修理と安藝備後間に戦ふ信澄此時毛利氏に屬して處々に功あり同廿三年六月朔日元就本國折敷畑に出で陶隆房尾張守入が部將宮川甲斐守と戦ふ信澄即ち元就に從ひ敵東川右近を討捕りて功を奏す弘治元年十月朔日諸晦隆房を殿島に討す時に年三十八信澄二子あり長男孫四郎信重次男宮内少輔吉連信重家を襲けて後式部と號す上に云へるが如く加賀守元信嗣子なきによりて庶兄信澄の子信重其後を襲け吉連は備後に在りて是より別れて二家となれり吉連の男二郎信秀其子甚五太夫實清小早川隆景に從つて高麗に戦死す其弟甚太夫成連家を襲けて又隆景に仕へ隆景の卒後福島正則に仕ふ其の太郎左衛門信

成父と共に福島氏に仕へて安藝廣島にあり元和五年福島氏家絶の後浮浪となりしが子孫今長門藩安藝藩に存すといへり。  
延暦寺文書に重信元季信澄等の事曆を割記す家譜と大同小異なるものなり故に今二書を參取す件の紙尾に天文十六年正月長谷部宮内少輔吉連と記す此書原は吉連の手に出づといへども恐くは後人の加筆なるべし故に往々誤あり天文十六年も天正十六年の誤字なることはさらなり。

信重の子次兵衛信澄家號を雅樂と更む仔細にいへるが如し是より武門を改めて嚴島大明神の社司たり今長谷部氏に傳ふる古文書には天文十六年神主雅樂二郎左衛門元龜四年神主孫四郎と見えたり孫四郎は信清の父信重なり二郎左衛門は詳ならざれども右の趣によれば信清より前既に家號雅樂にて社司たりし趣なれば疑ふらくは信重の先信澄元信等の代より既に別れて社司となり信澄元信の家は後に至る迄橋武門にて有りつるなるべし今黒坂村客大明神天正十二年の棟札に大旦那云々長谷部朝臣長幸信と記せるあり。此人今の系圖に載せず是信澄元信等の嫡家なりしなるべきを其後今詳ならず信清より七代政二郎正信家號を長谷部に復す正信より四代當主讚岐信明に至つて始祖信連より廿四代世數今姑らく系圖による世々下榎村に住す。

長谷部信連 (日野郡野史)

日野村下榎の長樂寺に長谷部公由來略書と題したる書を所藏せり寫して左に掲ぐ書中元信とあるは長谷部家の系譜に照せば信澄の誤りと見ゆ又尼子伊豫守晴久とあるは經久か或は修理太夫晴久か是を疑問とす。

當山開基 醫雲山長樂寺

長谷部信連公由來略書

一當山開基長谷部長兵衛源信連公元高倉宮に勤仕有之處治承四年依進源三位入道賴政御謀叛を漸被爲思立御宮終に江州三井寺へ被爲入御所之御留主者信連守護し給時に討手の兵郎を引請粉骨を盡し戰所痛手を負終に被生捕院に可被誅之處平清盛爲沙汰と伯州日野郡へ被處流罪に金持村に居住すること三秋此内に寶佛峰之麓延曆寺を草創有之後又下榎に移住する事四年此間に鶴の池破伽藍にいませし藥師尊日光月光十二神毘沙門天不動尊を此地を開て建堂舎を佛を移し給ひ寺を號長樂寺而祈願所と成す其後元曆年中に至つて源右兵衛佐賴朝公平氏之一類悉被責亡賴朝頼て日本の被任總追捕使此時に至つて諸國地頭探題守護管領被召置之勅信連豫介へ

被召出則御自筆御下文被下於能登國賜鈴庄之地頭職を是賴朝公兼血信連武勇を感賞有之故也

一疊祖信連十餘代之末葉長大内藏左衛門尉元信備後國甲奴郡加賀守と改干時天文九年之秋藝州吉田城主毛利右馬頭元就公雲州富田之城主尼子伊豫守晴久と依不和及合戰之勅藝備兩國之諸侍大方元就に屬し此時に至つて元信等元就へ屬せしむ同十二年九月朔日周防國大内義隆の家臣陶尾張守隆房之爲に長州深川於大寧寺生害す依之元就爲其吊合戰被揚義兵同二十三年九月十五日藝州於折敷畑隆房合戰す其翌年弘治元年十月晦日之夜於嚴島に終に隆房被討亡其後雲州尼子之一族責隨元就依振武勇從之中國の諸侍依大半廢愈元信永く毛利の旗下に屬して所々の合戰に數度顯武功者也

長谷部宮内少輔

弘治三年乙巳正月 日

吉連 花押

今祖姓加州七手之内長甲斐守末葉也御知行三万三千石と云ふ

舊本頗及大害書寫者也

天保二辛卯年

五、城砦要害の趾 (日野郡野史)

郡内諸村に城砦要害の趾あり是の創起は古來種々様々あるべしと雖も概ね太古未開の時代酋長割據のため築構したるもの多くして中には神籠石、磐境、神奈備、靈時に類するものあるべし其の後戰亂の世に至り城砦に據り血戰し或は居城して近郷の地を領有せしものあり然れども前述の如く太古以來の遺跡にして傳記詳ならざるもの多し左に概略を記し他日搜索の資に供す。編者曰、此等の内「形なるものには上代の高城もあらん。土器、玉等出土せる村尾要害の如き。

久古の御牧城 字里坊屋敷に在り北に面する小岳にして頂上四百坪ばかり善福寺に並び道路を界す大  
家馬頭の居城なりしと云ひ傳ふ。

清原の高平城 字高平にあり高平山のうねに在り別所小三郎の居城なりし由云ひ傳ふるも氏は天正六年三月播州三木城に據り毛利氏に附く八年正月羽柴秀吉の爲め亡ぶ當所の如き小城に居りしや否や眞野の眞野邸 字土居屋敷に在り南南は石垣西北は堀古代土居築造の居敷なるべし眞野兵部居住以來代々眞野家在任の邸なり

岩立の荒堀城 字荒堀に在り小孤山にして頂上五六百坪の平地今は畑となれり南向きにて西の方は山林の險峻地なり

谷川の下も要害 字要害に在り西に面する山麓の高地なり上の平地二百四十坪計り南面に堀切りあり北は深谷なり

谷川の矢倉要害字天皇要害に在り西に面する山麓の高地なり上の平地千五百坪餘南西北の三方に堀切存せり

大倉の樅うね城 字もみうねに在り大倉和泉守の居城後に天文年中香川左衛門尉光景此處に構へられし由要所に堀切あり

宮原の城床 字城床に在り西に面する山麓の地なり  
御机の城山 字城山に在り西に面する高山にして頂上廣く南北西は至つて險峻の地なり平將門の屬之に據れりと云ひ傳ふ(編者同古兜の出現せることありと)。

下蚊屋の砦 通稱物見の平る下蚊屋村の向西の方山上長四十間幅拾間餘りの平地あり傍に堀切殘存す助澤の龍王陣 字龍王に在り西に面する山の麓にて今は耕地となれり北の方御机の城山を遠望せらる

彼の城を攻むと陣を構へし所なりと云へり

宮市の地大名城 字いげ谷に在り北を大手とし前に堀あり東西は深谷にして險阻也近地に地大名と云ふ所あり

宮市の學塔城 字學塔に在り北に面する山にして城跡北の山中なり

俣野の土居城 尾上原字土居に在り北に面する高所其平地凡そ五六百坪にして今は畑と成れり要所に堀切り殘存す山名師義の嫡子讚岐守義幸父の跡をつぎ倉吉にありしが病身にて國勢を弟播磨の守満幸に譲り日野に熱居云々民談記(註伯耆民談記)に在り此所なるべし氏幸も兄と同じく此地に在りしならむ

俣野の城山 池の内字城山に在り高所に三百坪計りの平地ありこれなり

武庫の城の段 字城の段に在り山の麓にて今は畑と原野なり三村大助の居城ありし由

下安井の大城 字城の内に在り山麓にして要害の地なり

久連の美女石城 字美め石に在り東に面し山麓前は日野川なり天正の初年頃天笠四郎三郎元氏の居城ありし由

江尾の江美城 字城の上に在り西に面し高岳なり天文五年蜂塚右衛門尉藤井藏人居城此の落城は陰徳太平記日本外史に詳なり(前に詳述せり)

佐川の龜山城 字上屋敷に在り天文の頃馬田源兵衛同四郎五郎居城なりし由云ひ傳ふ

三部の野上城 字古城山に在り東に面する一孤山なり野上安左衛門高續居城ありし由

福島の福島城 字古城山に在り外構城と相對す



福吉の外構城 字城山に在り南に面する一孤山にして頂上に石垣石礎残存し第二段に深き井戸あり  
進祐定居城の由云ひ傳ふ

福岡の上代城 字城の越に在り東に面する嶺山北南は深谷にして鎌倉山城の東部の堅めなりし由  
畑池の池田城 字城山に在り

東に面する嶺山前は耕地北南は深谷なり宋間氏の居城の由云ひ傳ふ

二部の古寺生松城 字古寺生松城に在り西に面する地左衛門實基の居城のありし由

二部の二部城 字古城山に在り西に面する一孤山なり足羽將監重成の居城の跡なり

貝原の上代原城 字代か原に在り西に面する山麓の高原地なり

根雨の要害 字要害に在り

西に面する山嶺なり馬田次郎兵衛の居城ありし由

高尾の倉谷城 倉谷の存城山に在り

東方に面する山嶺にして前は川を構へ後には堀切りを爲したる跡あり

金持の要害 通稱小要害に在り

北方に飛び出でたる孤山なり前は川を構へ後には堀切を爲せり下段六拾坪頂上百坪計りの平地あり

金持の大要害 字麻刈山の内小字榎が嶽(註此地に長谷部信連謫居したれば此の大小要害は關係深き

ものあらむ)

南方へ突出でたる高山なり前は道路西方は深谷なり山腹に長さ三十間計りの堀切り残存せり

濁谷の濁谷城山 字城山に在り

西方に面し飛出でたる孤山にして前は深谷なり山腹に堀切りと石垣少々残存せり頂上に百五十坪計

りの平地あり小松内膳の居城ありし由

奥別所の堀城 字堀に在り

北に面する山麓に堀をなす

本城の城か平城 字城か平に在り

險阻にして要害の地なり

舟場の鶺鴒城跡 字鶺鴒城主に在り

西に面し南と大手は險山なり山上に千五百坪計りの平

地あり今は畑となれり

津地の津地城 字上の谷の山麓に在り

西に面し山麓の曾禰にして堀切等残存せり

下黒坂の根妻城 字根妻城山に在り北面は險山東は日野

川を構へ要害の地なり(編者曰大正十年鐵道工事中山

麓根妻墜道東口に地下三尺より釉薬を施せる菊花(十六片)紋章入原始的疎製陶器の皿十枚を發掘し

其一枚は黒坂小學校に保存す城塞と關係ありや否や疑問なり)

下黒坂の八代峯城 字要害山に在り山の麓なる小岳にして今は堀崩し畑と爲せり平宗盛の屬將の居城



金持の大要害 小要害

なりし由

黒坂の要害山 字要害山に在り嶺山にして峰に二段の平地あり要所に堀切を爲し東は險にして矢倉峠の道あり南西には天郷川を構へ要害の地なり高松十郎右衛門居城なりしと云ひ傳ふ(編者曰く此の地日野氏居城の址なり普通の要害と其規模を異にす。日野義行は日野郷豪族日野氏の子孫にして後醍醐天皇船上山より御還幸の時金持黨と共に鹵簿に加はりたり)

黒坂の鏡山城 字城内に在り

孤山にして大手に堀を構へ堅固の城廓を爲せり關氏福田氏と相繼で代々居城なりしなり

鏡山城 (四伯紀要)

黒坂城 一に鏡山城 いふ天正年日野義泰の居城なり義泰上京の暇に乘じ弟義行奪て之に居る後足利氏義行の罪を責め自殺せしむ毛利氏の時吉川氏の領するところとなり慶長十五年關氏嗣なく家断絶池田氏の領地となり寛永九年池田光仲受封家臣福田丹波の保管に移る關氏居城のさき町數七ありしといふ。(編者曰く此地關氏の居城を營む時何等の遺跡なく松山なりしこと及光明寺のありしことは黒坂城物語黒城開元記樵灌渠に明記したり日野氏の居城説は蓋し誤らむ)

中菅の不動か嶽 字瀧山の内に在り

元祿七年三月上旬毛利方の臣三村修理亮家親香川左衛門尉光景兩名南條山田小森行松等を従ひ在陣し尼子方の來襲に備へたりしが六月七日に至り尼子の臣福山肥後守は日野四郎太夫と謀り倉澤十郎兵衛石部四郎五郎鷹巢三郎兵衛遠石五八を始め五百人を率し不動か嶽に夜討し苦戦せしも勝利を得ず引退きし云々陰徳太平記にあり郡中にて名高き古戰場なり(前記詳述)

上菅の城山 字城の越に在り

山の麓前原と云へる處にて高地二段の平地を爲し堀切等残存す北方に日野川を構へ東は大畑谷川あり其外高山にして要害の地なり(編者曰城址より粘土採堀の時土器出土し山麓には高き五輪塔あり)

印賀の中倉城山 字城山中倉に在り

連山にして南の方大深田を構へ要害の地なり一條肥前守代々居城し尼子方に屬せられ元龜二年八月十二日毛利氏と戦ひ敗死す

大菅の砂子田城 砂子田家の上に在り

山の麓曾禰山にして堀切等残存せり

下阿毘縁の三澤陣 字三澤陣にあり

山の尾の孤山なり三澤氏の陣せし所なりといへり

下阿毘縁小林城 字解脱寺に在り

南に面する地今の解脱寺院内なり小林右近の居城せし所なり

下阿毘縁の城床 字城床に在り

民島豊後守の居城地又長島氏とも云へり

矢原の小糠子城 通稱小糠子山に在り

孤山にして險阻なる要害の地なり

狩場の王代城 字大代平に在り

嶺山にして峰に大平地あり西に面し大深田を構へ要害の地なり青戸治郎右衛門居城せし由云ひ傳ふ

笠木の鐵内城山 字城山に在り  
突出でたる小嶺山にして近地に大明田と云ふ所あり實は大名田なりしならむ

宮内の小熊井谷城 字小熊井谷に在り

曾禰先きの高所にして前に日野川を構へ要害の地なり

矢戸の名土城 字名土にあり

北に面する山麓の高地にして今の矢戸公園の地なり名土大膳正の居城なりし由(編者曰此地より土器佛像を發掘せり)

矢戸の大森城 字久田間山に在り

孤山にして東南方 日野川を構へ要害の地なり其日重郎右衛門邦豊の居城ありし由又近地に殿畑と云ふ地あり

三榮の村尾城 字要害に在り

北に面する嶺山にして絶頂に平地あり石礎堀切り殘存せり村尾雲六の居城なりし由又村尾海六ともいへり

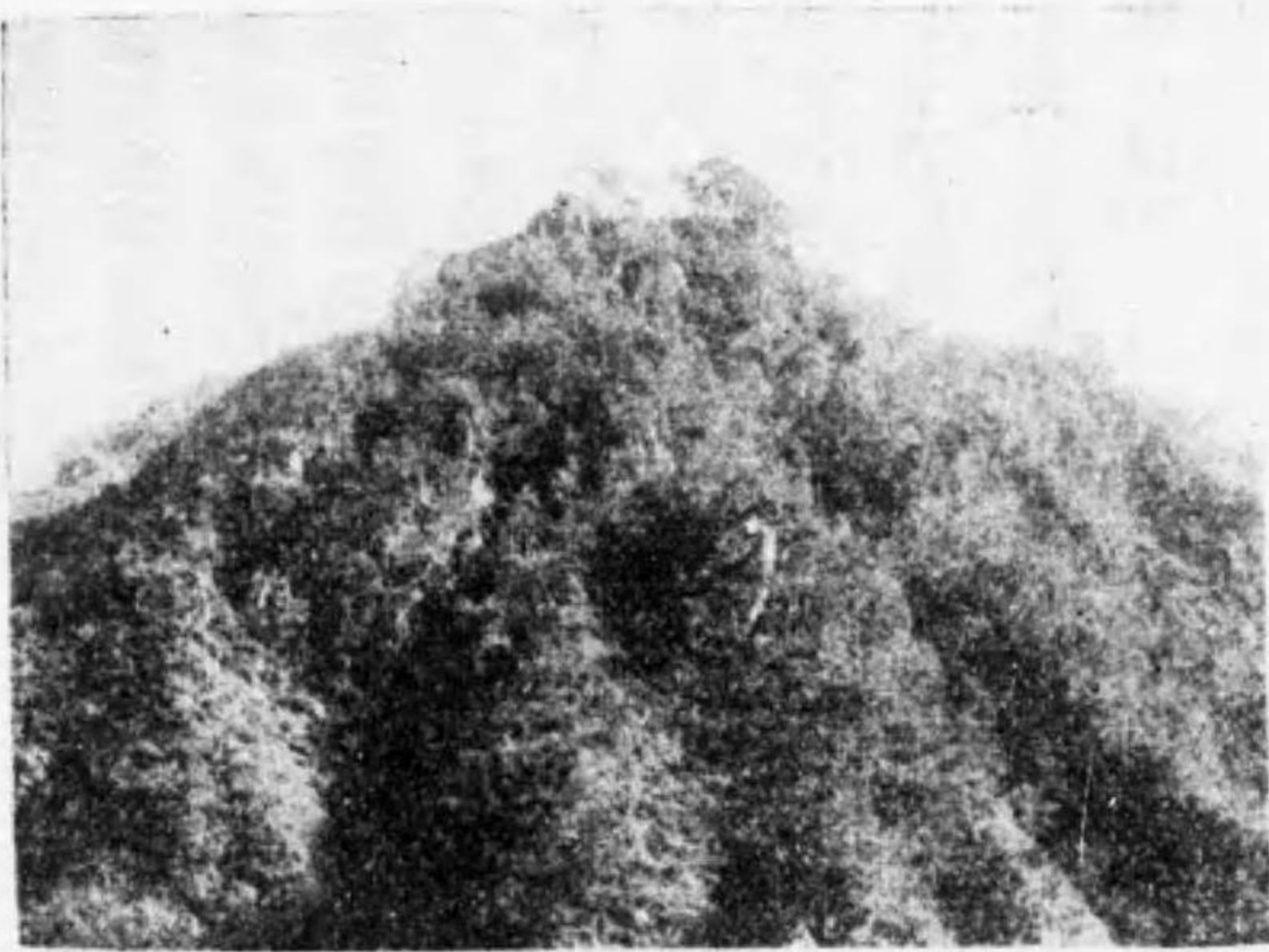
霞の上みの要害 字上み要害に在り

孤山にして絶頂に平地あり周圍峻險にして要害の地なり今は平地の所芝生地となれり金井彈正の居城なりし由云ひ傳ふ

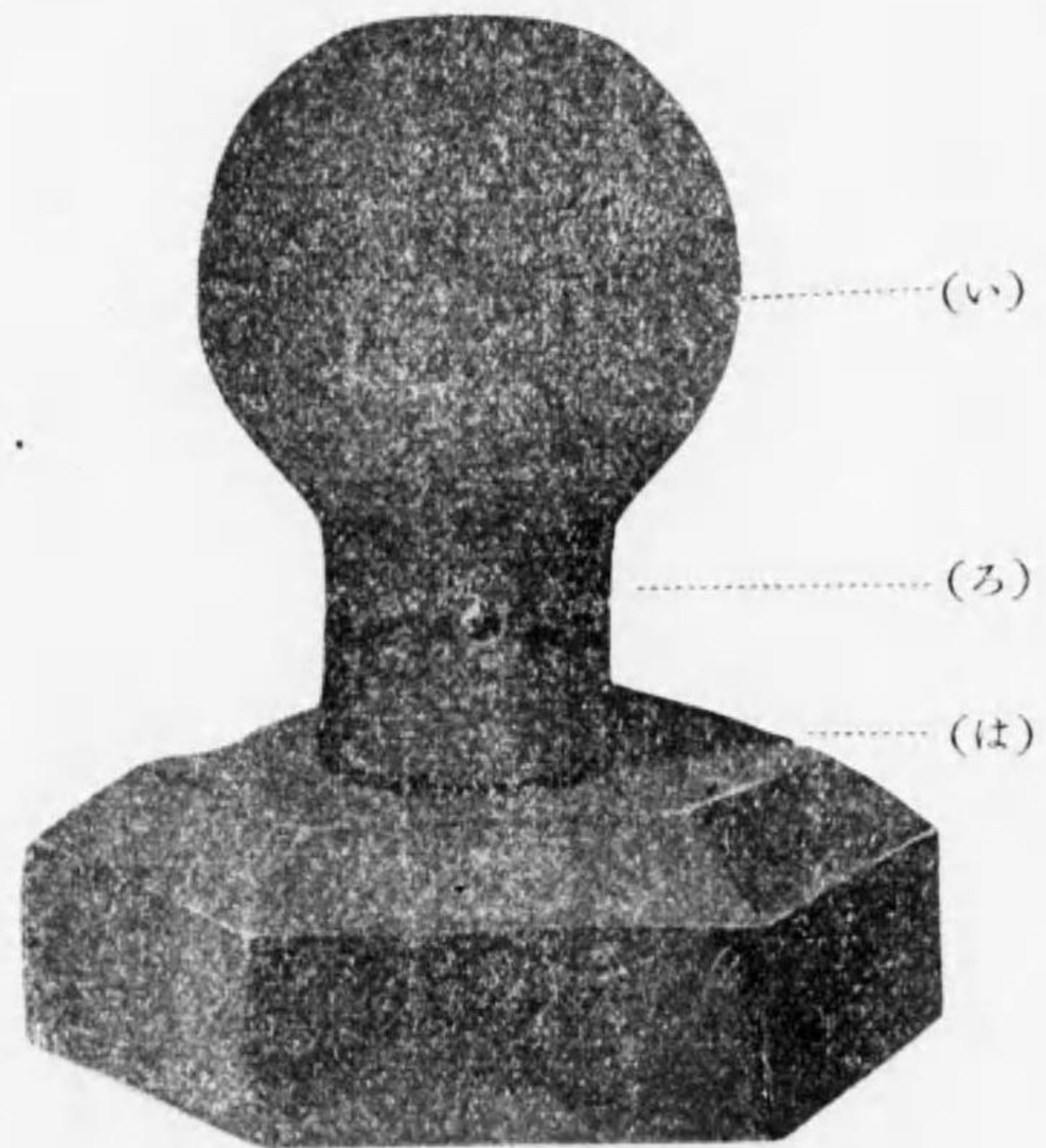
霞の要害 字要害に在り

連山にして西南の高地に平地あり此所を要害といふなり

霞の段の原要害 字段原に在り山腹に三段の平地あり前は日野川にて要害の地なり(編者曰黒坂長谷部家文書に依るに尼子氏滅亡の後毛利氏の部將香川光景此地に在城し日野郡を監したりといふ)



山井總山生字大村上野日



部頭の標馬るせ掘發りよ址城妙長村見石  
藏家見相上戸神

(い) は赤褐色の備前焼にして部頭に  
(ろ) の釘貫し申は充し實に僅に竿を入る程の孔あり  
(は) は寫眞撮影の實際使用に臺るに何等の意味なし

霞の小原要害 字境ヶ谷に在小原尻りの孤山なり  
生山の龜井山城 字城根に在り西に面する嶺山にして絶頂に平地あり四方岩石の嶮山西に日野川南に

石見川を構へ要害の地なり久志路和泉守景行次に關長門守一政の居城ありしなり一政の傳は藩翰譜に詳し(編者曰關氏の居城説は誤りなり詳しくは前記關氏の治世を参照すべし)

神戸上の長砂城 字城山に在り

東に面する大倉山の麓の山曾禰にして上に平地あり要所に堀切等殘存せり尙城主尼子方の屬將安達十郎其の家臣岩田長右衛門と共に毛利方と戦ひ上石見の山根に敗走し字若谷に其の靈を祀れり因に城址より馬標の頭部出土す

神戸上の山王城 字宮山に在り

孤山にして今の神戸上神社の在る山なり要害堅固の地にて尼子方の屬將居城して毛利方と戦ひし所と云へり

神戸上の八幡城 字横見に在り

尼子方の屬將の居城にして毛利方と戦ひ討死せられし城主の靈を祀れり

上石見の道場城 字城殿山に在り

東に面する山の麓の高所なり谷田三郎兵衛居城ありし由

上石見の駒崎城 字要害に在り

東に面する山麓の高所に在り尼子の屬將谷田五郎右衛門居城し毛利方と戦ひし所なり

中石見の友廣城 字要害に在り

南に面する大倉山の麓の高所にして平地數段あり今は畑となれり池田丹後守の居城なりし由

中石見の宗金陣 字宗金に在り

尼子方を討取らむと松原盛重比所に陣を構へしところと云へり

中石見の是次城 字下た要害に在り

西に面する大倉山の麓の高所にて二の丸三の丸の跡今は畑となれり櫃田四郎三郎の居城ありし由云

ひ傳ふ

下石見の寺要害 字寺要害に在り

西に面する大倉山の麓永福寺の上廣大の地なり名島左馬之助の居城なりし由

下石見の松本要害 字松本要害に在り

山の尾の高所にて要害の地渡邊石見守の居城なりしを天正年間神福の妙見山城主田邊美作守に亡されし由云ひ傳へり(口碑傳説部参照)

下石見の市場要害 古都家の上へに在り

東に面する孤山にして堀切等殘存せり

神福の妙見山城 字妙見上に在り

北に面する妙見山の麓にして今の中野神社境内に在り山腹に三段の平地は即ち本丸櫓惣門の跡なり

毛利の屬將田邊美作守信季居城して當時八千石を領有せられし由(口碑傳説部参照)

湯河の要害 字要害に在り

和田山と呼べり要害の跡なり

多里の龜尾山古市 字古市に在り

東に面する山の尾峰山にして頂上に平地あり一方堀切を爲し三方險峻なる要害の地なり

永祿年間尼子家の屬將の居城なりしが尼子亡びて後天正年間宮中務少輔成祐居城一家老増原右衛門

尉の頃は荒木長右衛門なりしと云へり

参考之爲め左に伯耆誌抄をかゝく

伯耆誌所載古城趾拔抄

- 久古村 城趾 大塚右馬頭と云ひし人居城せし云々
- 佐川村 城趾 小丸山と呼ぶ云々
- 江居村 城趾 東禪寺の上の山なる尼子氏の草なり云々
- 三谷村 城趾 要害と呼べり云々
- 貝原村 城趾 上代カ原といふ地なり云々
- 金持村 古城 字を野谷の尻といふ云々
- 中菅村 城趾 不動嶽ケと呼ぶ云々
- 上菅村 城趾 傳詳ならず
- 神戸上村 城趾 字長砂と呼ぶ云々
- 駒崎村 城趾 字を谷田といふ云々
- 郡家村 城趾 尼子氏の臣丹後といひし人の墟なり云々
- 宗金村 戰場山 毛利氏の將播磨守盛重此所に陣す云々
- 是次村 城趾 村の東北一町許の山なり云々

- 下岩見村 城趾 要害と云ふ云々
- 神戸村 城趾 中野村妙見山城といひ傳ふ云々
- 中野村 城趾 妙見山と呼べり云々
- 霞村 城趾 要害といふ云々
- 村尾村 城趾 村の東の山なり云々
- 湯谷村 城趾 字を和田山といふ云々
- 三部村 古城 日光權現の社山野上山に接す云々
- 船越村 古城 殿の段と唱ふ事蹟考ふべからず云々
- 久連村 古城 美女石城と號す云々
- 下黒坂村 古城 八代ノ峯と號す云々
- 黒坂村 古城 要害と號す云々
- 久住村 古城 鎌倉山と號す云々
- 榎垣内村 古城 一條山と號す
- 下阿毘縁村 古城 二あり云々
- 生山村 古城 龜井山と號す云々
- 小原村 古城 傳詳ならず
- 多里驛村 古城 龜尾山と號す云々

城山 濁谷村にあり往昔城主の居城なりしと云々今地形につきて觀るに頂上は平坦にして二十間四方もあり下方には又壑濠とも思はるゝ山の周圍各所に存在す四五十年前此の山麓に水路を穿掘せし當時刀劍及鎗の穂先の甚だ錆つきたるもの數多出でたりと又尾郷に常宿的場判尾等の稱あり是等は當地此の城繁榮時代の常宿より又射的場たり或は御判審たりと又字に勝負ヶ塔、戰等の稱あり之

考ふるに戦國時代小城主のあるありて小戦闘の裡に地方の小康を贏ち得しものか其他武人を葬りしといふ塚などありて坐其古の様を語るが如し熟々按ずるに眞住の地たる繞らずに山脈を以てして其の土地狹隘一方割據の主のよるべきものなり落武者の隠れ場所として好適の地たり敗戦の落武者は來たりて此の地の開拓に従ひ一般の生意をして盛ならしめたるものならむ

多武峰 城主秋繩某を葬りし所とその城趾は不明なれども大字秋繩とは其の名をとりて命名せしものなりと同字に大門ありこれ城主の門衛のありし所なり其他字に坪の内、東義久 などいふ所ありこれ城主の家來の名を取りてかく名づけしものなりと

六、伯耆守 歴代

一、奈良朝の伯耆守

從五位下伯耆守金上元

和銅二年冬十一月癸丑甲寅受任以下同

從五位下伯耆守山上憶良

靈龜二年夏四月壬申

從五位下伯耆守高丘連河内

天平十八年秋九月癸戌朔乙

從五位下伯耆守藤原朝臣良志

天平寶字元年夏六月丁丑壬朔壬辰

從五位下伯耆守大原真人繼麿

天平寶字七年春正月甲辰朔壬子

從五位下伯耆守多治比真人小耳

天平寶字八年決十一月甲午朔戊戌

外從五位下伯耆守丹比宿禰眞純

神護景雲二年春二月丙子朔癸巳

正五位下陰陽頭兼伯耆介紀朝臣益麿

寶龜元年春二月甲午朔戊申

從五位下伯耆守阿倍朝臣小東人

寶龜元年秋九月癸甲朔丙寅

正五位下伯耆守奈癸ノ王

寶龜二年閏三月戊子朔

從五位下伯耆守大原真人宿奈麿

寶龜七年春戊子朔三月癸巳

從五位下伯耆守内樂佐外吉田連斐太麿

寶龜八年春正月申寅朔戊寅

從五位下伯耆守大伴宿禰繼人

寶龜十一年春三月丙寅朔壬申

從五位下伯耆守篠島王

天應元年夏五月己未朔癸未

二、平安朝の伯耆守

從五位上伯耆介桑原公足家

延曆二年春二月戊申朔壬申受任以下同

從五位上春宮亮兼伯耆守紀朝臣白麿

延曆四年春正月丁酉朔辛亥

從五位下伯耆介藤原朝臣眞鸞

延曆五年春正月壬辰朔乙卯

從五位下伯耆介丹比宿禰稻長

延曆六年春二月丙辰朔庚申

從五位下伯耆守文室真人八島

延曆九年春三月丁酉朔壬辰

從五位下伯耆介藤原朝臣岡繼

延曆十年春正月壬戌癸未

從五位下伯耆介安部朝臣家守

延曆十六年春正月戊子朔庚子

從五位下伯耆守作良王

延曆廿五年春正月丙寅朔癸巳

中務少卿伯耆介安部朝臣寬麿

大同元年夏閏六月五丙寅

從五位下造酒守次官兼伯耆介秦宿禰都伎麿

弘仁二年夏四月五戊辰

從五位上鑄錢長官兼伯耆守大枝朝臣紀吉

弘仁三年春正月十二辛未

散位從五位下伯耆守口真人石雄

承和四年秋九月辛酉朔辛巳

大進從五位下伯耆介藤原朝臣成

承和六年春正月甲寅朔甲子

大進從五位下伯耆介藤原朝臣近主

承和九年秋七月癸巳朔戊午

從四位上位耆守等朝臣梁麿

承和九年冬十二月辛酉朔戊辰

從五位下齊部宿禰木上

承和十年春正月庚寅朔辛未

從五位下伯耆權介藤原朝臣近主

承和十四年春二月丁卯朔丙子  
伯耆守藤原朝臣忠岸

嘉祥四年春正月甲戌朔甲申  
伯耆守三原朝臣永道

嘉祥四年春二月甲戌朔甲子  
從五位伯耆守讚岐朝臣高作

齊衡二年春正月壬午朔丙申  
從五位下伯耆守坂上大宿禰瀧守

天安二年春三月壬戌朔乙酉  
散位從五位下伯耆守三原朝臣永道

天安三年春正月戊午朔庚午  
從五位下伯耆守家原宿禰氏主

天安三年春二月丁亥朔己亥  
從五位下伯耆守吉備朝臣金繼

天安三年春三月丁巳朔戊寅  
左京亮從五位下伯耆守布瑠宿禰清貞

貞觀六年春三月丁亥朔甲午

散從位五位下伯耆守百濟王俊熙

貞觀六年冬十月甲寅朔丁卯

散位從五位伯耆守橘朝臣良實

貞觀十一年春正月己未朔辛未

從五位下位伯耆守藤原朝臣安清

元慶二年八月甲子朔丁丑

散位從五位下位伯耆守有名王

仁和二年春正月辛巳朔丙申

右京亮從五位下伯耆守伴連真宗

仁和三年春三月八日

藏人式部大使從五位下伯耆守藤原隆佐

寬仁元年春正月廿四日

伯耆權介惟宗則友

康和五年二月廿九日戊寅除目三十日己卯日入服也

從五位下伯耆介兼針博士和氣季盛

康治二年正月廿七日乙卯除目入服也

正五位下伯耆權介兼大判事明法博士坂上明兼



久安二年正月廿三日癸巳除目入服也

從五位下伯耆守平親範

久安四年正月廿八日久壽三年正月七日辭す

伯耆權介安部朝臣晴道

仁平元年四月十二日、六月十五日、九月十八日署名あり

從五位下伯耆守平基親

元治元年閏五月廿八日仁安四年正月廿一日停伯耆守とあり

伯耆守平親宗

仁安三年より同四年正月二十一日停任

伯耆守藤原宗頼

仁安四年正月十一日

三、鎌倉時代の伯耆守

從五位下伯耆守藤原家信

建久三年秋七月二日受任以下同

正四位下伯耆守藤原仲經

建久七年冬十二月二十五日

從五位上近衛少將兼伯耆介藤原爲家

承元五年正月十三日

從五位下伯耆守藤原經季

建保四年夏六月二十日

從五位下侍從兼伯耆權介源雅光

文曆二年春正月二十三日

從五位下伯耆守藤原資通

延應二年冬十月二十四日

正四位下右近衛少將兼伯耆介源資邦

正元二年三月二十九日

右近衛少將兼伯耆權介源顯俊

正應三年春正月十三日

從四位下右馬頭兼伯耆介源有時

永仁五年春三月二十四日

從五位上伯耆守藤原隆頼

乾元年冬十二月十七日

從五位下伯耆守藤原實益

嘉元元年夏五月十八日

從四位下左近衛少將兼伯耆介藤原基春

文保三年春三月九日

四、足利時代の伯耆守(編者曰伯耆守にあらざれども本郡の教治に關係ありし長官は悉くこれを網羅したり)

從四位下伯耆守名和長年

建武元年正月因幡伯耆守に任せらる延元元年六月晦日京内野にて自殺

正五位上伯耆太夫判官名和義高

延元四年三月正平十九年遁世す

伯耆守山名時氏

興國元年足利尊氏より命せらる

伯耆管領山名師義

正平七年四月

山名時氏伯耆を以て吉野朝に降る

同年九月

從四位下檢非違使伯耆守名和彈正大弼顯興

正平十九年任せらる

伯耆外四州守護山名時氏

正平十九年七月吉野朝に反し五州の守護となる

從五位下伯耆守名和彈正少弼泰興

應永四年

從四位下伯耆守名和修理太夫行興

天文廿二年

尼子伊豫守經久

大永四年五月伯耆を陥る

尼子修理太夫晴久

天文二十一年家督永祿五年十二月死亡屬國皆爲元就所並僅有出雲半國

正四位少將毛利元就伯耆を所領す

永祿五年十二月

吉川駿河守元春伯耆西三郡を所領す

天正十年六月杉原盛重尾高城に代治す

吉川廣家伯耆西三郡を所領す

天正十九年

中村伯耆守一忠

慶長五年十二月米子城に治す同十四年五月二十一日死亡國除

加藤左近太夫貞

恭慶長十五年七月十六日美濃より米子城に移り元和三年伊豫の大州に轉去

第十四節 近世に於ける日野郡

一、關氏の治世

慶長十五年關長門守一政、伊勢龜山より轉封せられ、黒坂に移り鏡山城を營み五万石を領す。大阪前後の戦に参加し一政率して後斷絶す。(編者聞く慶長三年生山に來り後黒坂に移れる説あれども採らずこの説を採るは地方後世の記録のみにして後日の考証に讓る)(傳記部名勝舊蹟部参照) この間に於ける消息を知るべき重要な史料は、藩翰譜を以て最とすべし。よりにて、今そ關氏の部分を抄録することとせり。

關

(藩翰譜拾九)

長門守平一政は大政入道大臣清盛の嫡男小松内府重盛の次男新三位中將資盛の末葉也始資盛拾參歳にして殿下打乗の事に依て父の不興をかうむり伊勢の國鈴鹿の郡久我といふ所に追下され拾八歳のころ迄おはせしが此處にて壹人の男子を設けらるる盛國とそ申ける其後源氏の世となりても盛國いまだ幼なれば北條時政にぞ預けらるる盛國成人の後は二人の男子を設け兄は關右近大夫將監實忠伊勢の國鈴鹿郡關谷の地頭職を給はり鈴鹿を領して北條の家に屬す弟長崎三郎右衛門盛綱北條家の執事として夫か子孫世々關東に勢ありしかば關が子孫も同敷關東に伺公す元弘の頃相模入道高時が一族滅し時實忠か六代の孫關四郎伊勢の國に歸りのぼりて關谷に忍び住此處の地下人等昔の好みはすれかねて主君とぞ仰きける其後足利殿の御家人に召出さる四郎に余多の男子あり嫡子は當國神戸に住し次男は國府に在其余龜山鹿伏龜等に住す仁木義長が謀反の時關が兄弟將軍家の御方たるによつて鈴鹿河曲の郡にして各勤功の賞を給はりて是等が子孫當國に繁昌す中にも北方三人と聞えしは關は當流の嫡家として鈴鹿郡龜山に住し神戸は河曲の郡にあり嶺また鈴鹿の郡に在皆足利殿の御家人たり關下總守が男安藝守盛信が時に至りて一族神戸藏人太夫世繼なく盛信が次男を養ふて家繼せんと約束すかゝる處に龜田殿の三男三七信孝をして神戸の家を繼す神戸夫婦を召捕て近江の國の住人蒲生兵衛太夫賢

秀に預けらるる幾程なくして關も信孝も無禮類はすのみならず昔佐々木の六角と心を合せ信長に昔より交有とて是も蒲生にぞ預けらるる盛信頼て入道して萬鐵齊と號す天正拾年の春信長三七信孝を大將軍として四國の地に押向らる此時にいたりて安藝の入道はさる古兵なればとてめし出され三七殿に附られて本領龜山の城を給はり入道二人の男子あり嫡子はかたわなれば法師にせんとて幼なきより比叡山に登し次男は勝藏と名乗て此程は柴田勝家を頼みて越前の國に在入道本領に歸りし後年頃の家の子郎等召集めて二人の子何れをか世繼にせんといふ多くは嫡男既に御出家侍れば次男勝藏殿御世繼に立ん事勿論に候といふ羽赤藤左衛門尉斗比叡の山に渡給ふ御方は御嫡子にたまします還俗成せ參らせて家繼せ給はんは何條事か有べきと申ける入道此儀に同じて頼て山より呼下し男になし右兵衛太夫賢秀が掣にぞなしてける三七殿失給ひし後右兵衛佐北島殿に組しければ秀吉にも見參有へしとて都に登る掛る處にはじめ次男を世繼にせんと論議せし關か郎等四拾三人心を合せ瀧川左近將監一益を頼みて次男を主になし立んと一益をよび迎て龜山の城に橋籠る萬鐵入道父子都に登るに及ばず路次より近江の國に趣き蒲生を頼み秀吉の加勢を請ふて龜山の城を青落す秀吉城をば賢秀が男忠三郎氏郷に給ふ氏卿かしこまりて累代傳領の地を失なはん事不便也哀れ右兵衛佐に返し給はらばやと望みしかばさはは汝か望みに任よとて關にぞ下し給ひたり氏卿此年叙爵して飛騨守になさるなれば天正拾一年秀吉氏卿に伊勢の國松が嶋の地を給ひ關右兵衛佐國丸中務は蒲生が所縁の者なりとて其手にぞ屬せらる同敷拾八年氏卿を奥州の守護になされ會津の地に移り關田丸も同敷移り右兵衛佐一政白川の城を領し四萬從五位下長門守になさる文祿四年の春氏卿卒し慶長三年の春氏卿の男藤三郎秀行下野の國宇津の宮に移さる時關田丸は太閤家に召返さる二人とも同敷信濃の國にして所領を給はる關は飯山の城田丸は川當國は寒氣殊に甚しとて二人とも嫌ひ申しければ太閤覺し給ひし後同敷四年の春徳川殿の御謀らひとして二人また同敷美濃の國にて所領を給ふ關は當國土岐の地を領してけり是は昔し信長討れ給ひし時に徳川殿和泉より伊賀伊勢に掛り明れば五年の秋東西一時に軍おこる關は東國に心を通しけれとも末だ籠るへき城をも構えず勢は無勢なり力なく大阪の催促に従かひ當國の人々と尾張の國犬山の城に籠る大久保相模守忠隣本多中務太輔忠勝か許に使を立て御勢の攻下らんを待て御方に馳加はるへきよしを東國に申す徳川殿馳向ひ給ひし時急き御陣に馴參り關ヶ原に戦かふ其賞を行なはれて累代の本領伊勢の國龜山の城をぞ給はりける石三万田丸は西に組しければ家亡びぬ同敷拾五年七月十九日一政に恩加ゑられて伯耆の國黒坂城を給はりて移る石五万大阪前後の戦かひに従がひ首三十を斬

て献する程なく一政卒して世繼なく關が嫡流建てけり卒せし年月未きかず  
元和三年の頃にヤ

一政か舎弟勝丸か男十兵衛尉が子兵部少輔氏盛に五千石を給はりて一政か跡となされ其子左門なり。

伯州黒坂城物語

安江應人所藏

編者曰、文書として見るべきものあり、特に採録す。外に樵灌集あり大同小異なれば省略す

勢州伯州國替事

流轉生死の定めなきは世の習なり爰に勢州嶺山の城主關長門守一政、東照君へ仕へ奉りて采地三万石領しける處慶長十五年庚戌正月  
貳萬石御加恩を蒙り都合五万石伯州日野會見汗人三郡の内に於て是を下され同國へ所替被仰付られる、かゝりしかば伯州にて新城を  
築れんとて其評議あり同國日野の郡内に生山といふ所あり同所には古城の跡も有と聞へければ先彼地見分の上相應の所ならひには彼  
處を城地に定め然るべしと評議ありて見分の爲軍役長崎太郎左衛門副士小林唯四郎今木七郎兵衛其外下役の面々足輕小者彼は大勢連  
にて同戌正月下旬龜府を發足して伯州さして赴きける所日を経て同國の内根雨といへる驛に參着して同所へ宿し其所の役人共召連翌  
鳥生山へと出立しけり行程四里半斗と聞へける然るに貳里過て下菅村といへる所に至り暫く疲れを壓ひ嶺山の役人共其邊を見廻しけ  
る所大河を隔て西に當りて一村あり松山の内に白土木の間隠れに見へければ何れも是を遠見し、ものゝ敷覺ければ根雨の役人共へ  
尋ねける所黒坂の光明寺といへる寺なる由、太郎左衛門申けるは同所は鳥渡見たる所竹木など生茂りて曉と廣狹見分申さず候へ共境  
内たる狭からず前には大河を抱き城地にするとも不足なる事ある間敷候いかにしても見所ある土地柄なりとて暫く遠見して行きね、  
踏馴れぬ道路に歩みを憚み行ける所程なく生山村へ辿り着ある民屋に腰を懸て休息し其有て彼城請取と生山村を看下て太郎左衛門云  
けるは當所の事は聞及び候て參見たる所山中とはいへ共ヶ程には有間敷と存候處黒坂より遙か分内狭くして五万石の主將たる人の住  
べき處にあらざる也といふて下山して元の所へ立歸り此邊土地の開けたる所もありやと聞合ける處同所より半道斗立て霞村といふあ  
りまた夫より壹里經て岩見村といへる所ありて境内余程廣くして兩村共に要害の古跡も有と聞へけるに付いづれも急ぎ其村へ行て見  
たる所要害もありて山中相應には土地も開けて見ゆるといへ共氣に叶はず其日は岩見村へ一宿し翌鳥同所を立歸り村中を見たる所此  
の本陰彼の數陸に荒家に人の住べき所とは見へざりけり

暮てこそ人すむ庵としられけり

かた山影のまとのともし火

と連ねたる古歌を思ひ合する斗也何れも彼松山へ登りて四方を望みける處近邊の村も見へ伯備の國境には高山ありて去年の白雪消殘  
りて見へければ孰れも時節珍らしき事に覺けり太左衛門申けるは當黒坂東南の方大河を抱き北は谷の流れを請て大澤あれば三方共に  
備へよく四方山にて包むといへ共當山へは間を隔矢石の届く所もなく分内とても狭からず山中に於ては當所ほととの處もあるべからず  
各如何思はれ候やと云ければ小林今木申けるは仰の通四方の構宜敷相見へ其上同所の通路皆山道にして切所なりさる所もなく此所御  
城地に定められ候ても然るべくやに存候と示談に及び彌それに一決して下山し村中を見廻りける處晚景にも及ひしかは夫々に宿を取  
明の日より近は勿論備中境迄見分し黒坂の境内委敷繪圖に調へ今木七郎兵衛に是を持せて龜山へ差歸し同人歸りて後彼圖書を差出  
し御覽に入れる所性からさる山中にて御所存には叶はされ共軍役の極めたる事なれば敢て兎角の仰もなく彌黒坂府下に定まり覺。

黒坂諸普請

谷は丘と成淵は瀬となる世の習ひ斯る山中の黒坂村關の城下にならんとは思ひも寄らぬ事ともなり誠にも猿鹿の聲を友とするとはか  
ゝる邊土の事なるべしそれ故にや往昔文治年中長谷部左兵衛尉信連と云る北面の武士此近き邊りに榎村といふ所ありて其所へ罪せら  
れて蟄居せしとなり信連同所へ居ける中木佛を自作して同村の山内に安置し其跡今に残りて長樂寺といへる小寺ありされば黒坂の事  
龜府より聞届濟來り早々普請に懸るべしとて其手の役人來りて關領の諸職人を呼出し普請の談義に及びける先役人共當分居ける所を  
補理何れも是に移りて居けり竹木所々に生茂りて有ければ邪魔なりとて是を殘らず切拂ひ高低を直して土地を平にし山を切流して澤  
を壘一圓の平地とし廣狹を積りたる所北の澤邊より南方の水邊迄堅七町余横は東の流水を境として西の山際まで所は三町或は四町と  
聞へける彼松山城地に成けるに付同山の光明寺をば外へ移し城の地行石垣を取材木を伐集め上を下へと混雜しけり人夫の者共大勢出  
で突鼻と立騒ぎ日々土地も賑はひれば此事を聞及び遠近より酒肴を持運商人共も入込て人足繁く聞へける。

光明寺の事

卯月下旬の比ある夜まだ宵のことなりけるが鶴のごとくにして光りあるもの光明寺の傍示に當り樹林の中より光り出たる所忽怪數形

に變じて飛去けるが同所の内南方の水邊に至りて消滅しけり其後同寺を彼所へ轉じて建られけり本尊光りを放寺僧へ易地を告させ玉ひける由沙汰しけり然る事もあるまじき事にもあらず同寺の本尊は地藏尊にて御座けるが屢奇特ありて既に文祿元年首夏の比盜賊共七八人ある夜彼寺へ押入金錢資財を奪ひ取て出んとしける折柄異相なる者何所共なく顯はれ出盜賊を八打と睨み獅子奮迅の怒りを發し我は當寺の本尊なり奴原逆ること勿れと鐵如意を打振て其行先を遮きり玉ひければ盜賊とも大きに恐れ盜みものをば投捨て命を助りけるを詮にして蜘蛛の子を散すごとく四方へ散て逆るよし此事遠近へ鳴渡りて知らざる者はあらざりけり。

長門守殿入城

去は社去ぬる戌の春龜厨の役人黒坂へ立越て諸普請に懸りける處假初ならぬ事なりければ容易に日鼻も付ざれば何果べきとも見へさる處大勢の者共粉骨を碎きて出精しけるに付同十八年巳の中春迄に諸土功愈々出來しけりさるに依て同月中旬長州鎮山を發駕あり御同人申されけるは我今當府を立て伯州へ赴きければ生涯の名殘成べしと仰ありて涙を催されける由心中の程を想像れけり折角雁の幾つら鳴連て過行ければ長州是を御覽ありて。

雁ならぬ身は幾春をふるとも

歸らぬ里の名殘なるらめ

と詠せられ名殘果しなればとて御駕を急がれ長途の旅に臨まれけるが日を経て終に伯州の地へ着駕ありて黒坂へ御入城の日に成しかば旅行の粧善美を盡され花やかにぞ見へにける封地の者共老若男女群をなし道路に出て張見しけり唐土の龍塞國には美人を得て新春を知るとあり黒坂には關君來り玉ひて寢に春の新たなる事をも知ぬべし長途恙なく御入城ありて上下の者共是を賀し奉り賑々數聞へける。

關下野守殿事

關の分家にて下野殿といへる人あり長州の爲には伯父なり此人武道に發明せられ中にも射藝に長せられ誠に強弓をよく曳かれ今能登殿と異名を呼り然共自讃私曲にして人是をにくめり長州にも睦ましからず同君は年餘若く鷹揚なる天質にて動もすれば野郎習を行はれ老臣の面々も常に苦心せしとなり本主より野州の權勢強く阿順する者も多く是あるとなり。

長州遊山

四方の花盛りに成ければ山の端毎に懸らざる白雲もなく面白氣色に見へ自らも浮心立時節にて長州蒙務を發せられん爲遊山の趣向を催され一日御出ありて御菩提所泉龍寺の糸櫻を遊覽ありて同寺の傍示なる要害の古跡杯御一見ありて夫より榎村の長樂寺へ御出ありて信連の作佛等御覽せられ御歸り懸道を替て卯の池へ立寄られ御覽ありける處余程手廣き池にて満水し水色青く折節春風苑て素波を



黒坂鏡山城趾

上げて海水を望がごとし長州是を御覽ありて仰あるは山中ヶ程の池あべきとは存せざる事なり然るに卯の池といふ事仔細ある事や尋ね見るべしと申されければ近習是を承はりて其邊の村老を呼出し尋ねける處其者申けるは左る由來ある程の義には御座なく候此池三十年巳前迄は檢原にてありける所如何せしや同木より火出て悉く焼失して焼土となり同所其折しも天忽搖曇電光眼を貫き頻に雷神はためき大雨止間もなく降續きける所此燒跡へ水溜り池に成る所此近邊に榎村といへる所へ卯野左内と申浪人居ける所藤といへる彼が女友に誘はれ巖折んとてこの池の邊りへ參りける所如何せしことにや溺死して相果卯野が家名を呼其比より誰いゆとなく卯野池と申習ひ候また藤が死際に至り其母不思議の夢を見たりとて過にし藤を神に祭りあれなる森の中は小社を建て藤が森と號し申候我々若き時の事にてよく覺ける事に候とぞ申ける此趣申上げる所仰ありけるは卯の池藤が森の謂れ聞へ候と申され候て一笑せられける斯て時刻も晩く成ければ歸城をぞせられける。

長門守殿再遊山

諸事移り安きは人心の常なり長州また慰を催され發駕ありて中菅村の驛瀧を

御覽ありて井に龍王ヶ瀧を遊覽せられ斯遊ばしける。

見あくればちひろをたむ巖より

霞をこめて落る瀧浪

と御口號を催され暫く遺遙ありける所俄に雨を催しければ急きて歸館せられける。

## 碁 星 出

同十九年寅ノ中春東南に當て異星出現しけり其尾西北に向ふ凡百間斗に望まれける關家の内に洞典廐といふ者彼星を見て碁星と號惡星にして兵革を司る由判斷しけるとなり然るにいかなる仔細にや内府公秀頼卿御中割て既に大阪へ御出馬あらしめ玉ふの由諸大名に御沙汰あり大名中隣順に申合され思ひくゝに御出陣ありとぞ聞へける係る折しも長門守殿は御所勢に付戰場へは望まれかたく下野殿出陣あるべきこと評決しける處長州は余の大名方とは違ひ臣の禮を以軍勢を出されすんは叶ひかたく分家の下野殿出陣といへ共輕卒成御斗らひも如何なりとて長州の勢を振はれ過半下野殿に與へられける何角の評議濟ければ一日供揃ありて悉く軍器を莊り上下の輩甲冑を着用し夫々の備を立て進み出て野州の出立は紺地に雲龍を織りたる直垂に五枚鍔に筋金入たる頭形の兜を猪首に着なし茶糸威の鎧を召れ春風といへる一二三行馬と打騎惣勢三百餘人を前後に隨かへ手綱かいくり徐々と歩ませらる自然と其位も備はりてそ見へにける其外騎馬武者の面々は轡はみを並へ馬に白浪囓せしんつゝと乗出す兜の星金物は朝日に映じてきらめき渡り簾さしものは厲風に驍軍出立の其粧ひ勇々敷そ見へにけり勢揃濟ける上皆甲冑を常の衣服に脱かへて其日は先根雨宿迄赴きて同所へ止宿召れける。

## 關 城 落 居

前車の覆かへるを見て後車の誠とするいへり昔より惡逆無道なる者自亡せずといふ事なし關下野殿出陣せられければ家中の者とも是を賀して登城しける處城に於て御酒を下され何れも頂戴して居ける折しもあれ城山遠かに鳴動し風吹さるに庭の大木中よりホツキト折り切り何事ならんと孰も席を立て庭を見やり色を變じて長州の前へ出ける處三浦要人申けるは御出陣の日に當りケ様の變あること心得かたし思召の仔細もあればいつれも下城を差止相語らるべしと申渡しければ諸士の面々詰所くゝに座を堅めて居たりけり夜に入れば役所の番等猶々嚴重にぞ聞へける更るといへ共眠りを除き心をめて居たりけるが丑滿の時に至れば草木も自然に伏とかや人心鈍く成ける時こそあれ野州出陣は偽りにて其勢を率て取て歸され當城近く寄られけり城外の者共是を見付て注進に及ひしかは城中大に周章し上を下へとかへしけり三浦要人惣方を押しづめて申けるは野州の軍立何程の事か有へし某は大手を堅め防戦の手當をす

べし孰れも御前の御氣分を伺はれ御出馬もなされず御供して向はるべしと云渡し騒く色なく見へければ何れも又英氣を増御出馬の御供してそ出にけり搦手をは大谷主水原左中二手に備へて堅めたり敵勢程なく城前へ寄るといへ共聲もせずしづまりかへり武者四五人進み來りて城門を叩て申けるは我々は下野殿の使なり注進の仔細有て參りし間爰明て通すべしと云ければ監者心得門戸を開ひて通しければ追續てどやくと籠入て櫻の門迄行ける處一聲の鐵砲耳際に響きける所右往左往より伏勢どつと起て中央には三浦要人乗配を打振て敵將動くこと勿れ思ふ坪に引入しと穂先を並べ横槍を入れれば寄手案に相違し自み立て見へける所城兵手滋く突立ければなじかは以てたまるべき暫時か間の戦ひに残り少ないうちなされ漸く遁れ出れば城兵思ふまゝに打勝て兜の緒を門戸を堅めて居たりけり寄手は思はず利を失なひ人馬を休めて居たりしが野州の軍配にて勢を四方に分て攻來り息をも次す戦ふたり城兵是を防ぐといへ共算は衆に敵せず城方無勢にして會釋しかたく見へけるが此彼を打破られ寄手忽乗入て切立ければ城兵大に亂れ立死力を勵て戦へ共防くべき様なく我も我もと討死をぞしたりけり長州も後れじと生害をぞ遂られける、かゝりければ死殘る者もなく既に鳴も鎮まつて干戈の森散止ければ野州徐々と入城せられ首實檢して居られる處三浦要人如何して敵中へ紛れ居たりけん飛て出て我是にありと云様に野州に飛蒐り只一刀に首討落したりければ左右より要人を取て引伏せ寸々に切殺せり寄手勝利を得とはいへ共兩將を失ひつれば何の甲斐なく沖にも寄す磯にも着ぬ心地して只忙然と顔を見合居たりけり野村軍太兵衛といふ者諸士に向て申けるは御兩殿御最期を遂げられ候上は御家物金銀等を配分し開城するより外なしと云ければ騎將森脇彈正と云者申けるに野村殿の申さる事に候得共各如何御存候や今更悔て返らさることながら我々三代相恩の主君を忘れいかなれば天魔の所爲にや惡將の下知に隨ひ斯るしぎに及ぶ事天道に盡る所なり然るに先非をも顧りみず御家物を配分して立退時は盜賊の行跡に異ならず且は後代まで主従の恥辱是に過べからず某等か存るには當城を守り居て此度の内亂東表へ注進し御役人を引請御城を引渡し其上離散して然るべし誤ては改むるに憚らず孰れも同意せられんこと本意成へしと云ければ一同に此利に伏して其評議に一決せりさて猶豫なく内亂の仔細公邊へ達せし所御見届とし山崎修理之介副士那須與一此人々黒坂へ來着有ければ森脇彈正竹垣庄太夫出迎て城内へ請し入内亂の仔細を具に言上し萬々詰勿濟ければ籠城の者共退城して思ひくゝに離散をし中にも生害して死するもあり俗にいふ大木倒るゝ時は小木千本轉ふと云真に其通關家の浪士漂泊の身と成て所々の道路に吟よひ指頭の嘲を受る事是非もなき次第なりけり長門守殿は名には似ず入城の間もなく落居に及

ひ其夢も覺めて後元和三年播州姫路の御嫡子宮内少輔忠雄卿へ備前一國宛行はれ同國岡山へ御居城なされける御次男新太郎光政卿へは因幡伯耆二ヶ國御拜領ありて因州鳥取へ御居城なされ黒坂の庄をば御家老池田下總へ御預けなされける其後星雷押移りける所寛永九年備前の國と因伯御國替の 仰を蒙らせられし故忠雄の御子光仲御年二歳の御時鳥取城へ御移りなされ黒坂も交代して光仲より黒坂を福田へ拜領仰付られる。

鳥取の古城主宮部善姜坊已後池田備中守長吉居城の所備中松山へ轉す右國替以來寛政元迄百五十七年被成。

黒坂開元記抄

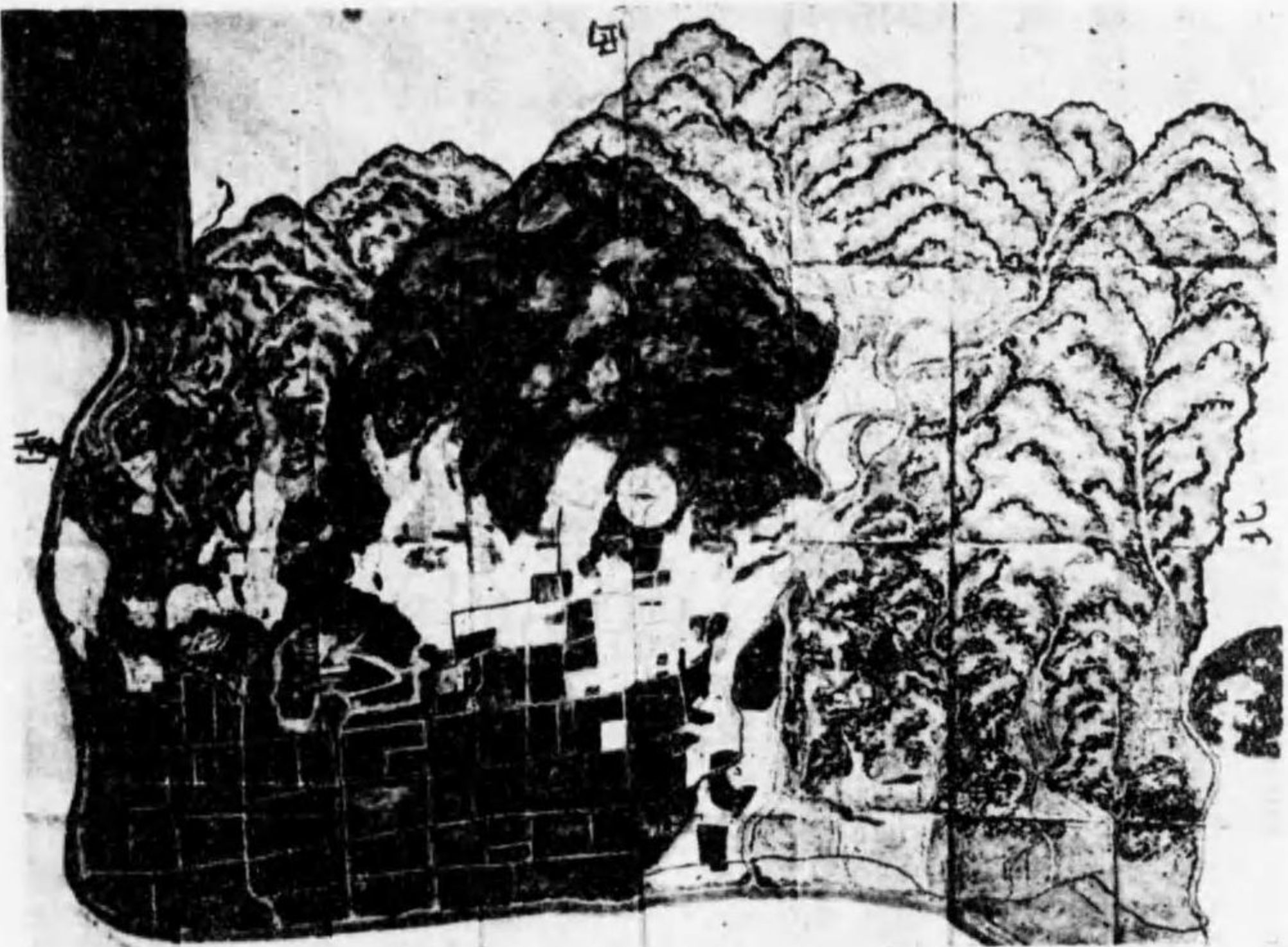
黒坂山上家藏

此書現今下蚊屋大岩太満喜保管せり。尙本書、福田治下に及べる點も少からざれと便宜上此に掲ぐ。

然るに慶長三年の頃迄は高里古市横手といふて三ヶ村にて小川南へ流れ薄霧立のほり茫々たる澤野にして人住里とは見えざりしが古の城主關長門守伊勢の龜山より慶長三申年日野郡生山に替地有之て住城ありしが、同拾七年子の年廣からずとて當所黒坂に被爲遷 時に三年前より大山と愛宕比叡山三ヶ所へ城地開之吉日を被窺候處月日時刻も無相違申來り聖權現神主長谷部相模へ被申付地鎮地祭りをなし鐵札東西南北に打御城は地割町割して地神を南の方の川邊に祭りたまふ只今の地神荒神の森也其の時大工頭領茅木源兵衛と申者指圖にて城は棟作に修造せり山の名をは高見山と號し東の二の口を櫻門といふ南裏の谷を那志ごといふ辰巳の方藪の内山里といふて今稲硝藏あり櫓總堀にして居城神主相模町割して南北へ町筋五通り東西へ五通也居城侍町横八間大手見付に札場左右に大目代上は長尾太良左衛門下は清水與三右衛門兩人作廻根雨村藤右衛門といふ者大工棟梁にて高里町壺丁はつれに舟渡し庄山町二丁中町一丁榎町北町壺丁大手見付に三尺のひづみをなし町尻東に當て大川あり渡り廣瀬あり渡五拾間とこ水三尺貳寸黒坂惣町中家數都合千七軒關長門守新地なる故に其の頃將軍大閣秀頼公より地主御免の願相叶町裏十五間御免地尤も年貢無之商人町拾四間尤も町分之義は下札に替る也。

一光明寺は本御城屋鋪壹門勢多満里北の方に有しを關長門守御城屋鋪に被成度付寺地何方にても望可申由被 仰出候處時の僧月光といへるが、短氣の生付替地の義不快に存何方にても御存寄次第可被 仰付と當りヶ間數返答に及候に付仍而只今の寺地也此光明寺の本尊はからだ光の地藏春日の作佛といふ當郡火防あたご地藏也光明寺短氣僧により關殿外寺に位牌を定んとて中管村に不動

寺といふて古き寺有之を漆原にたひてんせし古寺に釋迦の像有之を本尊とし瑞瑠光山泉龍寺御造營依之重物又は長柄銚子少々寺額なと被付置なり。



文政五年三月 黒坂輪家藏の圖

一長門守此處に永城して高見山に天守二ノ丸ようようも成就致し四方に櫓を立て久住川の邊より西法寺坂へ引廻し松ヶ峠迄大河邊に高石垣をつき上塀をかけ廻しその内に諸家中の屋鋪を建總て黒坂の入り道七口にて壹間切れば入事ならず内四ッ道を切ふき大川には手橋をかけ惣門に通道をつけ下管村を賣人町にして日もあり山後の山見付にて惡敷其頃米壺石に付拾五匁より拾二三匁宛之 米八石被爲下候は、はげ山を崩すべき積も有之惣て黒坂山續にて八景有之と古人云り成程山の姿御城山形ち龜なり仍而龜山ともいへり然るに山の西方に尾有之此尾切しゆへ惡しく山に精なく繁昌しかたしといへる人あり。

一西かた尾といふ御屋敷の裏門無しこえ下る左の方竹木の内櫓の木あり若し國土に兵亂又は曲事有之時は古真木（註櫓、櫓の類）の葉不時に落葉すといふ既に大阪一亂備前當國御國替の節も真木落葉せしといふ。

一長門守殿御知行五萬五千石なり長門守殿甥子ありけるが御名を主馬殿と申しける御亡父末期に臨んで長門守殿へ主馬殿名を主馬殿と申しける御遺言ありしといふ然るに主馬殿拾六歳に及ばれ十五歳に及は、家督相渡その身は後見にそなはつて萬事宜立て給へと御懇なる御遺言ありしといふ然るに主馬殿拾六歳に及ばれ

候へ共その御沙汰無之仍而主馬殿御伽何之帶刀と申す人ありけるが早々その御思案可然旨御勸め申ければ主馬殿此の由開召扱ては伯父も我を見捨るにやと當惑仕玉ひけに折節も長門守殿無程歸城之時分申參候に付主馬殿町方近在のものともをかたらひ多くの藁人形を作り甲冑を着鎗長刀鞘をはつし鐵砲の火蓋を切て待かけたり。

長門守殿には存外の義故行列等賑々敷御歸召るに矢びつが峠に到西法寺坂を見渡ける數百騎の軍兵川風に旗をひるがへし陣列堂々として見えければ長門守殿扱てはとおろき引退道を見るといなや主馬殿勢追懸而板井原四十曲に至て互にたゞき合打しらげ退ける右に付主馬殿義は當所へ歸城被致けれとも此由早速 公儀に聞えければ伯父長門守殿は家督不被渡不届主馬殿へは御上へ不申上我か意を以て國土を騒せし罪に依て御改易被 仰付依之武具等は下菅村に關所藏を建入置るゝなり右長門守殿漸々五ヶ年御居城也其後池田下總守遷城有之御知行壹萬四千石なり當所居城都合拾五年有之其後御國替下總守は備前の竹部へ被引越其跡へ福田内膳公先例之通當所の地頭に御定黒坂御領にて被移候也依之代々長原山上半太夫當所仕置被申付也。

一昔城内藏坂下門の内たり惣廻り敷にて土手あり然るに只今其所田地に成る也門の外南の方古への堀今にあり北の方堀は或時洪水にて山手抜出てうまり道より下堀田と申す也左右に松並木は福田代々植るなり北の方馬屋あり昔庄兵衛と申す乗かた者居り申すとて只今庄兵衛屋敷といふなり福田氏御知行高三千五百石外に内證米といふて百石餘黒坂にて納所也藏屋敷ありて給所より知行米納所有之也山上屋敷の内に武具藏あり御外門の堀の上敷其内を山里といふ其の昔庄屋々敷といふ惣廻り柿木數多あり惣茶畑也西の方敷へり大なる井あり廻り石垣にてひでりたりとも水多く用水也御屋敷御臺所の前車井戸あり山上屋敷角横道あり昔家中道なりト藏屋敷の角横道是も家中道なり大手札場より坂下御門迄三丁程あり札場前石垣ありそれより右の方道あり並木松邊迄小川此の川常々水絶えず山峯より落る水なり町六丁あり上郡町生山町此處横町小川あり惠比須神郡町はづれに舟渡あり此川渡り上り向下菅村といふ中町夫より札場下に黒坂町榎町惠比須神上のはづれらうわての方道ばたにあり爰も榎町小川夫より北町横手村ありおち鍛冶屋町の處古市村といふ上町下町共に御屋敷普請繕諸事掃除萬々人夫町中役目にて相勤る也昔關氏開地より或例也。

(省略)

關長門守一家系

(編者曰黒坂移封の年代前文と異り一考論諸を合す)

先祖平氏安藝守清盛の嫡子内大臣重盛次男新三位中将資盛之苗裔也重盛逝去の處舍弟宗盛家督となり天下之政道意に任せ給ふ此時諸國の源氏蜂起して平氏を亡し天下一統に源氏なるしかれ共資盛は故有て勢州鈴鹿郡關谷の久我といふ所へ流されて居す此時十三歳也彼の處へ六年の星霜を送り男子壹人設けらる然れとも源氏の聞を恐れて潜に北條時政かたへ彼の男子を預けらる成人有て盛國と名乗り北條が館にて病死せり其の息左近將監忠實といふ此時は北條時頼の代なれば始て勢州關谷を給り領す故に子孫皆關を稱號とし忠實より六代の孫關孫四郎成實は足利尊氏に仕へ勢州龜山の城主となり數代此城を領す長門守父關安藝守入道万鐵は江州蒲生下野守定秀が智となる故有て信長公勸氣を蒙り領地を沒收せられ蒲生右兵衛督賢秀に預らる然れとも遙に年を経て捨免あり織田三七信孝へ附玉ふ本領龜山を安堵す。

私曰(記者は山上氏なれども其の盛信人道万鐵信長公之勸氣を蒙りしは元龜四癸丙年二月也赦免は天正壬午年三月也勸氣並捨免之名の誰なるかを知る能はず)

次第且又伊勢平氏之由緒は蒲生盛減記の中に委細記す此の故に此書に不記唯關一政の先祖子孫之大概而已記す。關四郎盛忠より盛信迄數代三萬石を領す信長公横死以後は秀吉に屬し太閤没後は御當家へ忠を盡す此故に慶長拾五庚戌七月十九日貳萬石御加恩都合五萬石になりて伯州黒坂へ所替へ被仰 付たり是は盛信の息長門守一政時代也然るに仔細ありて領地不殘被召上伊勢平氏斷絶不便之至とて息兵部氏盛に新規に五千石給る氏盛功を勵み老衰すといへとも願を立寛文八戊申十二月隱居白閑と號す家督を息左衛門へ讓る。

私曰長門守領地沒收之事當左衛門殿へ遠慮之事有之故に不記次に秀吉公時代瀧川下總守と盛信勢州龜山交替忠不忠信又信長公時代蒲生氏卿の幕下になり縁者となり盛衰子孫一族の事は信長記に委く蒲生記太閤記に載せたり此故に不記當左衛門殿の先祖諸人へ知らしめん爲に大概を記す。

黒坂御土藏に有之候御鐵砲其外御道具類左之通

箱共斤目九貫目辯形なし

一長 筒 筒長サ曲五尺五寸五分、臺尻長サ壹尺七寸九分

箱共斤目四貫八百匁



- 一長 筒 筒長サ四尺二寸參分毫、尻長サ壹尺四寸六分 壹 挺
- 壹箱ニ貳挺入懸目七貫五百匁
- 一長 筒 玉目六匁鑄形アリ 筒長サ參尺六寸貳分、壺尻長サ壹尺參寸四分 壹 挺
- 玉目六匁鑄形有リ
- 一長 筒 筒長サ參尺五寸貳分、壺尻長サ壹尺四寸參分 壹 挺
- 箱共斤目五貫目鑄無シ
- 一長 筒 筒長サ四尺壹寸八分、壺尻長サ壹尺五寸貳分 壹 挺
- 箱共斤目五貫目
- 一長 筒 玉目四匁參分鑄形無シ筒長サ、參尺六寸九分壺尻長サ壹尺貳寸七分 壹 挺
- メ六挺俱シ箱五ツ
- 一六 匁 筒 内五挺八百目筒箱入斤目、風袋共貳拾壹メ五百目 拾挺入壹箱
- 一兩 筒 黒樫、箱共斤目拾參メ五百目 拾挺入壹箱
- 一兩 筒 但參匁五分七挺、斤目拾參メ五百目 拾挺入壹箱
- 一參匁五分筒 但、桶筒四挺、赤樫六挺 拾挺入壹箱
- 箱共斤目拾四メ目
- 一參匁五分筒 不殘桶筒箱共斤目、拾四メ五百目 拾挺入壹箱
- 一外ニ參匁五分筒 拾挺入壹箱
- メ五拾壹挺、箱數五筒也
- 斤目メ七拾七メ目、人夫出シ積參拾人役、御鐵砲合五拾七挺 壹 挺
- 一鑄形 拾匁 三ツ

- 一六匁 一ツ
- 一四匁九分 一ツ
- 一四匁三分 一ツ
- 一三匁五分 一ツ
- 一三匁三分 二ツ
- メ九ツ

右之通古帳ニ無相違候得共大分痛損シ有之其上壹挺ハ不足届申ス事

寛政元酉ノ三月相改

其外御道具類

- 一具足 一甲 一旗 一指物 一鞍 一鎧 一押懸 一鎚 一長柄
- 一膳 一椀 一猪口 一皿

- 日野郡御給所 拾八ヶ村
- 小原 櫻子 霞 ウレシハラ 漆原 檜原 印賀原 久谷 クタニ 中菅 下菅 下黒坂 下榎 安原 津地 久住
- 横手 下代 上代 小河内
- メ外ニ因州岩井郡御知行所
- 恩地 荒金
- メ二拾ヶ村

一關長門守様御感狀

一通

長門守様より被下置候御感狀には福留佐衛門と有之折紙には津村佐左衛門と有之折紙には津村佐左衛門と有之候是は暇乞捨にし

て立退き候もの故隣國を津村と被 仰付候かとの事  
 一 關長門守様は伯州日野郡黒坂の御城主御知行高六萬石(編者曰五萬石の誤か)  
 一 福留佐左衛門は森武藏守忠政公に相勤候節は福留彌兵衛と申し大阪御陣之節莫大之手柄仕候得共御加増無之に付暇乞捨にして備中水田へ立退き名を佐左衛門と變名致す  
 一 關長門守様御内田村左馬と申す人馴染に付黒坂へ參候處左馬對面家老柴原監物と相談の上佐左衛門被差留知行三百石鐵砲三拾人之頭番頭に被 仰付相勤申候其後關之御家斷絶に付浪人作州へ被歸居申候  
 飛脚差遣候右侍共立退候に付其後屋敷杯井町中之番手堅仕置被申付候段祝着に候爲加増米納百石令扶持候大阪におゐて御陣請勢より先懸け被致就中櫻の御門前にて組討手柄の様子左馬見申通具に言上届無比類義共不淺於歸城之時に所領折紙可宛行候委細者柴原將監可申入もの也  
 元和二年六月三日 長門 一 信 判

津村佐左衛長との

猶以鐵砲之者三拾人其方へ申付候分相心得可被申候以上  
 爲感恩日野郡之内貳百石 小江 尾村  
 百石 宮 市 村  
 合三百名

右令扶助畢全可致知行もの也

元和三五月十日

一 信

判

福留佐左衛門殿

一作州天領の内信助村と申在家に福留與市右衛門と申て當村庄屋役相勤罷在黒坂より信助へ道程七里  
 附此處に外用事も有之清水半左衛門罷越兼而聞及申候左之三通拜見致度と及所望候處與市右衛門承知仕候と麻上下着用に而御本

紙三寶に載せ至極大切に致差出す半左衛門拜見終て右御紙之通寫し貫ひ取歸候に付記す  
 一元祿年中森内記殿代國中之折紙感狀所持之者御尋有之佐左衛門忝五左衛門より寫し差出す

一 森武藏守様御折紙一通知行高參百五拾石

一 關長門守様御折紙一通知行高參百石

眞庭郡史抄

關長門守武具庫 久世町大字久世山根に在り

備考 作陽誌參照

在久世村山根長門守姓關谷一信(註關一政)初居勢州龜山城慶長十二年(註十五年をとる)遷伯州黒坂奉邑三萬五千石(註五萬石)同十七年家滅武器若干存在久世村民家不詳其所由焉當時上使島彌左衛門阿部四郎五郎山田五郎兵衛來而督之後年郡主事武藤庄右衛門恐火災而籍藏久世村米倉寛文二年正月縣令田中作右衛門新造武庫與監使山村安右衛門錄其品數從于此島銃差多貞享五年春上命大降諸國檢銃於是出庫中之器盡輸于府城火筒銃藥銃彈再納之城北礮庫其餘武器皆集而在北門樓上長谷川甚右衛門監之渡邊彦四郎奉行之總目如左

渡邊彦四郎目錄簿帳

一、八十九挺 臺鐵具不揃

内五十六挺小筒 三十二挺中筒 壹挺大筒

一、二十一挺 臺許鐵具少有之

内 拾壹挺小筒 拾挺中筒

一、正味百九十九貫八百目鐵砲藥十五箱に入

- 一、正味卅四貫四百三十目同玉大小色々二箱に入
  - 一、鐵砲藥臺共四貫目有之
  - 一、正味十三貫二百目箱數六つコモ包壹つ
  - 一、火矢矢藥腐れ物壹箱
  - 一、長柄槍十五本、但し身なし一からげ
  - 一、長柄三十九本、但し身なし四からげ
  - 一、長柄十八本、身なし折もの一からげ
  - 一、古道具三箱腐り破れ物壹包
  - 一、請箱三箱へだけ物壹包
  - 一、鐵砲の革袋壹箱、但腐れ物
  - 一、火繩壹箱、但腐れ物
  - 一、古矢高八百七十八本、但四箱
  - 一、張笠百七十九、但破れ物二箇
- 内四百四十一本根有り、三百二十九本木銚百八本根なし。
- 右者關長門殿武具今度長谷川甚右衛門改相渡請取申候鐵砲之藥火矢藥硝北之藥硝御藏は入置申候其他之諸道具は北之惣門之二階に  
入置申候以上

貞享五年辰三月十六日

玉置仁左衛門殿

二階堂小兵衛殿

渡邊彦四郎

二、福田氏の治世

關氏について池田下總守しばらく黒坂に在城せるが、(黒坂開元記黒坂城物語參照)寛文元年より明治二年に至る二百餘年間は、因州侯池田氏家老、福田氏黒坂陣屋に治す。(陣屋圖等後出。)知行は三千五百石にて、本郡十八ヶ村を頃せし事等は前掲、黒坂開元記に明なり。その九年藩主綱清公領内巡國黒坂に入られしこと山上家系圖にあり。



地頭福田家墓

福田氏は、平素在府して黒坂へは城奉行を駐在せしめたり(幕末に長谷部甚平あり。)元治元年、彼有名なる因幡二十士が黒坂泉龍寺に幽閉せらるゝや、親ら入城して、警固の任にあたり。當時の實情を盡せるものに長谷部家文書「御地頭福田様御入城に付諸記録」あり。

因に福田家菩提寺は鳥取一行寺なるも、左の二世は遺言により黒坂に葬り、同宿光西寺にて弔祭を執行し來れり

(傳記參照)

福田筑後守久武 享保元丙申八月十五日病卒

福田丹波守久寧 文政元戊寅八月病卒

兩氏の墓は宿後山麓にあり。規模頗雄大也。一段下に長臣山上半太夫の碑あり。享保十一年十月十九日病卒とあれども殉死せるものなりと云傳ふ。

御地頭福福様田入城に付諸記録

(黒坂長谷部家文書)

一御地頭福福丹波守様御當所御入城被爲遊先年も寛文中に御先代御當所御入城有之由傳承仕候處其後良久敷御入城も無之處漸當年迄百九十三年にして安政六年巳未三月晦日ニ御當所ニ御入城被爲在候次第御入城之節二部宿迄者御忍之體ニ而二部宿方晦日正四ツ時ニ御出馬本供ニ而御越當所和田河原壹本杉より格式行列正御入被爲成御給所神主并ニ諸役人者天郷川前後迄麻上下着し御



黒坂福田家陣屋地趾

出迎致神主者御家臣方略衣與御諭有之ニ付麻上下着し供者者黨草履取兼持以上三人召連當所正法寺妙見堂北側迄御出迎致申候人別長谷部典勝次席ニ津地安原村神主根宿梅林和泉守三席ニ榎村神主長谷部謙岐四席ニ上代下代村神主古市村神主山根造酒五席ニ霞櫻子小原村神主相見伊豆以上五人夫々ニ名札相調御奏者役差出し候處右御奏者方言上ニ御領所之神主長谷部典膳始め何連も御出迎え被申上且又梅林佐渡守者奉仕客大明神鳥居前ニ而御出迎致候扱其日七ツ時御歡御覽ニ右人別同道ニ而御屋敷罷出且又御藏屋數ニ御役所有之御家臣役大森唯太殿御出番有之夫へも御歡申上候

一四月朔日御城内氏神聖權現并ニ太神宮御兩社へ御社參有之由被 仰付候得共御上様ニ少忌服之御差支有之由御町奉行松尾恭平殿より以使者被申越則日延ニ相成候故御佛參有之此時光西寺之儀者燒失ニ付泉龍寺ニ御位牌を願被居是江御佛參有之候

一同二日ニ者御林山始備中國境御見分有之其序ニ瀧山龍王宮江御參詣有之候

一同四日ニ者御祈願所漆原村大歲太明神江御遠馬掛與申略供ニ而漸主從八人者御馬ニ而并ニ城奉行長谷部桂一目代大塚九兵衛其外足輕以上十五人御社

參有之御神前ニ爲御初穂金五十疋献上且那樣者拜殿ニ御進有捧奉幣御神樂所ニ而奏神樂祈念仕候夫方御給所霞村迄被遊御遠馬候一六日於御殿大廣間御目見被仰付則登城致御蓋頂戴仕候其節爲御土産御致付ニツ祖蓋頂戴仕候右登城之節供者御出迎之供與同候也

同日當方より献上仕品先産社聖權現并太神宮正一位稻荷宮太歲神札上々共尊五百目五本入之扇子箱御神樽御鏡餅壹重右五品献上仕候

同七日太神宮之朝正五時御社參申參り候ニ付直様御戸開居中候處御上様本供ニ而御社參有之太神宮鳥居ニ而御道具御馬并ニ供落夫より隨神門迄御駕則御駕落夫方兩若黨草履取兼持丈け召連御社參拜殿ニ者當所御家中御家臣始家來之面々御詰有之候處御上様御拜殿之前ニ御成有之候得者家中之面々不殘拜殿之前ニ下座有之當方ニ者拜殿ニ詰申候而且那樣江目禮仕直様御内陣へ被爲進被捧奉幣祈念仕候且又爲御初穂金百疋白木之臺ニのせ献上有之御使者御城奉行長谷部桂一家來召連持參有之候御神樂所に而者神樂奏且又且那樣ニ者麻之長上下御着家來之面々者麻上下着して御社參有之候

一同十一日ニハ明正七ツ時之御供揃觸正六ツ時之御出立にて當方御見立申上且御出迎之供同様ニ而御見立申候扱給所神職ハ御見立者不仕只御出迎計ニ而御目見御土産等も無之候右且那樣十一日程之御逗留ニ而御逗留中二日ニ壹度者役所へ御窺申上候

夫より暫くして頃者文久二戊年方於江戸異國と交易初り夫ニ付長州一亂相發り候而方又々黒坂御城爲御警衛于時文久三年癸亥十一月十九日ニ福田丹波様并ニ御養子造酒様御二方御入城被遊候節當方共御出迎仕候供者若黨草履取長柄持右之供ニ而且者麻上下着正法寺妙見堂北側迄御出迎申候且又御歡之義者來ル廿一日御殿大廣間におゐて申上候其節進上品ニ大鯛一尾五本入扇子箱献上仕候其節御家臣役岸井司馬太殿尙又大目付役古田仙衛門殿右二人にも三本入之扇子箱肴料として銀札四匁ツ、進申候夫方御上御二方様御越年被爲遊候且又先例之通御殿御釜拂十二月廿六日從御役所町奉行佐藤仙兵衛殿方御書ヲ以被仰渡候ニ付廿八日ニ御殿御釜拂狩衣風折烏帽子ニ而執行仕候御殿大いり之間ニ而執行致候先例ニ御座候處少シ御差支有之様ニ付御臺所ニ而執行仕候其節御城内氏

神聖權現太神宮正一位稻荷宮右三社木札ニ相認メ御殿三之間ニ相納候様被仰付候間相認メ御釜拂之節相納申候同月大晦日歳暮之御社參御代參ニ而安來忠三郎と申徒士社參被致爲御初穂金五十疋御豐居様方銀壹兩献上有之候翌年元治元年甲子正月三ヶ日ニ者年始御祝詞御殿於大廣間申上尙又御目見御蓋頂戴仕其節も麻上下着供廻り者如前にて致登城候來る六日ニ者朝正五時太神宮御社參被仰渡即用意仕候處爲御使者安來忠三郎と申徒士家來召連御初穂當家江持參有之爲御初穂金百疋是ハ御當職福田造酒様方献上尙又御隱居様方銀一兩献上有之右正五時御當職様御社參御神前ニ而捧奉幣直ニ御歸城又直ニ御隱居様御社參又御神前ニ